

# 手銭家資料を活用した

# 江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業

平成26年度 出雲文化活用プロジェクト実施報告書



## 出雲文化活用プロジェクトについて

出雲大社のほど近く、神迎の道に面して居を構える手銭家は、江戸時代前期に大社へ移り住み、酒造業の傍ら御用商などさまざまな商売を営むとともに、江戸時代中期から明治維新までの間、長く大年寄、御用宿などを仰せ付かってきた。

このような事情もあり手銭家には、公務、村の様子や天変地異、商売の記録、子供の誕生や冠婚葬祭などさまざまな出来事を、宝暦年間から明治初期までの当主が書き残した『萬日記』や、延享三年から明治初期までの公文書等を写した『御用留』をはじめ、未整理の資料も含めて膨大な文書類が残されている。

手銭記念館では、これまで何度か、これらの資料を手がかりに江戸時代の大社の様子を考える企画展を開催してきた。

また、島根大学法文学部山陰研究センターと手銭記念館は、平成十七年から手銭家の蔵書に関する調査を継続して行っており、近世資料に関して言えば、これまでに約六五〇点、一〇〇〇冊あまりの蔵書と約一〇〇〇枚の文芸関係資料（短冊、一枚摺等）を確認し、順次、島根大学附属図書館のアーカイブ上で公開してきている。

このような展示と調査の過程で、手銭家に残されている大量の文書が、江戸中期から後期にかけての大社町に関する様々な側面を詳しく記録し伝える貴重な資料群であることが改めて分かってきた。

そこで、調査研究と資料の活用をより一層進めるために、島根大学法文学部山陰研究センター、島根大学附属図書館、手銭記念館が連携して『出雲文化活用プロジェクト』を発足させた。

「平成二十六年文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」の助成を受けたこのプロジェクトは、江戸時代の歴史的、社会的、文化的な研究において大きな意味を持つと考えられる手銭家資料を整理研究・翻刻・公開することによって、江戸時代の大社における生活文化や文芸活動などの様相を広く地域市民と共有し、また、大社町の町おこしや振興への新たな材料や付加価値を提供することを目的としている。

今年度は、資料の調査研究を容易にすることと『萬日記』の全翻刻に取りかかるとともに、蔵書及び文書のデジタルデータ化を進めることとし、撮影したデータを活用して『萬日記』翻刻の下読み作業を開始した。

また、蔵書調査によって少しずつ分かってきた、江戸期の出雲地方の文芸活動を紹介する「特別企画展 江戸力―手銭家蔵書から見る出雲の文芸―」を開催した。

この企画展では、江戸時代、当地でも様々なジャンルの文芸活動が大変盛んであったこと、それらは、出雲大社の存在も他地域とは少し異なった独自性を持っていたこと、手銭家所蔵資料がこれらを具体的に示す貴重な資料であることを、展示だけでなく公開講座・シンポジウム・ワークショップ等を通じて広く知ってもらうことを目的とした。

出雲文化活用プロジェクト実行委員会

公益財団法人 手銭記念館

島根大学法文学部山陰研究センター

島根大学附属図書館

## 目次

まえがき	一
成果発表表	
特別企画展 江戸力―手銭家蔵書からみる出雲の文芸―	三
展示概要	四
出品リスト	一五
連続講座	一七
論考 手銭家蔵書と出雲の文芸活動	一八
手銭家歴代の和歌活動	二四
江戸時代末期の大社歌壇	三二
芦田 耕一	三二
伊藤 善隆	三八
俳諧史の中の出雲・大社・手銭家	三八
ワークシヨップ	四八
シンポジウム	五〇
調査研究	
デジタル化資料リスト	七二
『萬日記』翻刻化	七四
総括	七五

# 特別企画展

## 江戸力 えどりよく

### ―手銭家蔵書から見る出雲の文芸―

◎会期 平成二十六年十月四日～十二月二十一日

◎会場 手銭記念館 第一展示室

◎主催 出雲文化活用プロジェクト

公益財団法人 手銭記念館

島根大学法文学部山陰研究センター

島根大学附属図書館

◎後援 国文学研究資料館

この企画展では、和歌と俳諧を中心とした当館所蔵資料によって、大社における江戸時代の文芸活動の様相や変遷をたどることをテーマとした。

これまでの蔵書調査で、手銭家には三代当主・季硯以降、各代当主をはじめとした手銭家の人々、大社の人々が和歌や俳諧など様々な文芸をどのように学び、鑑賞し、創作していたのかということをも具体的に示す資料が、豊富に蓄積され残されていることが分かってきた。

これらの資料は、当時の人々が、全国各地の同好の士や宗匠らと積極的に交流しながら、出雲という地の歴史的、文学的な位置づけを強く自覚し、文芸史の流れに沿った文芸活動と独自性のある活動という二つの様相を保ちつつ柔軟に文芸を楽しみ、真剣に学んでもいたことを雄弁に伝えてくれる。

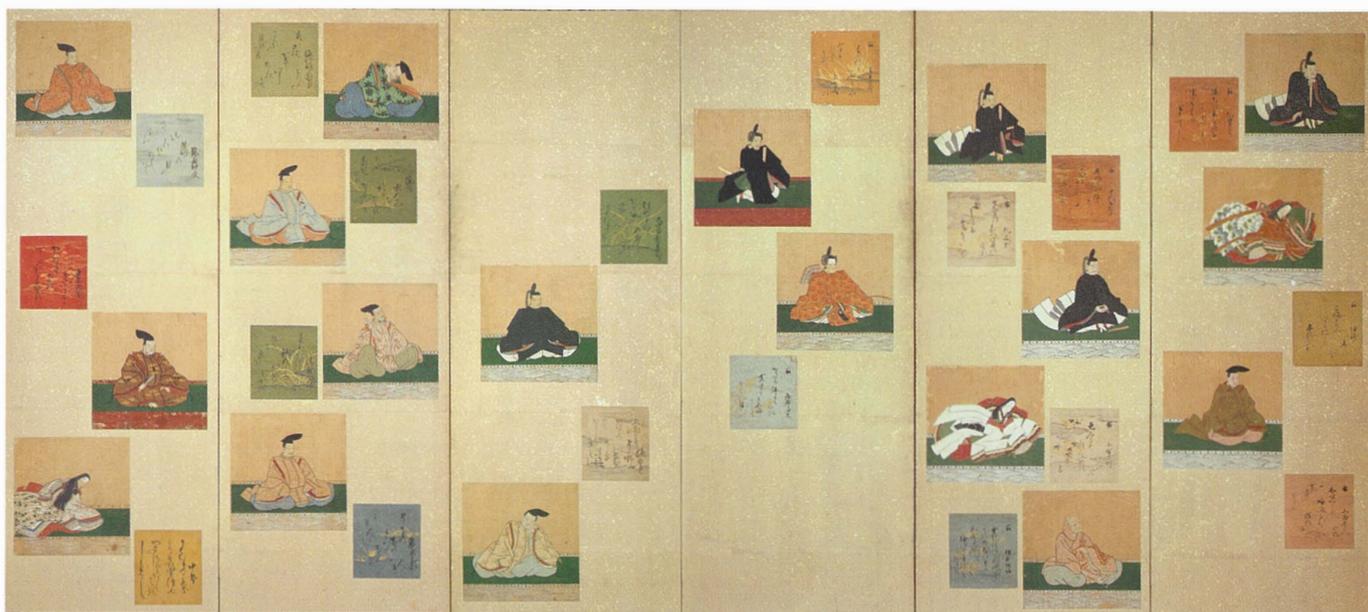
また、手銭家に伝来する三十六歌仙屏風、三十六歌仙画帖、奈良絵本を展示した。文芸資料の豊かさからみて、これらの作品は絵画として楽しまれると同時に、文芸資料としても十分に鑑賞され利用されていたと考えられるからである。

【成果公開】

三



主催：出雲文化活用プロジェクト  
公益財団法人 手銭記念館 島根大学附属図書館 島根大学法文学部山陰研究センター（島根県歴史文化センター） 後援：国文学研究資料館



三十六歌仙屏風

江戸時代前期

三十六歌仙とは、十一世紀初め、藤原公任が選んだ三十六人の歌人のこと。公任は、それぞれから三首または六首ずつ歌を選び、計百五十首の歌集を編んだ。金銀泥などで下絵を施した様々な色の料紙に和歌を散らし書きし、歌仙絵と合わせて貼り混ぜたこの屏風は、江戸時代前期のものと思われる。  
 萬日記には、寛政元年（一七八九）不昧公の弟・駒次郎の宿を仰せ付かった時の部屋飾りや、六代・白三郎の婚礼の室礼として用いられた記録が残る。



三十六歌仙画帖

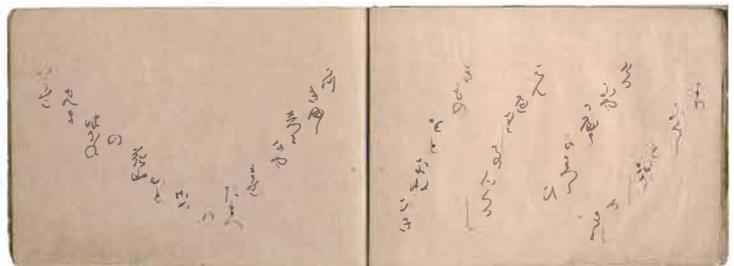
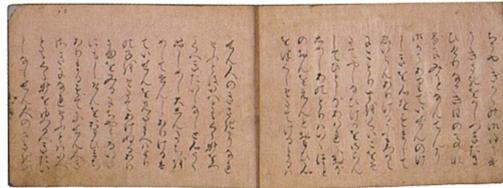
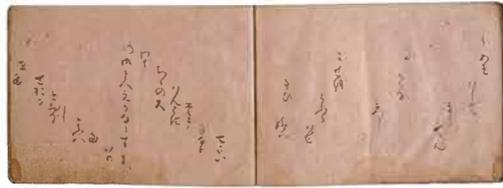
江戸時代中期

この画帖は、関白を務めた一條冬経、霊元天皇の皇子であった勳修寺宮濟深釈をはじめ、十七世紀後期、京都歌壇に名を連ねていた公家・三十六人の手による三十六歌仙の和歌と土佐派の細密な絵とを組み合わせた画帖で、何らかの意図を持って特別に仕立てられたものとも考えられる。  
 このような作品が伝来していることから、和歌をはじめとした文芸に対する大社の人々の関心の高さが窺われる。



【成果公開】

五



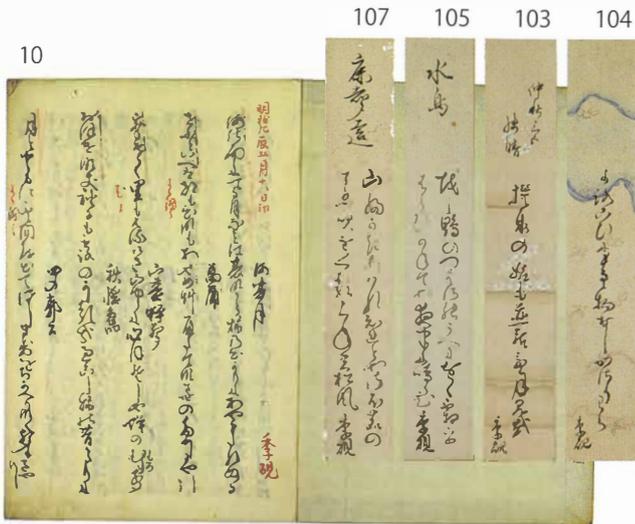
奈良絵本『熊野の本地』  
江戸時代

「奈良絵本」は室町時代から江戸時代前期にかけて多く作られた。上質な絵の具で細密に描かれたものから泥絵の具を用いた素朴なものまで画の質や幅は広く、内容も御伽草子や武者物、宗教物など様々である。

『熊野の本地』は、本地物（神社寺院の縁起を説く話で、神は仏の仮の姿であるとする）の御伽草子。

手銭家には、全五巻のうち、一、三、五巻の三冊のみが江戸時代から伝来する。どの巻も散らし書きが多用されている。

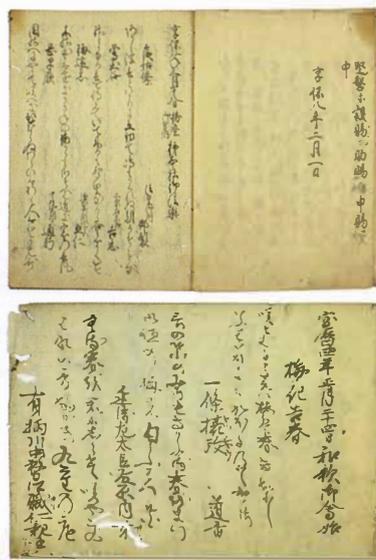




手銭季硯の和歌添削帖と発句・和歌短冊

季硯は、手銭家三代。

「白三郎」、「白澤園」という名称は、彼の代から使われ始めた。季硯が書き残したおおくの和歌、俳諧資料は、江戸時代中期、この地方でどのように文芸活動がおこなわれていたのか具体的に知ることができる点でも貴重である。



7 『播磨御奉納柿本社御法案』(上) 8 『和歌御会始』(下)

堂上(公家)による歌会などの記録は、筆写されて地方にも拡散していった。これらの資料は、上流階級のものであった和歌が、次第に一般庶民へと広がっていった様子を物語っている。

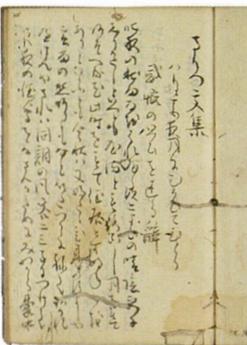
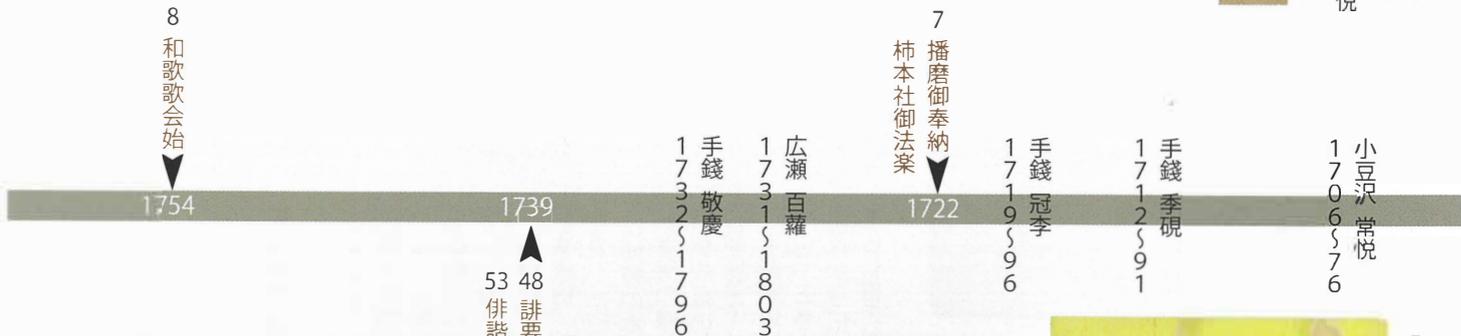


3 和歌短冊

小豆沢常悦

【成果公開】

六

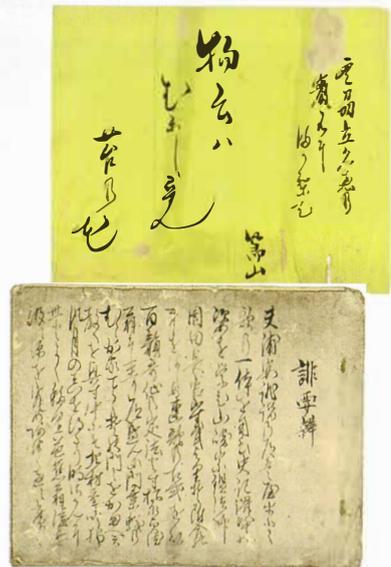


65

『せりつ文集』  
手銭季硯による雑文集。広瀬百羅、同時代の俳人・中島魚坊などについての記述もある。  
「せりつ」は、百羅の号「養笠」から採っているとされる。



53 『俳諧すがた見』  
「代山楼主」に与えられた、不識庵節山の手によると思われる俳書。大社の俳諧の中心として、杜千・李夕の名が挙げられている。



47 発句 不識庵節山

48

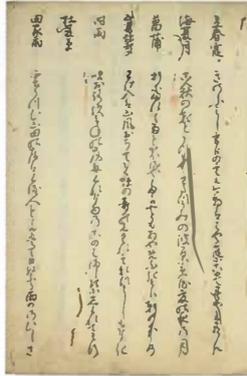
『誹要辯』 元文四年五月序  
淡々門の不識庵節山が、杜千に与えた伝書。  
杜千の俗称や履歴は未詳だが、『梅日記』(延享二年刊)に、「出雲 大社」の俳人として入集する。  
手銭家伝来の俳諧資料中、最も古い時期のものの一つ。

45 『点取帖』  
六代藩主・宗衍(雪彦)をはじめとする八人による百韻の連句で、浪華五彩堂が点者。享保期にはこのよつな点取俳諧が大流行した。



114 手銭有秀肖像

手銭家五代・官三郎の肖像画。名は有秀。白澤園、衝冠斎、薄月庵などと号した。篆刻、面打ち、絵画など多くの趣味を持ち、文芸以外の趣味には雅硯の号をおおく用いている。



手銭敬慶の和歌添削帖と和歌短冊  
敬慶は、手銭家四代。名は此三郎。敬慶の署名がある蔵書は、八代集など歌謡関係の書籍ばかりである。和歌以外の文芸の形跡がない点では、歴代当主の中で異色ともいえる。

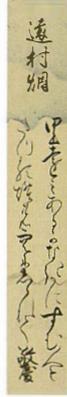
112



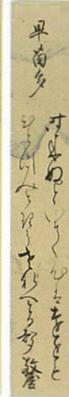
60

和歌短冊 長康  
俳諧有也無也之関 (冠季印)  
蔵書の中には「冠季」印を押された俳書が、二十冊あまりある。印は数年前に見つかっていたが、二〇一四年「冠季」の号と辞世の句を彫った墓石が手銭家分家の墓地にあることがわかり、「冠季」は三代季硯の弟、兵吉郎長康の俳号であることが判明した。

110



111



【成果公開】

七

手銭有秀  
1771, 1820

日々庵 浦安  
1765, 1846

千家俊信  
1764, 1803

1760

49 蕉門発句十五味  
62 俳諧之連歌

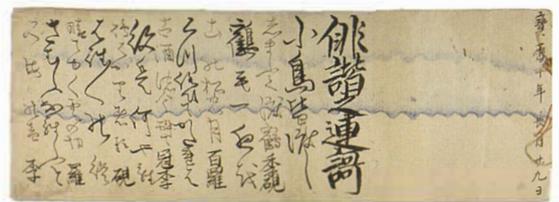
1758

63 葡萄棚

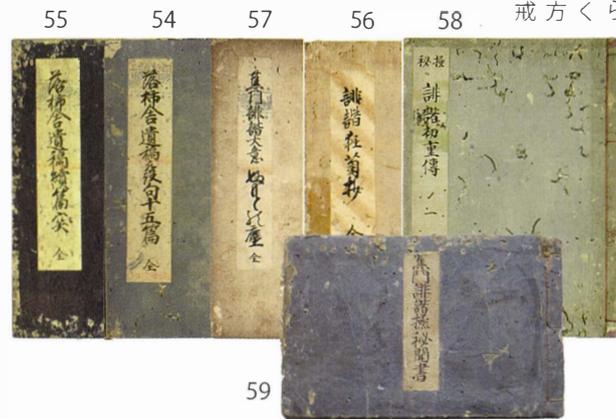
49 『蕉門発句十五味』  
発句を「十五味」に分類して論じたもの。  
元もとは芭蕉が去来と丈草にのみ伝えた教えで、それを、京都に遊学した百羅が去来の甥の空阿から伝授されたものという。



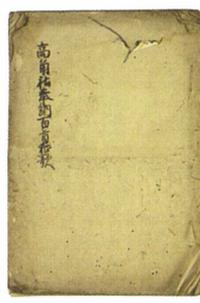
百羅が本社に持ち帰ったと思われる落柿舎系の俳書、あるいはその写本  
これらの俳書の中では、〈俳諧こそが正統である論拠と、現在(当時)の俳諧が如何に芭蕉の本流から外れているかということが、くどいほど書かれているが、一方でそれを声高に述べることを戒める記述もある。



62 『俳諧之連歌』 宝暦十年九月二十九日  
広瀬百羅・手銭季硯・手銭冠季による、三十六韻の連句。季硯は落柿舎系、冠季は美濃派だったのではないかと類推される資料が近年出ている。「俳諧」となっていることから、この連句では冠季が主であったのではないと思われる。



63 『葡萄棚』 宝暦八年五月  
季硯の句帖。季硯の句だけでなく、交流のあった俳人たちの作品も併せて収録されている。季硯は、弟の冠季と共に俳諧活動に力を注いだ。



11 『高角社奉納百首和歌』

安永二年、石見国柿本社五十年御祭祀に奉納されたもので願主は常悦。国造・千家俊勝以下和歌百首の中には、千家・北島国造家、大社社家、朝日郷保・有澤弼通など松江松平藩家老などの武士とともに、手銭季硯、長康、敬慶らの歌も入っている。

『百人一首聞書』  
手銭季硯が書き残した百人一首についての講義録。小豆沢常悦が講師だと考えられる。

10



六代有芳の発句、和歌短冊



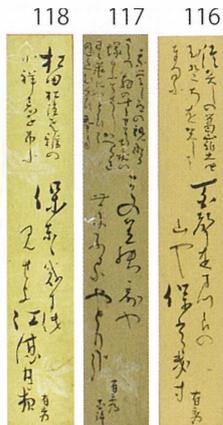
104 手銭有芳肖像

有芳は手銭家六代。本名は忠助、知英。号は野塘(林塘)。今市の旧家・直良から婿入りした。蔵書目録を残すなど、手銭家の蔵書形成に大きな役割を果たした一人。「直良知英」「直良忠助」の署名が入った本もおおいが、婿入りに際して持参したものであろう。和歌、漢詩文、書道などさまざまな分野の書籍に署名、蔵書印が残っている。

- 10 和歌添削集
- 13 愛屋免日記
- 6 百人一首聞書
- 11 高角社奉納百首和歌

1773 1772

五代有秀の発句短冊

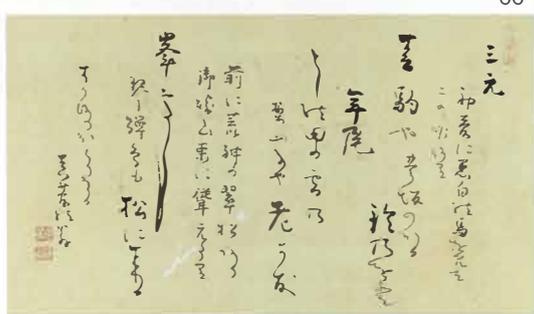


83 出雲筵

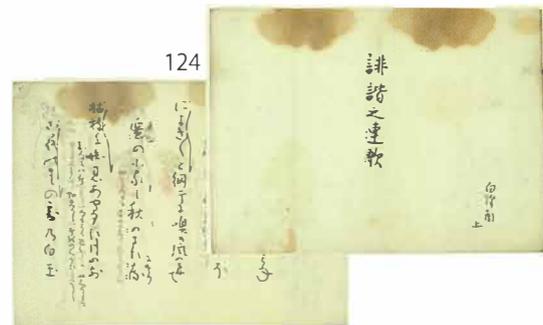


手銭有芳(野塘)  
1788~1843  
50 祝儀の句文

島重老  
1792~1870  
59 蕉門誹諧  
極秘聞書



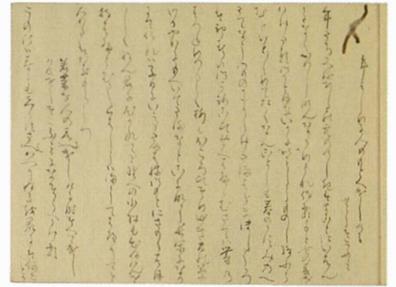
『誹諧之連歌』 白澤園  
手銭有秀(五代)による独吟の連句詠草。点印が押され丁寧な添削も施されている。添削者は百籬。または浦安ではないだろうか。



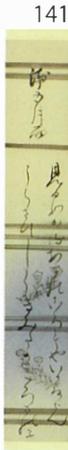
日々庵浦安による発句  
広瀬百籬の子。本名春尚。八洵翁浦安、養笠の翁などとも号する。北島家から時習館を賜った。当時の人物誌等では浦安に関する詳しい記述は少ないが、手銭家にはおおくの俳諧関係資料が残っており、百籬の後、宗匠として出雲の俳諧の中心であったことがわかる。



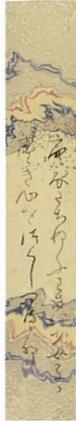
20 かのたがたの消息うつし  
さの子が、田中清年、富永芳久、  
中臣典膳、佐草美清など様々な  
人とやりとりした手紙と返事を  
書き写した綴り。



19 ちとせの舎御せうそこ  
さの子が、千家尊澄（ちとせの舎）  
の手紙を写したもの。和歌を学ぶ上  
での示唆など、文芸についての記述  
も多い。さの子宛ての手紙ばかりで  
はない。



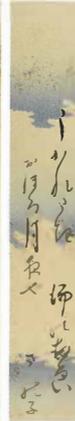
141 さの子の和歌・発句短冊



142



140



139



135 さの子肖像 自筆短冊貼付

手銭家七代・有頼の妻。十四歳で今市の旧家・直良から嫁いだ。息子の  
安秀は養子。  
夫と共に、俳諧、書を中臣典膳に学び、和歌は典膳だけでなく田中清年、  
千家尊澄らにも教えを請い、俳句、和歌共に秀でた。当時の歌集、句集  
に多くの作品が選ばれている。当時の書簡や短冊などからは、随分可愛  
がられ慕われていた様子がうかがわれる。

1798~1867  
広瀬 茂竹

1804~1863  
中臣 典膳

1805  
▲61 あきのせみ

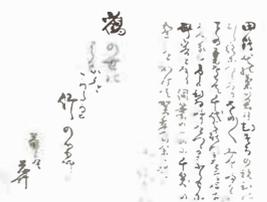
1809~1867  
手銭 有頼

1813~1862  
富永 芳久

1813  
▲70 萬家人名録

【成果公開】

九

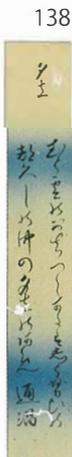


71 祝儀の句文 広瀬茂竹  
広瀬茂竹は百羅の孫。浦安の子。  
名は清左。落柿舎五世を名乗る。  
父に学んだ後全国を游学。尺八  
も上手く、雅楽之輔とも号した。  
万延元年北島家より「北」字を  
賜り北広と改姓した。

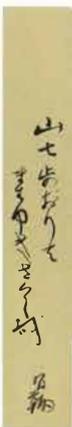


149

狂歌歳旦 古史抜定  
典膳は、和歌、狂歌、俳諧、  
書、易など諸芸に秀で、和  
歌は中臣正蔭、俳諧俳画は  
半漁舎六村、狂歌は古史抜  
足などの号を用いた。  
実家は醤油醸造を営んで  
いたが、父は料理人に転職。  
典膳は、千家俊信、浦安ら  
に学んだ後、諸国を游学して諸芸を修めたいらしい。三十歳頃大社へ戻り、  
千家家禰宜格として、子弟の教育にもあたった。  
手銭家に残る資料からは、手銭有頼・さの子との親しさが格別だった  
ことがうかがわれる。



138



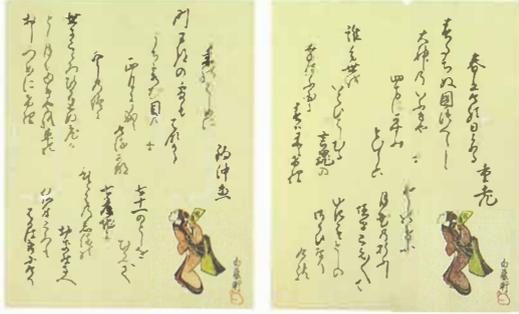
137

手銭有頼の和歌・発句短冊 『不老山紅葉記』  
有頼は手銭家七代。さの子と共に和歌、俳諧  
などにいそしんだ。  
『不老山紅葉記』は中臣典膳、島重老、広  
瀬茂竹、田中千海らと共に紅葉狩りに行き発  
句、和歌を楽しんだ記録。その他にも、酒席での奇書と思われる掛物や、  
宴や歌会を催したことを窺わせる詞書のある短冊などいくつもあるこ  
とから、有頼・さの子がさまざまな点で、文芸活動に関わりバックア  
ップもしていたことが推測できる。



143

29(上2点)



和歌・狂歌歳旦(島重老) 29・30 共に

17

24

25



30(下2点)



重老は大社上臣・島家二十六代。号は櫛の舎。千家俊信に歌道を学び、千家尊孫と共に江戸末期大社歌壇を牽引した。これらの和歌・狂歌は、歳旦の祝いとして配ったと思われ、俳諧で流行った歳旦一枚摺が、地方の和歌の世界でも楽しまれていたことを示している。「釣沖魚」は重老の狂名である。

『丙辰三十六歌撰』 富永芳久編 安政三年出版  
杵築をはじめ松江をも含む出雲国の三十六人の和歌を一首ずつ選んだもの。  
『戊午出雲五十歌撰』 富永芳久編 安政五年出版  
同じく出雲国の五十人の和歌を一首ずつ選んだもの。  
『歌神考』 千家尊澄 文久二年九月ころ刊行  
『出雲国名所歌集第一編』 富永芳久撰 嘉永十六年  
『花のしつ枝』 (出雲国杵築現存五十歌撰) 富永芳久編 安政四年

26 類題八雲集

80 手曳能満津

81 夢路農業校

1842 1841 1839 1838 1832 1830 1827 1826 1821

66 発句 (日々庵浦安)

74 一枚摺 (清地連)

73 一枚摺 (三刀屋連中)

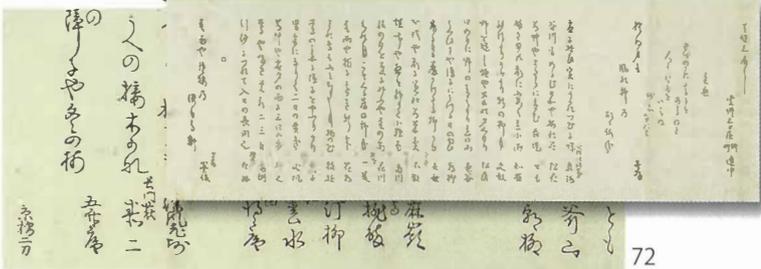
72 一枚摺 (三刀屋連中)

82 蓮のうてな

123 追善華鬘粟

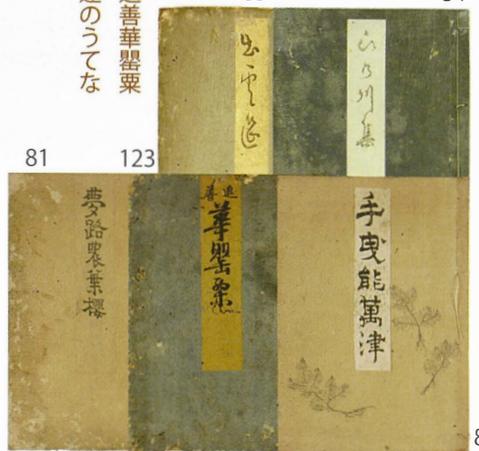
83

84



一枚摺(雲州三刀屋連中)

上は天保三年(1832)、下は文政十年(1827)のもの。左下隅にある「京橋二刀」という文字から、橋屋治兵衛という京都の有名書肆で刷られたことが分かる。下の一枚摺の末尾句の作者「五竹庵」は、大坂の宗匠。



出雲地方で作られた句集・文集

『ひの川集』 奥出雲の俳人・一枝が選者。出雲地方だけでなく全国から句が寄せられている。  
『手曳能満津』 出雲市知井宮町の旧家・山本家の当主・久明(俳号・一釣)の傘寿を祝って作られた文集。跋文は浦安・茂竹。  
『出雲筵』 潜魚坊(中島島坊)撰。「冠李」印が押印されている。この五冊中、最も早く出版された。  
『追善華鬘粟』 手銭有秀追善集 文政四年出版。序文は椎の本花叔、跋文は日々庵浦安。  
『夢路農業校』 古志出身の俳人・椎の本花叔の追善集。花叔は江戸、信州、尾張へ遊学し俳諧を学んだ後、郷里に戻り、終生俳諧三昧に過ごした。

74 一枚摺(清地連) 文政十三年



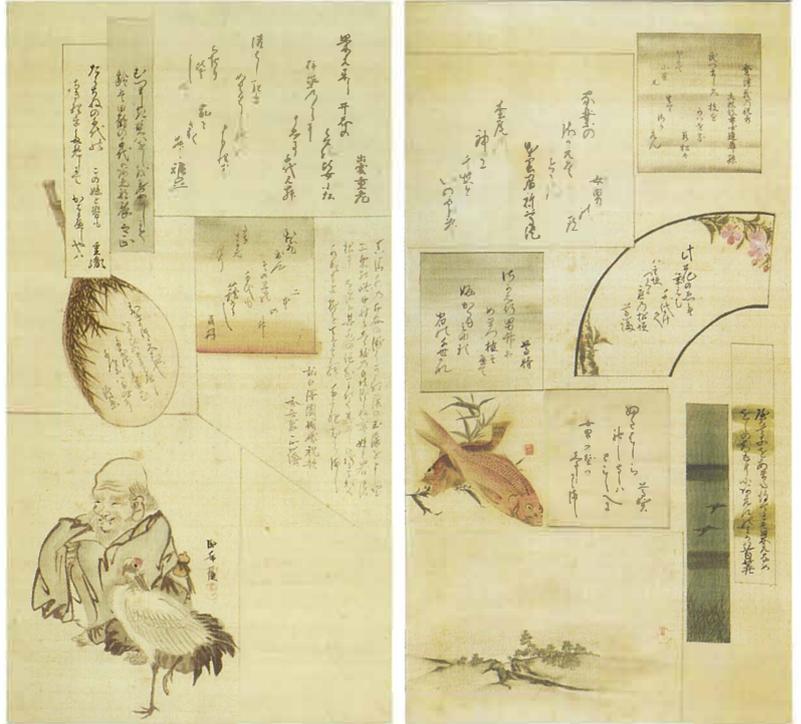
清地連は大社の連。「春之屋」は田中安海(後に千海)。浦安、有芳(野塘)の名も見える。挿絵の「素川」も大社の人物であり、地元で刷られた一枚摺だと考えられる。

【成果公開】

10

15 祝儀寄書 安政四年

手銭家八代・安秀の婚礼に際して、中臣典膳がレイアウトと画を担当し、親交のあった千家家や社家の人々が祝儀の歌を寄書したものの。  
 右・御殿(千家国造家)  
 千家尊孫・千家尊澄・  
 千家尊晴・千家尊賢・  
 千家尊福・千家尊筭  
 左・上臣  
 島重老・島重胤・  
 平岡雅足・中言林・  
 赤塚澄景・千家之正



有頼による一枚摺ぐ、上段部分の版木。  
 一枚摺の上段には和歌、下段には発句が刷られている。



147

146

18 松壺文集

1863

31 詠草綴り 『花濃夢』

1862

17 歌神考

1862

25 戊午出雲 五十歌撰

1858

15 祝儀寄書

1857

23 はなのしつ枝

1856

24 丙辰 三十六歌撰

1856

22 出雲国名所 歌集第二編

1855

1850

【成果公開】

148 上は、ほととぎすを題に二十六人の発句が並ぶ版木。下は、歳旦一枚摺。いずれも「白澤園連中」として、有頼、さの子、安秀、広瀬茂竹、半漁舎六村、田中千海、古川凡和らが入っている。有水、有谷、有柳など、「有」のつく号は手銭家親族と思われる。



145

144

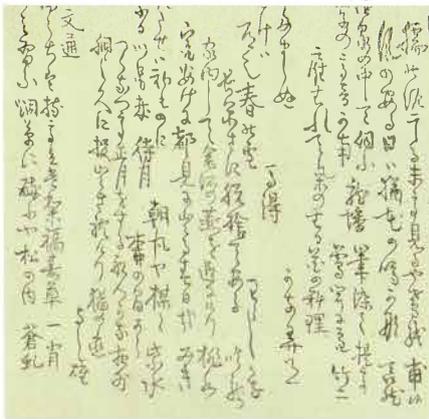
145

一枚摺 (さの子・安秀)

一枚摺 (白澤園)

84 ひの川集

中央の「馬得」は田儀枚井家十二代・運右衛門の俳号。



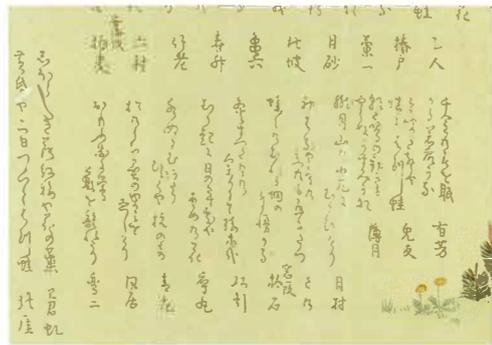
146 一枚摺 (有頼)

上下どちらの一枚摺にも、金沢出身で京都芭蕉屋々主であった、天保俳壇の重鎮・成田蒼蛇の句が載る。著名な宗匠に依頼して、句集や刷り物に句を寄せて貰うことはよく行われた。

79 さの子宛て一枚摺 差出人である月清は、当時の藤間家当主。冒頭に句の載る「芦舎」は、京都俳壇の有力者。



76 大社連中による一枚摺



# 萬日記に残る文芸関連の記述

【成果公開】

一一一

百廿七

浄修社、入心  
奉納奉納

浄修社、入心  
奉納奉納  
浄修社、入心  
奉納奉納

浄修社、入心  
奉納奉納  
浄修社、入心  
奉納奉納

浄修社、入心  
奉納奉納  
浄修社、入心  
奉納奉納

萬日記四番 百廿 【節山師奉納写し】

安永七年（一七七八）三代・季硯が書いた驚神社の奉納額についての記述。不識庵節山が元文四年（一七三九）に奉納したと記された連句の額を写している。元文四年は、『誹諧辯』『俳諧すがた見』に書かれた年記と一致していることから、この頃、節山が大社方面を訪れた可能性は高い。

連句のメンバーでもあり『俳諧すがた見』序文にも名前の挙がる杜千・李夕（杜千李夕はさらし也 子□と陽坡の両子は道の中を得て名人の姿をそなえたり 此地の我力とたのむもの也）らは、大社俳諧史の中で日置風水と、廣瀬百羅、手銭季硯・冠季らの間にある、空白期間を埋める存在かもしれない。

萬日記六番 八十三 【当家四代之主此三郎敬慶御死去之事】  
四代・此三郎の死去に際して寄せられた追悼句。

追悼  
此三郎の死去に際して寄せられた追悼句。

萬日記七番 七十四・七十五 【当家五代主官三郎雅硯尊君御逝去之事】

文政三年五月二十七日に亡くなった五代・官三郎（有秀、衝冠齋）の死から葬儀一切について記された記録に残る、追悼句（左）と、百日の法事で行われた追善誹諧之連歌（下）。

追悼、各一首

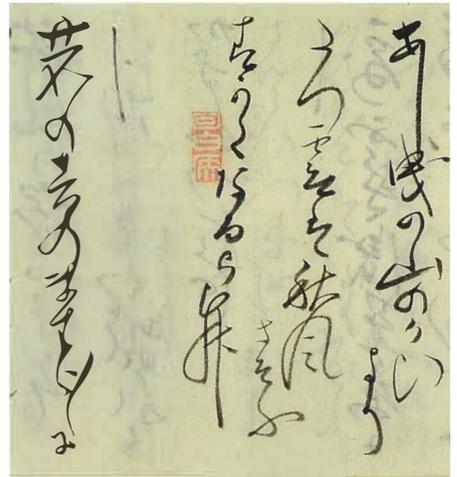
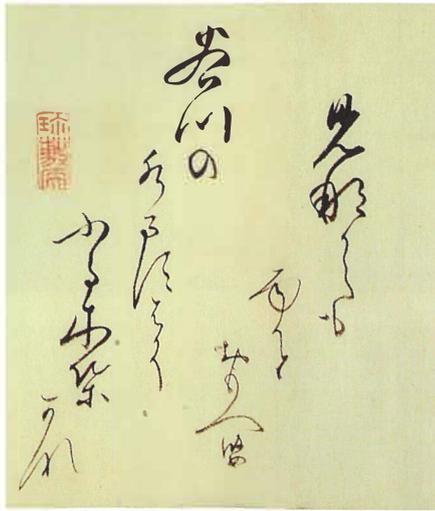
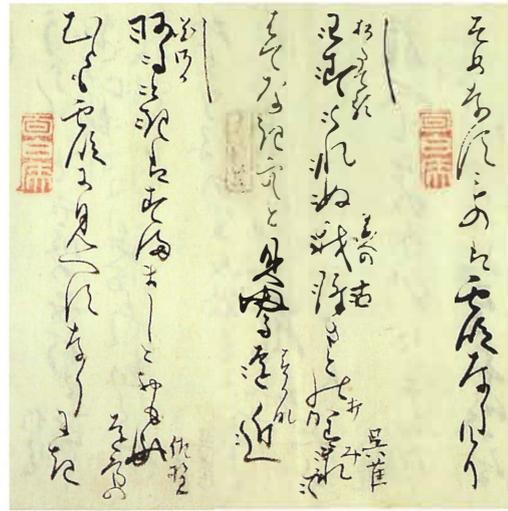
追悼、各一首  
此三郎の死去に際して寄せられた追悼句。

追善誹諧之連歌

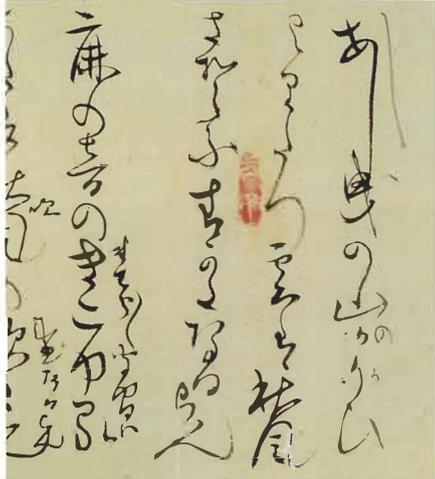
追善誹諧之連歌  
此三郎の死去に際して寄せられた追善誹諧之連歌。

追善誹諧之連歌  
此三郎の死去に際して寄せられた追善誹諧之連歌。

# 江戸後期の詠草



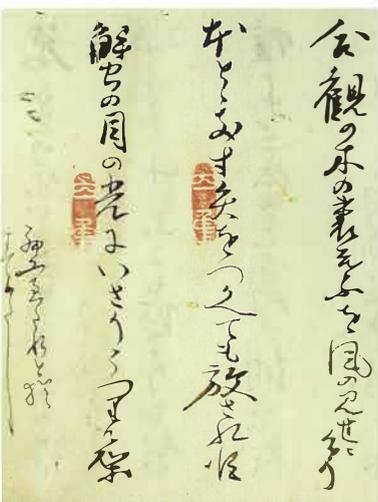
左右とも、さの子の和歌詠草  
異なった点印が押されるが歌は同じである。  
左の詠草にはよりおおくの推鼓が施されている。



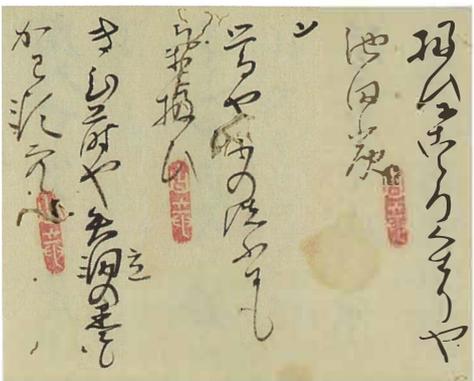
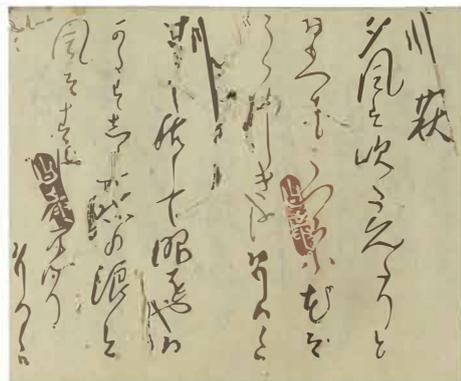
「白亀」文点印  
詠草の印影とは異なるが、「白亀」と刻んだ印が、複数見つかった。



同じ点印（白亀）が押された、さの子による和歌詠草（上）と、発句詠草（下）



詠草綴り『文久二年戊正月／花濃夢／有頼』  
七代・有頼の詠草綴り。同じ綴りの前半に俳諧、後半に和歌が書かれ、どちらも同じ点印が押されて添削されている。  
点印を押した和歌詠草がいくつも見つかったことで、江戸時代後期の大叔ではこのような和歌の添削がかなり行われていたことが明らかとなった。  
和歌と俳諧の両方を一人で指導する人物がいたことを類推させる資料でもある。



点印の押された和歌詠草  
上の二点はさの子など数名による詠草。下の二点はさの子の詠草。いずれも添削と「面白候」「よく調ひ候」「珍敷候」「白亀」など点印が施される。点印が押されるのは本来点取俳諧の形式で、和歌の添削では決して一般的ではない。  
幕末期の当地における歌会の実態と特徴を示す資料である。

# 署名・蔵書印・点印



「冠李」印(実寸)(上)と押印された俳書(下)  
冠李は、三代・季硯の弟、兵吉郎長康の俳号である。左下は「岱青楼冠李印」朱印。又玄斎は別号か。

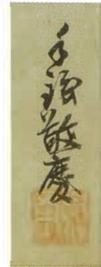
「白澤園」印  
4.5cm四方の特大印。  
この印を押した資料は見つかっていない。



『俳諧通俗誌』



『俳諧御傘』



『類字名所集』



『陸奥衛』

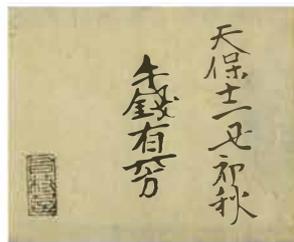
三代・季硯、四代・敬慶、五代・衝冠斎の署名のある本  
いずれも同じ「白澤園」の朱白印が押されていることから、  
この印が代々受け継がれてきたことが推測される。



『草野集』



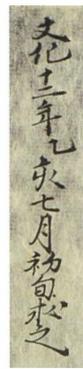
「白枝屋」印



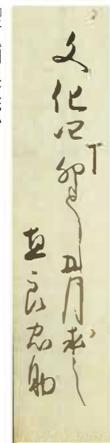
『四季詞林こしあふ起』



「桂園」一印



『清輔奥義抄』



『新撰基経大全』

【成果公開】

一四

六代・有芳の署名、印のある蔵書

直良忠助、白枝屋忠助、手銭有芳、手銭知英と様々な名があるが、皆、六代・白三郎有芳である。和歌、  
囲碁、漢字辞書、俳諧などさまざまなジャンルにわたっている。

七代・有鞆の署名



『東坡絶句』

『四季濃句集』(六代・有芳の  
発句詠草)に押された点印  
添削と選句は日々庵浦安



よく似た点印(実寸)



『点印譜』

「白枝屋」壺形印(実寸)

少しずつデザインの  
違う壺形印が複数  
見つかっている。



俳諧では、いくつかの印を組み合わせることで句に点数をつける点取という採点方法が一般的だった。  
このページで、印の組み合わせによる点数がわかる。

## 展示出品リスト

No	資料名	備考	作者
1	奈良絵本「くまののほんち」		
2	三十六歌仙屏風(一双)	(前期)	
151	烏帽子折物語屏風(一双)	(後期)	
152	三十六歌仙画帖	(後期)	土佐派
3 - 5	和歌短冊	3点	小豆沢常悦
6	百人一首聞書 安永三年四月三日開講		季硯
7	播磨御奉納柿本社御法楽		
8	和歌御会始		
9	和歌添削		
10	和歌添削集		
11	高角社奉納百首和歌		
12	詠草紙		
13	愛屋免日記		
14	松葉日記		
15	祝儀寄書(双幅)		千家国造家・上宦
16	百首御詠		千家尊孫
17	歌神考		
18	松壺文集		
19	ちとせの舎御せうそこ		
20	かたがたの消息うつし		
21	類題真璞集		
22	出雲国名所歌集(第二編)		
23	はなのしつ枝		
24	丙辰三十六歌撰		
25	戊午出雲五十歌撰		
26	類題八雲集		
27	和歌歳旦		田中清年
28	和歌歳旦		津守比由留
29 - 30	和歌・狂歌歳旦	2組	島重老
31	詠草綴り『花濃夢』		手銭有納
32	和歌・発句詠草		手銭さの子
33	発句詠草		
34 - 35	和歌詠草	2点	手銭さの子
36	兼題草稿		
37	和歌詠草		
38	点印譜		
39	六代・野塘時代の発句詠草		
40 - 43	点印	4点	
44	発句短冊		雪淀
45	発句点取帖		雪淀他
46	【萬日記四番 百式】 節山師奉納額写し		
47	発句		不識庵節山
48	誹要辯		
49	蕉門発句十五味		
50	祝儀の句文		広瀬百羅
51 - 52	発句短冊	2点	広瀬百羅(蓑笠翁)
53	俳諧すがた見		
54	落柿舎遺稿発句十五篇		
55	落柿舎遺稿続篇突		
56	誹諧狂菊抄		
57	蕉門誹諧大意 ふもとの塵		
58	極秘誹諧初重傳 一		
59	蕉門誹諧極秘聞書		
60	俳諧有也無也之関		
61	あきのせみ		
62	俳諧之連歌 (宝暦十年九月廿九日)		

No	資料名	備考	作者
63	葡萄棚		
64	松葉日記		
65	さりつ文集		
66 - 68	発句	3点	日々庵浦安
69	芭蕉像 賛・百蘿庵茂竹		画・古市金峨
70	萬家人名録		
71	祝儀の句文		広瀬茂竹
72	一枚摺(文政十年)		雲州三刀屋連中
73	一枚摺(天保三年)		雲州三刀屋連中
74	一枚摺(文政十三年)		清地連
75 - 76	一枚摺	2点	馬得他
77	一枚摺		大社連中
78 - 79	一枚摺	2点	月清よりさの子宛
80	手曳能萬津		
81	夢路農葉桜		
82	蓮のうてな		
83	出雲筵		
84	ひの川集		
85	陸奥衢		季硯署名
86	類字名所集		敬慶署名
87	誹諧御傘		衝冠斎署名
88	芳野行		冠李印
89	四節季寄并去嫌歌		冠李印
90	清輔奥義抄		直良忠助署名
91	新撰碁経大全		白枝屋忠助署名
92	四季詞林こしあふ起		手銭有芳署名
93	桂園一枝		手銭知英印
94	草野集		白澤有頼署名
95	東坡絶句		白枝屋壺印
96 - 100	蔵書印	5点	
101 - 107	和歌・発句短冊	7点	手銭季硯
108	和歌短冊		手銭長康
109	和歌詠草		手銭敬慶
110 - 111	和歌短冊	2点	手銭敬慶
112	和歌集		
113	【萬日記六 八十三】当家四代之主此三郎敬慶御死去之事		
114	手銭有秀肖像		
115	詠草紙		
116 - 120	和歌・発句短冊	5点	手銭有秀
121	【萬日記七番 七十四】当家五代主官三郎雅硯尊君御逝去之事		
122	【萬日記七番 七十五】追善会之事		
123	追善華嬰粟		
124	誹諧連歌		白澤園
125 - 132	和歌・漢詩・発句短冊	7点	手銭有芳
133	手銭有芳肖像		
134	蔵書軸物目録		手銭有芳
135	さの子肖像		
136 - 138	和歌・発句短冊	3点	手銭有頼
139 - 142	和歌・発句短冊	4点	手銭さの子
143	不老山紅葉記		
144	一枚摺		手銭安秀・さの子
145	一枚摺		白澤園連中
146	一枚摺		手銭有頼
147 - 148	一枚摺版木	2点	
149	狂歌歳旦		古史拔足
150 - 1	手銭有頼宛書簡		中臣典膳
150 - 2	手銭さの子宛書簡		中臣典膳

## 連続講座

蔵書調査から分かってきた、大社における江戸時代の文芸活動についての連続講座。蔵書調査に加わっていただいた研究者を講師に迎え、講義と展示室でのギャラリートークによって、手銭家資料の意味と面白さを伝えることを目的にした。

### 第一回「手銭家歴代の和歌活動

―歌壇史上の意義を中心に―

日時 十月十三日 午後一時半～四時  
場所 手銭家和室・手銭記念館第一展示室  
講師 久保田啓一（広島大学大学院教授）  
参加者 十三名

手銭家三代・季硯、四代・敬慶、五代・有秀の時代、小豆沢常悦の指導を受けていたことが、添削や批評の手紙を添付した詠草資料や百人一首に関する講義を筆記した記録等の所蔵資料から、具体的に分かってきた。これらの資料から、大社における江戸時代中期の和歌活動について考える。



### 第二回「江戸時代末期の大社歌壇」

日時 十一月十五日 午後一時半～四時  
場所 手銭家和室・手銭記念館第一展示室  
講師 芦田耕一（島根大学名誉教授）  
参加者 十六名

江戸時代後期、大社歌壇では和歌活動が隆盛を迎え、「円居（まとい）」と呼ばれる会が頻繁に行われ多くの和歌関係書籍が出版された。その中心は本居百長に学んだ千家俊信を師とする、千家尊孫、島重老、千家尊澄、富永芳久らであり、手銭家七代の妻・さの子も積極的に参加していた。



### 第三回「俳諧史の中の

出雲・大社・手銭家」

日時 十二月十三日 午後一時半～四時  
場所 手銭家和室・手銭記念館第一展示室  
講師 伊藤善隆（湘北短期大学准教授）  
参加者 二十六名

大社における江戸時代の俳諧活動については、今まであまり顧みられなかったが、手銭家に残る俳諧関係資料から、江戸時代中期から後期まで興味深い活動が継続的に行われていたことが分かってきた。

落柿舎系俳諧を伝えた広瀬百羅を中心とした、江戸時代中期の大社俳壇と季硯・冠李・有秀ら手銭家各代の活動、また、百羅以前の大社の俳諧の様相を伝える資料を紹介し、大社俳壇の特徴と俳諧史における意義を考える。



台風や寒波とぶつかり参加者が少なかったことは残念だった。それぞれの講座の内容については、論考にまとめた。

# 【論考】 手銭家蔵書と出雲の文芸活動

田中 則雄

(島根大学法文学部教授)

## 一 手銭家歴代と蔵書形成

手銭家は初代の喜右衛門長光が、貞享三年(一六八六)、白枝(出雲市高松町)から大社の地に移り商売を始めたのがその起りであるが、文芸活動との関連が見えるのは、三代季硯(正徳二年(一七一二)～寛政三年(一七九一))からである。季硯は、生死の境をさまよう大病をした際に白山の使いの狐が夢に現れて助かったとして白山を信仰したと伝えられ、白三郎と称し、また「白澤園」の号を用いた。蔵書にも白三郎、白澤園の書き入れや印が残る。そのあと四代の敬慶、五代の有秀、六代の有芳、七代の有頼、その妻さの子に至るまで歴代が文芸活動に携わり、八代安秀のところで明治を迎える。

手銭家蔵書は、全体で六五〇点、一一〇一冊から成る(今後の調査でさらに増える可能性がある)。全体に蔵書印や書き入れが多く、これらが蔵書形成の過程を推定するための手掛かりとなる。以下、蔵書形成の過程を概観する。

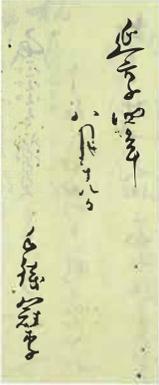
まず冠李という人物が持っていた一群の書物がある。蔵書印で最も多く見られるのが図版1に掲げた「冠李」印であり、また図版2の「俗青楼冠李印」もある。写本『蕉門俳諧 有也無也之関』奥書に「延享四年八月十八日 手銭冠李」と記すことから(図版3)、手銭氏であることは把握していたが詳細は不明であった。然るに今回の共同調査によって、季硯の弟、兵吉郎長康(享保四年(一七一九)～寛政八年(一七九六))であることが明らかになった。



【図版1】 冠李蔵書印



【図版2】 冠李蔵書印



【図版3】 手銭冠李の奥書の



【図版5】 敬慶書き入れと蔵書印(「白澤園」)



【図版4】 季硯書き入れと蔵書印(「白澤園」)

三代季硯は、前述した号「白澤園」の蔵書印を用いる(図版4)。続く四代敬慶も同じ「白澤園」の印を用いる(図版5)。

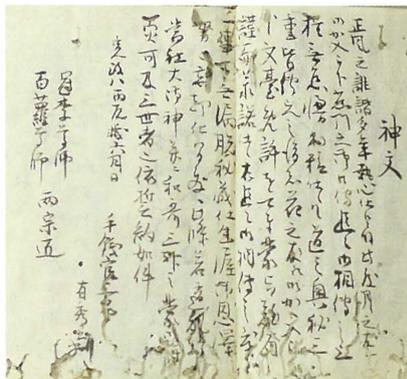


【図版6】 有秀書き入れ(「衛冠斎」と蔵書印「白澤園」)2種



【図版7】 冠李蔵書印2種の上の有秀書き入れ(「四方隣蔵書/白澤園」)

五代有秀も「白澤園」の蔵書印を用いる(図版6の朱白文、墨印)。この有秀の蔵書には、先ほどの冠李から引き継いだものがある。『おくのほそ道』版本(図版7)には、まず冠李の前出二種の蔵書印が捺してあり、その上に被せるようにして有秀が、「四方隣蔵書/白澤園」と、自分の所蔵であることを墨書きしている(この本、他の箇所にも「有秀蔵書」の書き入れがあり、また筆跡からもこの墨書きは有秀によるものと判断する)。



【図版8】 有秀による「神文」

図版8は、『蕉門俳諧極秘聞書』に収める有秀による「神文」。その最後に「寛政八丙辰歳六月日 手銭官三郎/有秀在判」として「冠李尊師 百羅尊師 両宗匠」と記している。即ち冠李は有秀の俳諧の師であり、その縁で蔵書をまとまった形で譲られたものと推測できる。なお百羅こと、広瀬百羅については後に触れる。



【図版9】 季硯蔵書印の上部に有秀蔵書印、書き入れ「白澤園蔵書」

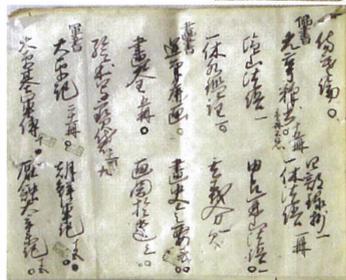
また図版9は、季硯から有秀へと引き継がれたもので、まず下側に「季硯之印」と捺され(写真では不鮮明で読みづらい)、後にその上部に「有秀」と捺された。なお側にある「白澤園蔵書/四巻之内」は有秀の筆跡である。以上のように、三代から五代にかけてまとまった量の書物が集積されたものと考えられる。

続く六代有芳は、『書物軸物目録』なるものを作成して、蔵書の整理点検を行ったという点で注目すべきである(図版10)。例えば「仏書」「画書」「軍書」などと一定の分類を設けて該当する書名を書き上げた上で、「十五冊」などと冊数を記す。また「老冊不見」などと注記し、「引合」という印を捺すなど、所在の点検をしたものと窺える。なおこの目録に見える書目について、現存書目と合致するものも多いが、一方目録のみあって現存しない書目、またその反対のものもある。その事情についての探究は今後の課題である。有芳の蔵書印は、図版11の「白枝屋」、「手銭知英」である。

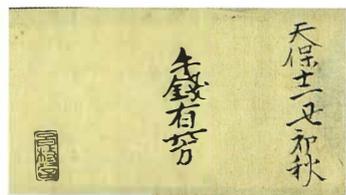
このあと七代有頼、その妻さの子と続く。有頼には図版12の書き入れと蔵書印、さの子には図版13の書き入れがある。さの子については、後に文芸活動の項で取り上げる。この後も近世最後の八代安秀に至るまで集書は続けられた。安秀には書き入れと「手銭満平」の蔵書印(図版14)がある。



【図版12】有頼書き入れと蔵書印(「手銭蔵書」)



【図版10】有芳筆『書物軸物目録』



【図版11】有芳書き入れと蔵書印(「白枝屋」)、蔵書印(「手銭知英」)



【図版13】さの子書き入れ



【図版14】安秀書き入れと蔵書印(「手銭満平」)

## 二 文芸活動と蔵書

以上のようにして蓄積された蔵書全体の構成を見ると、まず和歌、俳諧の書が際立つて多いことがわかる。即ち全六五〇点のうち、和歌が五八〇点、俳諧が一六六点を占める(ただし刊本の歌論書、俳論書などと共に当家の人々による和歌、俳諧の草稿なども一括して数えている)。そして他の文学ジャンル(漢詩文、隨筆、紀行、実録、謡曲、浄瑠璃など)、さらに文学以外の各領域(歴史、語学、漢学、仏教、神道、囲碁、将棋、絵画、華道、書道、刀剣、料理、教育、教訓、医学、薬学など)にまで広く及んでいる。

このような蔵書蓄積の背景として、一つには、藩の本陣をも命ぜられる格の商家に求められる教養という点があったと考えられるが、それに加えて、近世出雲の地で特に和歌・俳諧を中心とした活発な文芸活動が行われ、これに手銭家の人々が加わったということが関係していると思われる。そこで次に、手銭家歴代の文芸活動の跡を辿ってみる。そのピークは二つあり、最初は三代季硯、五代有秀の時代、次は七代有頼の妻さの子の時代である。

### (一) 二代季硯と五代有秀の時代

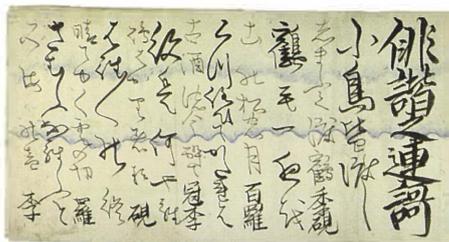
三代と五代の文芸活動は、和歌の小豆沢常悦(宝永三年(一七〇六)～安永五年(一七七六))、俳諧の広瀬百羅(享保十六年(一七三一)～享和三年(一八〇三))との深い交流のもとで行われた。その詳細については、本報告書所収の久保田・伊藤報告を参照されたい。ここでは蔵書形成という観点から要点のみ掲げる。

常悦は松江の人。京都で二条家流の和歌を学び出雲にも来たり住んだ釣月(万治二年(一六五九)～享保十四年(一七二九))を師とする。常悦は大社の地へも赴いて和歌を教授した。百羅は出雲大社国造千家家の代官役であった広瀬家の出身で、京都に出て俳諧を学び、当時の著名な俳人たちと交流するが、最終的には蕉風を拠り所とする。出雲に帰ってからは、俳諧のほか、和歌、神学、国学などを人々に教え、また国造北島家の学問師範も務めた。京都にいた宝暦八年(一七五八)岡崎の空阿のもとを訪れて俳諧の講義を受けた様子を問答録として記した『岡崎日記』が有名である。以下この常悦・百羅との関わりということを中心に念頭に置きながら三代と五代の文芸活動について見ていく。

まず三代季硯の活動について。和歌の創作として、詠歌の短冊が残る。また常悦の編によって安永二年(一七七三)高角社(島根県益田市の高津柿本神社)に奉納された『高角社奉納百首和歌』に、手銭季硯の名で詠が収められている(図



【図版 15】『高角社奉納百首和歌』



【図版 17】季硯、百羅、冠李『俳諧之連誦』

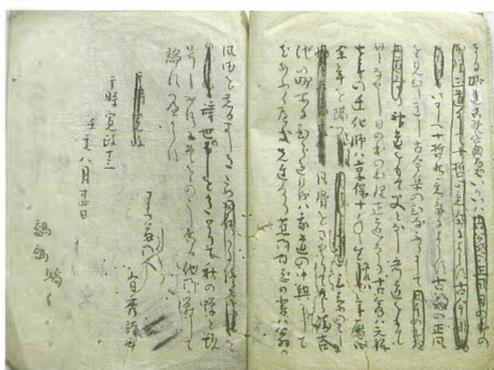


【図版 16】季硯「病後吟」短冊

版15)。なおこの奉納和歌には、ちようどこの頃松江藩の六代、七代藩主に仕えて藩政改革を實行したことで有名な中老の小田切尚足、家老の朝日郷保らの詠も見えている。また俳諧に関しては、発句を記した短冊を多く残している。中に「病後吟」と題して「暇乞した名月をけふの月」という同じ句が書かれた短冊が三枚ある(図版16)。前述した、生死の境をさまよう大病の折に白山の狐による夢のお告げがあつて助かつたという、その時に作成し親交のある人に配るなどした、その残りであろうかと推測する。また弟の冠李、広瀬百羅と共に巻いた歌仙『俳諧短歌行』(宝暦九年(一七五九))、『俳諧之連誦』(同十年)もある(図版17)。

ほか、俳諧に関して、兄の季硯、広瀬百羅と歌仙を巻いていることは前述の通りである。『萬日記』(当家に関わる公的、私的行事や折々の出来事などの記録)の寛政八年(一七九六)四代敬慶死去の記の中に冠李の詠んだ追悼句が収められる(佐々木杏里氏示教)。また、『俳諧本式并色紙短冊之事』には、「冠李」印と共に「延享元年甲子仲秋十四日写之」の記があり、『画家筆要秘記』には、やはり「冠李」印と共に「天明二年寅晩夏書写之」の記があつて、写本の業にも努力している。次の四代敬慶については、専ら和歌に関するもののみが見られ、短冊や一枚物のほか、季硯・冠李と同じく、『高角社奉納百首和歌』にも一首が収められている。

五代有秀は、先ほど挙げた「神文」(『蕉門俳諧極秘聞書』所収)に、「冠李、百



【図版 18】有秀『秋の蟬』序文章草稿



【図版 20】有秀『もくづ集』



【図版 19】刊本『秋の蟬』、有秀による百羅像

羅を両宗匠と称していたが、俳諧の活動が顕著であり、短冊も多く残している。有秀は百羅が没した時の追悼集『秋の蟬』に序文を寄せたが、その草稿が残る(図版18)。なお刊本になつた段階では(文化二年(一八〇五))、文章が大きく改められている。さらに刊本には有秀が描いた百羅の肖像画も収められた(図版19)。後に有秀が没したとき、俳諧仲間たちが集つて『追善華鬘粟』(文政四年(一八二二)刊)を編んで追悼したことからも、彼が出雲俳壇において高い地位にあつたことが窺える。また和文の制作にも取り組んでおり、自作の和文を集めた写本『もくづ集』(文化四年(一八〇七))が残る(図版20)。

以上のように三代から五代にかけて、手銭家の人々は、和歌の常悦、俳諧の百羅と深い交流を持ちながら文芸活動に携わっていた。前述したこの時期の蔵書形成は、この文芸活動と一体となつてなされたものと見ることができ

る。なお次の六代有芳については、その俳諧活動を短冊などに見ることができ。一方で漢詩を作ることにも努めていたことが、残された短冊や一枚物によって知られる。続く七代有頼は和歌の短冊を残している。そしてその妻さの子の活動に至るが、これについては前述したように第二のピークと見なされるので、次に項を改めて述べる。

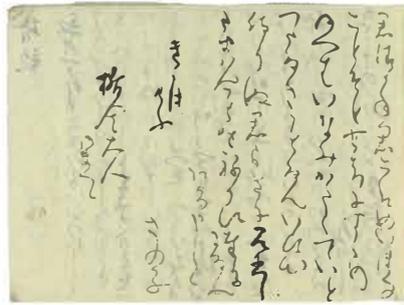
## (二) 七代妻さの子の時代

## 近世後期の出雲歌壇

さの子は当時の出雲地方の文芸の中枢にあつた人々と、特に和歌を中心として交流した。近世出雲地方の和歌に関する状況については、芦田耕一著『江戸時代の出雲歌壇』(二〇一二年、今井出版刊)に詳述されている。

近世後期出雲地方の和歌活動が、出雲大社を中心に行われていたと見られることは、本報告書所収の芦田報告に記される通りである。前掲の釣月と常悦の活動以来二条家流が中心であつた出雲の地に、本居宣長門に学んだ千家俊信(出雲大社別当)によつて宣長古学と鈴屋派和歌が導入され、その門下から出た千家尊澄、島重老らによつて歌風の変化がもたらされ、出雲の和歌活動自体が活発化する。さらに富永芳久、千家尊澄の精力的活動が加わつて、幕末期「出雲歌壇」が形成される。

さて手銭さの子が、この出雲歌壇の一員として文芸活動を活発に行つていた様が、今回の調査の結果具体的にわかつてきた。以下、新たに見出された書簡書きとめ類(さの子自筆)(図版21)によつて考察する。



【図版 21】さの子書簡(富永芳久宛て)

## さの子の文芸活動と蔵書

まず、さの子と富永芳久との文芸的な交流について見る。巻首に『ちとせの舎御せうそこ』と記す書簡書きとめがある。千歳舎は千家尊澄のことであるが、実際には芳久はじめ尊澄以外の人物に関わる書簡をも併せ収めている。そこに「安政五年五月計り芳久大人の元へ遣しけり」とする、さの子から芳久に宛てた書簡がある(安政五年は一八五八)。さの子が芳久の風土記の著書(『出雲風土記仮字書』など)を民平(古川氏)経由で入手し、それを親しき者に与え、得た値を芳久に送つたことを述べる。これを承けて「おなじく返事」とする芳久書簡には、このことに感謝しつつ、さの子が去年より方々の人に自分の風土記の書を世話してくれたことが嬉しいと述べている。

ひと日民平にもせし風土記をむつたまあへるみやび男にゆづり給ひて、そのあたひ十八ひらおこせ給ひ、すなはち書肆へ遣すべうなん。このふみよ、

天の下にたぐひなきふることの伝はり来ぬるを、世にしる人もまれらなるはうれたきことのきはみなるに、去年よりかなたこなたと人にもあたへしらしめ給へるこゝろばえのふかきこと、いにしへのぶるおのれらが心にはなぞへなくうれしうなん。

これに続けて、風土記を重要と考える所以について自説を縷々語つている。芳久はさの子を、自分の風土記に向ける熱意を理解してくれる人と見なしているのである。

次は書物をめぐる遣り取りである。「かたぐのせうそこうつし」と題する書簡書きとめに収める「楯の舎君のもとより」(神有月三日)とある。同じく安政五年か)は、楯の舎(芳久)からさの子に宛てたもので、都の書肆から本を取り寄せ、契沖の『和字正濫抄』、楯守部の『心の種』、近藤芳樹『寄居歌談』を手に入れたことを言う。

此ほどはみやこの書やよりとりぐにめづらかなる書どもみせ侍るを、さこそは御めにとまれるふみのおほかりなめとおしはかり侍りてなん。契中の和字抄、守部がこゝろのたね、芳樹がうたがたりなど、めづらしとは侍らねどいさゝかとのひ侍りぬ。

文久元年(一八六一)長月廿日のものとする「よし久君よりかへし」(『かたぐのせうそこうつし』所収)は、芳久からさの子に宛てたもので、さの子が『和字正濫抄』を返却してきたので、次には何をがなと思つていたところ、松江からたにざく(短冊)に歌を書いて届けてきたのでこれをお貸ししようと言う。

かへし給ひし和字正濫抄にひきかへめづらしき書をだにとおもひ給ふれど、ちりのみつもる文机のあたりにとはことふりたるものゝみにて、しみさへすみかをもとめがちになん。何をがなとわけ見る折しも、松江のかたよりたにざくといふものに歌かきて給はりければ、そをだにとすなはちまめらせ侍りぬ。

以下は、さの子が芳久編の歌集の跋文を書くことをめぐつての遣り取りである。『手中心おぼへ』と前表紙に記す仮綴じ本に、さの子が芳久宛てに認めた書簡の下書きがある。芳久は、出雲国人の和歌を集めた三部作『丙辰出雲国三十六歌仙』(安政三年(一八五六))、『丁巳出雲国五十歌撰』(同四年)、『戊午出雲国五十歌撰』(同五年)を上梓している。この書簡で「三十六歌仙のしりへ書」と言うが、実際にはさの子が跋文を書いたのは第二の『丁巳出雲国五十歌撰』であり、これのことと思われる。ここで芳久から跋文を書くように言われたことに恐縮しながら、「よきに見直したまはんことをねがひ奉る」と添削を求めている。

三十六歌仙のしりへ書をおのれにせよとのたまひつるよし承り、いとくかたじけなくうれしく侍れど、あまりにおこなるわざにし侍れば、はづかしく、幾たびもじゝ侍りしを、清とし君、清かね君、こはめいぼくのことぞとせちにすゝめ給へば、いなみがたくて、いとつたなきことなんいひ侍りぬ。君よきに見直したまはんことをねがひ奉るになん。

これに対して「卯月中比同じ人の御かへし」とする芳久書簡（『かたぐのせうそこうつし』所収）では、さの子から預かった草稿に添削を入れておいたので、修正した上で早々に届けてくれるようにと述べている。

さて歌仙のしりへ書おもしろくもをかしくもものし給へるかな。もしはかうもやおもひ給ふるふしもかい出侍りぬ。あらぬことには侍らんを、とり直し給ひていかでくくおこせたまひぬ。

さの子はまた、次の「よし久君へ返し」（『同』所収）において、近年の歌集と自分との関わりを述べている。

さきつ日はうるはしくこまやかなる御かへりごと、見奉るさへいとかたじけなきに、まいておとゞしの式百首めぐませたまひ、いとくうれしう、此比は是冊子見侍るに、おもしろき歌どもにて、わがせうたのなきぞ中々に心やすく侍る。こそにはをのがもくはひさせ給ふよし、いとづかしくとりかへしつべうもおもひ給ふるになん。はた五十歌仙のしりへがきも清左君のつてにて君よきにはからひ給はりよし、いとくうれしくは思ひ給へながら、あまりに月日たちし事ゆへ、先つ日の文にもわざとかきもちつ。

「おとゞしの式百首」は西田惟恒編の『安政二年百首』、または『安政三年二百首』を指すかと推測する。「こそ（去年）」は芳久編三部作の第一『丙辰出雲国三十六歌仙』（安政三年）で、これにはさの子歌が収められている。そして「五十歌仙のしりへがき」が件の『丁巳出雲国五十歌撰』跋のことと見られる。さの子は自分の入集を面映ゆいことしながら、芳久から跋文執筆を勧められたことを光栄と受けとめているのである。なおここに見える清左とは、前掲広瀬百羅の孫茂竹の歌人としての名である。

さて芳久の指導は『源氏物語』に関するところまで及んだ。「富永君よりかへし」（同じく『かたぐのせうそこうつし』所収）には、『湖月抄』を見るべきこと、帚木巻、殊に雨夜の品定めが根本であることを説く。

はた去年のぐゑんじの注書見給ひそめぬるよし、湖月抄とあはせみたまひなば、はやくあきらめ給ひぬべし。されど先生ときこゆる人もかたきふしにい

ふなる書なれば、まづひとつたりに見給ひて、はゞゞの巻をとく見たまひぬ。しなさだめなん五十四帖のむねとあるくだりと承り侍る。げにおもしろくもをかしくも侍るかな、などきこゆるものから、千尋のそのふかきあぢはひは、いかでかくみしるべき。定家の中納言も、源氏みざらむ歌よみはむげのことなりとかのたまひし。うたまなびのためにもかぎりなくいとよきふみになん。

「源氏みざらむ歌よみ」云々は正しくは藤原俊成の言であるが、ここでの芳久の助言から、詠歌の営みとの関連の中で物語の教えも行われていたことが知られるのである。

以下、千家尊澄に関わる書簡について見る。先にも触れた『ちとせの舎御せうそこ』に次の尊澄書簡がある。宛名は記されないが、ここでは一旦さの子宛てと解する。まず、歌の題を与えたところ見事に詠んで届けてきたことを褒めた上で、島重老（前掲）のもとへ遣わしていた歌の巻が返ってきたのでお貸ししようとして述べている。

さてひと日歌の題をたてまつり置しに、かずおほきをもいと給はで残るくまなくこよなおかしくもよみつらね給ひておくりものし給ふをみもてゆけば、めもさむばかりおもしろうけ給はり侍りぬ。さてさいつころ島重老がもとへつかはしおきし歌のまき、よべこにかへし、まゝ御かへりごとにてそへてたてまつり侍ぬれば、御めにふれさせたまひてよかし。

『同』所収「人にかはりて富永芳久が元に遣しける」は、尊澄に代わって芳久宛てに認めたというもので、書き手の署名はないがさの子によるものと見ておく。前日に芳久が尊澄のもとを訪れ本居内遠、加納諸平の短冊を届けてくれたことへの礼、そして芳久所蔵の『古事記』『玉だすき』の閲覧を尊澄が希望しているの少しばらく貸してほしい旨の依頼が述べられている。

我ちとせのやの君の御もとにきのふは御とぶらひ給ひよし。さがたきこと侍りて外にものしたるほどにて、たいめたまはらざりしは、いとくちをしようなん。名だゝる内遠、諸平のたにぎくふたひらまでたてまつり給ひしを、いみじうめでさせ給ひぬ。そのよろこびをくりかへしませとおほせごとかうぶりぬ。はた君のもたまへる古事記、玉だすきの二典を、わが君見たまはんの御こゝろざし侍れば、しばしかしたまひてよかし。

仮に一つ前の書簡が直接さの子に宛てたものでなく、またこの書簡の代書者がさの子以外の人であったとしても、このような文芸をめぐる遣り取りが彼女の身

近で行われていたことは確かである。『ちとせの舎御せうそこ』にはこの他にも、尊澄が「我大人の御まつり」とて、千家俊信を偲ぶ恒例行事を催すので歌文を寄せてほしいこと、そのために我が千歳舎を訪うてほしいことを述べた書簡もある。以上挙げたところから、歌文の創作、そのための指導、物語の学び、書物や短冊の遣り取りなどが行われていた様子を推測することができる。手銭家蔵書には、千家尊孫の『類題真璞集』『類題八雲集』、富永芳久の『出雲国名所歌集』『内辰出雲国三十六歌仙』『戊午出雲国五十歌撰』、千家尊澄の『はなのしづ枝』『歌神考』など、近世後期出雲歌壇で生まれた書が多く含まれるが、これらの大部分はその子による文芸活動の実践と連動しながら集積されたものと推定されるのである。

### 三 散文関係の書目

最後に散文関係の書目について触れる。蔵書の中に、大本で浅葱色の表紙をもつ、特別にしつらえたと見られる一連の実録写本がある(図版22)。先に掲げた六代有芳作成の蔵書目録では、これらは「軍書」という括りで登録されている。和歌・俳諧を中心とする文芸の営みの一方で、実録の享受が行われていたことは注目すべきである。



【図版 22】実録写本

また『雲陽観音馬場一代実記』という大社の地で作られたに違いない写本がある(図版23)。構成、文体いずれを取っても決して上々の出来とは言えないが、書名からして、明らかに実録という意識で作られている。これは手銭家以外の人の手によって作られたものと推測するが、実録の地方の読書人への浸透が窺い知れる事例と言える。



【図版 23】『雲陽観音馬場一代実記』

### 四 終わりに

手銭家は、酒造業を中心に商業を営みつつ、特に松江藩や出雲大社とも深いつながりを有していたが、そのことが同家の人々が教養を培った基盤となつていられると思われる。その蔵書は、代々引き継がれながら蓄積されたものであり、蔵書印や書き入れが多く、また蔵書目録を作成して整理点検を行うなど、自家の蔵書として守り伝えるという意識が顕著に認められる。そして最大の特色は、この蔵書が手銭家歴代の人々の文芸活動と表裏一体の関係にあることである。そこからは更に、手銭家の周囲に位置する出雲の歌壇、俳壇の動き、また散文文芸を享受する人たちのありようまでを窺うことができるのである。

#### 〔付記〕

本報告は、国文学研究資料館編『調査研究報告』第三十三号(二〇一三年三月)に発表した同題の旧稿をもとに、その後の研究で明らかになつた内容を加えて改稿したものである。

#### ◆プロフィール◆

たなか・のりお 一九六三(昭和三十八)年、鳥取県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)。専門は日本近世文学、特に近世中後期の小説。島根大学赴任以来二十年以上にわたり、山陰地域の古典籍資料の調査研究に取り組んでいる。現在、島根大学法文学部山陰研究センター企画室長を兼任。

## 【論考】 手銭家歴代の和歌活動

— 歌壇史上の意義を中心に —

久保田 啓一

(広島大学大学院文学研究科教授)

はじめに

近世文学のうち、和歌・漢詩・俳諧などの韻文がもつとも多くの愛好者を有したことは、未だに調査の及ばない無数の作品が全国に伝存するであろう状況を容易に想定できる点からも、ほぼ間違いないと思われる。守るべき作法があり、指導を受けなければまともな作品が作れないという制約があるために、高尚な文学に親しむという満足感が得られやすい。一方では、詩形が短く、散文に比べて取り付きやすいという手軽さもある。また、韻文は一人で楽しむものではなく、指導者や仲間を必要とするため、ある作者の周辺には必ず文化圏（歌壇・詩壇・俳壇）が生まれる。韻文の持つこのような特徴が愛好者の増大につながるの自然の成り行きであろう。

そして、和歌と漢詩は伝統文学として和漢の雅文学を代表するものであり、連歌から派生した新興の俗文学である俳諧とは一線を画するという常識が近世中期まではほぼ共有されていたであろうことも、たとえば豊富な和歌作品を残す歌人が同時に俳諧の有力な詠み手でもあるという事例を見出すのに苦勞する経験に基づけば、実態を反映した推測として了解できる。

ただし、それは、和歌史・漢詩史・俳諧史をそれぞれ別個に確立した体系として受け止め、また中央から地方への伝播を巨視的に俯瞰する視点に立つてこそ得られる見解であり、一つ一つの伝存資料に即して知見を積み上げて行けば、また自ずと異なる見通しが得られることになるだろう。漢詩はひとまず措き、起源と詩形に共通点を持つ和歌と俳諧が、文学としての地位や広がり具合においてどのように競い合いつつ多くの人々を獲得していったのか、資料に即して解明する必要を強く感じる。

この度、公益財団法人手銭記念館所蔵の和歌に関する典籍・文書を調査する機会を与えられ、近世中期以降の手銭家歴代当主の和歌活動を一望できたのは、図式化を急がずに資料そのものの持つ意味を考える立場を取る筆者にとつて、非常に有意義な体験となった。出雲大社と深い関わりを有する手銭家が、出雲歌壇の

中でどのような地位を占め、和歌と俳諧を自らの内部にどのように位置付けていたのかは、文化の求心力を強く持つ地方の文学活動の一つの典型として精査に値する課題となろう。以下はその調査報告である。

一

手銭家の和歌資料を調査して気づかされるのは、三代白三郎季硯（正徳二年（一七二二）〜寛政三年（一七九一）八〇歳）と四代此三郎敬慶（享保一七年（一七三二）〜寛政八年（一七九六）六五歳）の時代に和歌が非常に盛んであったことである。幕末の七代有頼とその妻さの子の活動とともに、手銭家の和歌における二つの頂点を形成するといつてよい。特に季硯に関する資料は質量ともに卓越しており、多岐にわたる観点からの検討が可能となっている。以下、概ね年代順に資料を取り上げつつ、季硯の活動の意義を読み取ってゆきたい。

季硯には和歌・俳諧・漢詩の書留が多数残されるが、その中で最も早い時期の活動の記録を留めるのが「詠草紙」（整理番号 五三三）である。巻頭に「謹奉納皇和雲国泰祠八景野絶一首、都八章」として「社頭夜燈」以下七絶が八首並び、その末に「延享四年乙卯中秋日、県内属民錢季硯拜上」とあり、続く「夜遊長谷寺」五絶のあとにも「季硯拜上」と記す。以下、漢詩と俳諧が雑然と並べられ、後半に「松江御連中和歌」と「杵築御連中」の和歌（いずれも作者名なし）を収める。筆跡は一貫し、季硯の詠草手控えであることは疑いない。記載の量と順番から見ても、本資料は漢詩の書留が主で、俳諧がそれに次ぎ、季硯自身の和歌の記録としての性格は希薄であったことが推測される。また、この偏りは、

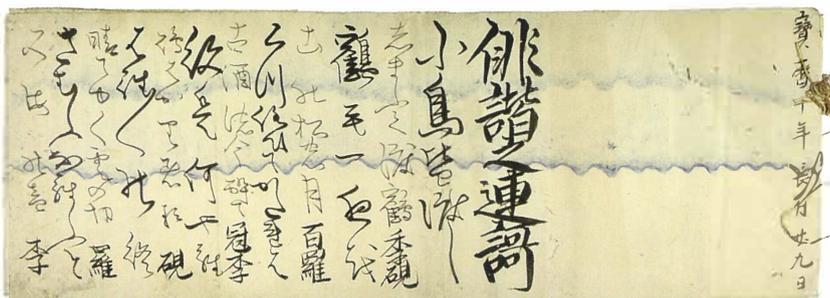
季硯の文学活動が漢詩と俳諧から始まったことを自ずと示しているであろう。

俳諧の書留には季硯の弟の冠李（享保四年（一七一九）〜寛政八年（一七九六）

七八歳）の句も含まれ、手銭家に蔵される宝暦一〇年（一七六〇）成立の俳諧

資料（「俳諧之連詞」五二九）で季硯が冠李や広瀬百羅（百羅とも。以下、資料引用以外の記述は「百羅」で統一する）





と同座した事実が確認できることから、むしろ漢詩に重きを置いていた季硯が冠季の影響を受けて俳諧にも手を染めたというのが実態に近いのではないかと推測される。宝暦年間頃までの季硯には、歌人としての側面がほとんど認められないといっても過言ではないように思われる。そして、季硯が漢詩も俳諧も次節で述べる和歌も「季硯」の呼称一つで通していることは、三つの領域を一体のものとして享受する季硯の意識を物語るものといえ、注目される。

二

季硯の和歌活動がいつ頃から本格化したのかははっきりしないが、手銭家の記録に拠る限り、明和九年（安永元年 一七七二）が大きな転機となったのは確かである。和歌に特化した季硯の手控である「愛屋免日記」（五一五）の巻頭に、次のような記載を見る。

明和九卯月三日 於茂竹庵会合  
松方会制度



【成果公開】

二五

一 毎月会日、八日、十八日、廿四日に議定之事。

但、十八日は本式、廿四日内会也。

一 会日、巳刻より、無遅之参集之事。

但、弁当可致持参候。近隣之会頭たりとも、食事に帰宅可為無用事。

一 会頭心遣無用に候。茶計差出可申事。

一 当座之詠草紙中折二帖、会頭より差出可申事。

但、本詠草箱折は可致持参事。

一 会日故障之人は、前日又は会日朝迄に会頭へ断可有之事。

一 会頭順番に相勤可申候。若当番無抛差合之節は、次へ相頼、振替可申事。

一 会合之翌日、会帳無遅滞次之番手へ相送可申事。

一 指合に而出席無之面々は、当座之題ヲ申請、宿に而出詠仕候儀、可為無用事。

一 会日、俄に会頭差合之儀有之、会日ヲ余日に振替候儀、是迄度々有之候。

制法乱之儀故、此後決而不相成事。

一 懐紙、小鷹之外不相成事。

一 老師へ音物等之儀、年行事より諸事相調可申候。当年之行事は正至相勤之事。

町連中実名

藤間九左衛門藤安、藤喜政懿、石玉政虎、山根氏周迪、西神政常、長美朝真、白兵長康、岡六正至、藤儀藤匡、岡彦正辰、藤大義彦、栄道、松林寺、包信山根右膳。

記事によれば、この年の四月三日、百羅宅（茂竹庵）で開催された会合で、「松方会」と呼称される杵築の歌会の会則が決定した。歌会の定例開催日、開始時刻と弁当持参のこと、もてなし方、詠草紙のこと、欠席の連絡、会頭の決め方、記録帳の扱い、欠席者の当座題出詠無用のこと、開催日を会頭の都合で変更しないこと、懐紙の指定、「老師」への付け届けの出し方など、極めて具体的な取り決めがなされていて、会運営の様子が如実に知られる。欠席や日程の変更を無造作に行わないように互いの馴れ合いを戒めるあたり、歌会に真剣に取り組もうとしている彼らの姿勢が窺えて興味深い。

末尾の「町連中実名」には、手銭家の季硯・敬慶や会場を提供した百羅を除く歌会の常連達の呼称が省略を交えつつ記されているらしい。松林寺は杵築の寺院で、栄道は恐らくは住職だろう。その他の人物については、複数の資料を突き合わせてその正体を知る必要がある。それから「老師」とは誰なのかも不可欠の検

討事項となろう。

一 丁白紙を挟んで次の記事となる。

武者小路三位実岳卿十三回忌 兼題 秋懐旧 七月

一 芝山故中納言重豊卿七回忌 秋月 秋夢 兼題 八月

一 初学和歌式 和歌庭訓抄 耳底記

武者小路実岳は宝暦一〇年（一七六〇）八月一二日、芝山重豊は明和三年（一七六六）八月六日にそれぞれ薨去しているから、明和九年は、実岳の十三回忌、重豊の七回忌にあたる。七月と八月に追善和歌を集めて武者小路・芝山両家に献じようとの企画が持ち上がり、「老師」から兼題が予め指定されたということなのであろう。最後の一つ書に並ぶ三つの書名は、歌会にあわせて歌学書の輪読が計画されていたことを示すものかもしれない。

以下、貼紙に五月以降一二月までの兼題が列挙されるが、こちらでは毎月三日に赤人社法案が行われることになっており、八日から三日へと変更されたことがわかる。三日と一八日の会は前月の同日まで、二四日の会は当日までに詠草を提出する旨の断り書きもあり、貼紙の下には、

会合案内状

明何日、月次之和歌、於私宅会頭相勤候間、巳刻より御参集可被成候也。

月日

某

と、歌会案内状の書式まで記録されて、歌会としての内実を十分に備えた組織運営が機能し始めたことを窺わせる。

三

季硯達の「老師」がいかなる人物で、どのような指導を行ったかは、明和九年に発足した松方会の実態を知る上で是非とも明らかにすべき課題である。「愛屋免日記」やその他の同時代資料を用いて検討に入る。

まず、「愛屋免日記」の中の次の記事が目につく。

秋懐旧

常悦師

幾とせもかわらぬ月の影にこそその世の秋の面影は見れ  
跡とふも猶うき秋よしらつゆのふりにける身は消やらずして

秋月

とし波は光とゞめず秋ははや七瀬の淀も月ぞ流るゝ  
かたみぞと都の秋を忍ぶかないづこもおなじ月はすめども

秋夢

袖の露おきぬて身をもしぼる哉見は  
てぬ秋の夢の名ごりに  
露消し名残もはかな夢の世にゆめを  
ぞたのむ秋の手まくら

「秋懐旧」「秋月」「秋夢」は、前節で触れた実岳と重豊の追善和歌の兼題であった。「愛屋免日記」は、詠草の写しというより歌学全般にわたる雑記帳の性格が強く、「常悦師」の三題六首は季硯の詠作上の参考資料として書き留められたかと思われる。「師」の作であればこそ意義があったのであろう。

また、「愛屋免日記」には、明らかに季硯とは異なる筆跡で書かれた大量の紙片が貼付されている。それらは、季硯の和歌に対する具体的な指導であったり、歌学の知見の披露であったりするのだが、たとえば次のような紙片からは、指導者の歌学の系統が見て取れる。

先達之金言、老師之教誡、承候事、少ばかり申上候。

玄旨公曰、只歌は正風体によむべし。いろくにはまはしてよむはまぎらかし物也。

又曰、只直にすらりとよむべし。

又曰、まづろくによむが肝心也。おもてから裏へ行たるがよき也。

又曰、聞へやすきがよき也。

又曰、風体肝要也。めづらしくなけれども、風をさへよくよみゆけば、自然に歌よく成也。

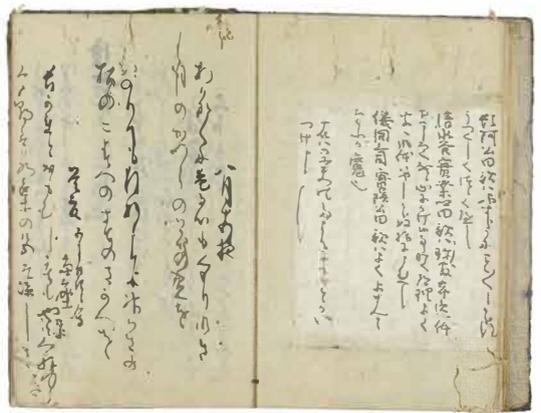
頓阿公曰、歌はやすらかに、ことぐしからず、うつくしくつくべし。

清水谷実業卿曰、歌は珍敷希逸体おもしろくなど、心にかへ候事なく、道理よく聞へ、風体いやしからぬ様によむべし。

儀同三司実陰公曰、歌はよくよまんとおもふが魔也。

右は御工夫のたよりにもやとかいつけ申候。

細川幽齋、頓阿、清水谷実業、武者小路実陰と、まさに堂上歌学の正統を体現





する人物の発言が積み掛けるように繰り出されてゆく。この紙片が「常悦師」の手になるものとすれば、彼には歌書書の記事や師匠から受けた直接指導の中から自在に情報を引き出して季硯に提供する用意があったということになる。

松方会が始まった翌年には、季硯は「百人一首」の講釈を受講し、聞書をまとめた。「安永二卯月三日開講 百人一首聞

書 季硯」(四九四)の成立である。天智天皇から壬生忠見までを飛び飛びに講じた内容で、歌の解釈というよりも、「百人一首」を引き合いに出しつつ歌学の蘊蓄を披瀝するといった体の講釈であった。素性法師の講釈の後に「常悦師、閏三月十六日御入来」云々とあり、空白を挟んで「安永三年八月廿六日初ル」と記して三条右大臣の記事に移ることから、「常悦師」が安永二年閏三月一六日に柀築以外の土地から出向いて来て四月三日に開講したこと、講釈は中断を含みつつ実施されたことなどが推測される。そして本書は、「常悦師」の講釈の口吻をまざざと伝えてくれる点で非常に貴重な資料である。冒頭近くの記述を掲げよう。

抑私師釣師ハ江戸也。常々申サル、「和歌ニ執心アルナラ、堂上ニテ不被立人テハ用ニ不立」ト被申也。釣師、妻ヲ一子へ遣シテ通世スト也。釣師ノ前ハ浄土宗也。旦那寺ニテ剃髪シ、夫ヨリ京都へ登リ、辛勞アリ。然二三条与力ニ松井善右衛門、ウトク人也。中院ミツ持公ノ御代也。此善右衛門、ミツモチ公無類ノ御門弟ニテ、中院家へ入ハマリテ、暫ミツモチ公ハ冷源院様ノ御師範ト御成被成候也。(中略)例之ウタザンマキニテ、三玉集ヲ被撰シ也。奥書ニモ善右衛門トアル也。善右衛門へ中ノ院家ノ蜜書不殘御伝授アル也。其時に釣月京都ニ居ル。其時之御宗匠清水谷大助方之実成卿、ミツモチ公ハ御師範、釣月ハ実成卿ノ御門生也。公辺ノ御会ニモ被召附シ也。松井カウリウモ釣月ヲ我子同然ニ念頭ス。釣月手前ニテ多分カウリウノ家ニ居バ、カウリウ一子モ善右衛門ト申、ウトキ生付ニテ一向和歌イケズ、夫故釣月へ中院家ノ秘書無殘釣師へ移ル。釣師、初ハ西代持円寺ニ居ス。釣師内存、八雲之地出雲ニ残ストノ念願也。(後略)

まず、講釈の主は「釣師」即ち「釣月」から直接教えを受けている。また、釣月の人物像や出雲での最初の居所である西代の持円寺(慈円寺)、また松井幸隆

の子の才能が乏しかったことなど、釣月本人から仕入れたとしか思えない、かなり具体的な情報を有している。

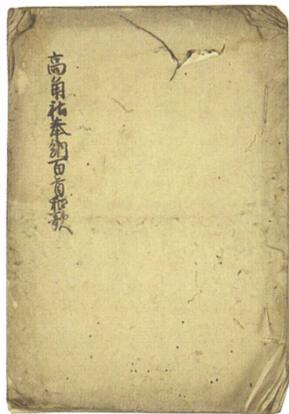
以上の情報を総合すると、釣月から伝授を受け、二条派堂上歌学を信奉し、武者小路実岳や芝山重豊の追善和歌会を主催して京へ詠草を送り、他所から出向いて季硯達に「百人一首」を講じた「常悦師」とは、松江在住の百忍庵常悦(小豆沢勝興。宝永三年(一七〇六)〜安永五年(一七七六) 七一歳)としか考えられない。となれば、柀築の松方会連中の和歌の添削指導にあたったのも常悦であろうし、「愛屋免日記」に貼り込まれた書簡・紙片も、常悦が季硯に書き送ったものと推定できる。

なお、右の記載中には、「中院ミツ持」「ミツモチ」(通茂)、「冷源院」(靈元院)、「大助」(大弼)、「実成」(実業)、「持円寺」(慈円寺)などのように、耳で聴いて倉卒に筆録したとしか思えない表記上の誤りが多数見られるので、常悦の講釈の席上で季硯が聞き書きした原本と見てよいであろう。少なくとも親本を座右に置いて書写したとは考えられない。転写の際にこれ程の錯誤を見逃したとすれば、季硯の学力はとて歌学の享受に耐えられそうにない。講義内容を即座に書き取る便宜上、同音の簡略な別字に置き換えたまでであろう。もともと、中院通茂の名が「ミツモチ」と記録されたのは、常悦の発音がそのように聞こえたことの反映かもしれない。そうであれば季硯の誤りとはいえない。そして、「通茂」の読みが「みちしげ」でなく「みちもち」であったことを示す証拠ともなる。

季硯とその周辺の一次資料に大量に残る指導の跡は、これまで十分な検討材料に恵まれなかった百忍庵常悦の活動内容を極めて具体的かつ多角的に知らせてくれる。常悦は漸くその真面目を明らかにし始めたといつてよい。

四

「百人一首」の講釈を始める直前、常悦はもう一つの企画を立てていた。出雲地方の歌人から和歌百首を集め、石見の柿本神社(現、益田市の高津柿本神社)に奉納しようというのである。手銭記念館に残る「高角社奉納百首和歌」(四八五)の内題には「奉納石見国柿本社千五十年御祭祀詠百首和歌」とあり、奥書には「安



永二年三月十八日 願主 雲州 沙門常悦」と記されて、発起人常悦の意図が那辺にあつたかを伝える。「国造出雲俊勝」以下、春二十首、夏十五首、秋二十首、冬十五首、恋十五首、雑十五首の百題百首を百人が詠じ、あくまでも常悦の自分の人脈に沿った人選とはいえ、当時の出雲の主要な人物を網羅した感があり、壯観である。近世後期の出雲歌壇は、天保一三年（一八四二）刊『類題八雲集』の出詠者の素性を伝える千家家蔵「八雲集作者姓名録」によつてその概略を知ることができるが、「高角社奉納百首和歌」はそれより七〇年ほど前の、堂上和歌が専ら学ばれた時代の状況を概括し得る資料となつてゐる。小田切尚足・朝日郷保といつた松江藩重臣、千家・北島両国造家以下、出雲大社に關係する人々も多く出詠する中、季硯達もしつかりと百首の一翼を担う。手銭家とその周辺で組織される松方会の人々の和歌を、題とともに掲げる。なお、第二節に紹介した「愛屋免日記」巻頭の、「松方会制度」や「町連中実名」に見える呼称を、作者名の下に括弧に入れて添えてみる。



梅香留袖

手銭季硯

閨の戸の明てや見まし春風やよ深く誘ふ袖の梅が、

橋辺柳

藤間藤逸（藤間九左衛門藤安）

浅みどり柳の髪を打はへて浪にぞあかぬ宇治の橋姫

雲雀落

藤間政懿（藤喜政懿）

かすみ行空に聞えし夕雲雀落る末野に床やとん

隣蚊遣火

西村政常（西神政常）

かやりたく隣はいかに爰だにも烟いぶせきよはの手枕

樹陰蟬

岡垣正辰（岡彦正辰）

ゆふ立のなごりの露をよすがにて木陰にすだく蟬の諸声

雲間初雁

石田正虎（石玉政虎）

しら雲の棚引山の峰こえてさやかに落る初雁の声

秋月添光

岡垣正至（岡六正至）

いつもみる月やあらぬとおもふまで秋はいかなる光そふらん

霧隔船

手銭長康（白兵長康）

漕出し舟は跡なく立こめて名のみあかしの浦の朝霧

落葉有声

手銭敬慶

からにしき秋の余波をしたへとや枝に音して紅葉ちるらん

待空恋

山根周迪（山根氏周迪）

まつよはにひとりねよとの鐘きけばとはぬ恨の数ぞ、ひぬる

古寺鐘

釈栄道（栄道 松林寺）

入相のかねのひゞきにいとゞなを心すみぬる峰の古寺

樵路雨

長谷川朝真（長美朝真）

ぬれてなをおもきはこぶ柴人の帰る山路の雨やくるしき

杣川筏

山根包信（包信山根右膳）

いかばかり杣木の数のおほみ河浪の間もなく下す筏は

往事如夢

広瀬百羅（茂竹庵）

うつゝとはいつをかいはん昔より思へば同じ夢の世の中

寄神祇祝

釈常悦

きみも臣も身を合せたる御代にあひて神も昔や思ひ出らん

「愛屋免日記」の「町連中実名」に見えた一三人のうち、藤儀藤匡・藤大義彦の二人を除く一人が出詠し、さらに「松方会制度」決定の会合の場を提供した百羅、手銭家の季硯・敬慶二代と師匠の常悦を加えた一五名の歌が並んでいる。「町連中実名」では、藤間が「藤」（ただし藤逸（藤安）の場合は「藤間」と記す）、西村が「西」、岡垣が「岡」、石田が「石」、長谷川が「長」とそれぞれ省略されているのがわかる。実名との間にある字は屋号か通称かの略称であろう。先に言及した「八雲集作者姓名録」に記された歌人の三代ほど前の人々が著録された可能性は高く、姓名が確定すれば特定は一層容易となる。

ここで留意されるのが、「町連中実名」では「白兵長康」と記録され、「高角社奉納百首和歌」では「漕出し」歌を詠じた手銭長康の正体である。「町連中実名」に名があるのは、手銭家の季硯・敬慶とは別扱いということを示すが、姓は手銭である。つまるところ、実名の長康の前に置かれた「白兵」の意味するところは何かという問題を解決すれば、彼の素性は判明する。もし、「白」が手銭家の屋号白枝屋、「兵」が通称兵吉郎の略だとすれば、長康は季硯の弟で別家を立てた冠季の実名と考えざるを得ない。この時代、季硯・敬慶と活動を共にした手銭姓

の人物は冠季を措いて他にはいない。つまり、これまでもっぱら俳諧活動だけが取り上げられてきた冠季は、実は長康の実名で和歌にも興じていたのだった。同様に、俳人として著名であった広瀬百羅も、俳諧とともに和歌をよくし、杵築歌壇の重要人物の一人であったと考えられる。二人の違いは、長康が実名長康と俳号冠季を和歌と俳諧とで使い分けたのに対し、百羅は和歌も俳諧も百羅で通した点にある。先述した通り、季硯も和歌・漢詩・俳諧を同じ名で詠じた。明和末から安永にかけての杵築では、和歌と俳諧に対する姿勢を微妙に違える人々が歌会・俳席を共にしていた。

五

常悦の指導を仰ぎ、季硯・敬慶と長康(冠季)そして百羅達が切磋琢磨する杵築歌壇の実態はどのようなものであったか。それを知り得る資料をさらに提示してみよう。

栄道、百羅、政常、政懿、季硯、敬慶、正虎の七人が「柳随風」の題で二首ずつ詠み、合点・添削・褒詞・批語が施された点取和歌詠草(手銭家文芸関係資料八八七。以下、「柳随風詠草」と呼称する)が伝わる。端裏にある「百羅 敬慶 同点 此巻敬慶とるべし」との書き込みは、結果的にこの詠草が敬慶の手に渡って今日まで伝存した経緯を雄弁に物語る。点取和歌の勝者は、当該詠草を手元に残すことで栄誉を得るのである。端裏の記事と褒詞・批語の筆跡が「愛屋免日記」に大量に貼付された紙片と酷似するので、常悦自身の指導の跡を留める原詠草と見る。以下、全文を掲げるが、十四首に通し番号を付し、割書を一行にまとめ、添削前の形を括弧に入れて左に併記するなどの処置を取った。



百羅 敬慶 同点  
此巻敬慶とるべし

柳随風 二月廿四日 兼題

一 どのかななる風のまにまに青柳のみどりのいとや染てほすらむ 栄道  
(春風の吹にまかする青柳のみどりのいとや染てほすらむ)

二 打なびく柳のいと永き日にいくたび風のくりかへすらむ 百羅

尤候。

三 霞む野にほのみえ初て春風になびく柳のいとどけき 政常

四 くり出すいろは霞のあさみどり風のまなる青柳のいと 政懿

五 花ならばいとほむものを春風のふけばふかる、野べの青柳 季硯

四句、一向心得がたく候。

六 ゆるく吹風のすがたもあらはれてなびく柳のいとどけき 敬慶

おもしろく候。

七 佐保姫の手ぞめの糸をくりかへしなびくもあかぬ風の青柳 正虎

此上句、近世の歌に聞およびたる様に候。弁上随風の趣意、今少

有たく候。

八 花ならばいとひやすらん春風の手にまかせたる青柳の糸 栄道

春風の手とはいかゞ哉。

九 枝よはみ吹ともみえぬ春風にこゝろあはせてなびく柳は 百羅

おもしろく候。

十 吹まよふかぜのまにく青柳のいと打はへてなびくのとけさ 政常

吹まよふとはつよき風の事也。

十一 うちなびくいろものどけし青柳の花田のいとを風にまかせて 政懿

十二 あかざ猶みぎりの柳風につれて人のこゝろもなびくいろかは 季硯

十三 打なびくかげものどかに春風のふくかたみする庭の青柳 敬慶

尤候。

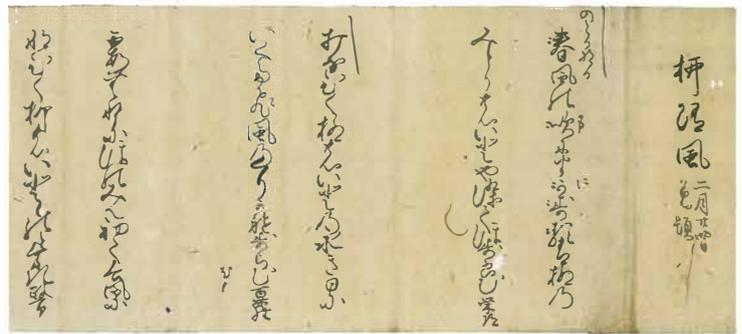
十四 ながき日にたゆむまもなく打なびく柳を風のすがたとや見む 正虎

是又風前柳にて、随風の心不足に候。  
汚墨六首

この点取歌会は、ある年の二月二十四日に実施された。年代こそ特定できないものの、「愛屋免日記」の「松方会制度」第一条に記された月次「内会」の詠草である。題「柳随風」が前もって指定され、当日集まった七人が二首ずつ詠み、詠草を松江の常悦に送る。その際は作者の名は記さないのが通例である。常悦は十四首の和歌を先人観なしに読み、評価を下して返送する。季硯達は詠草を受け取って作者名を書き込み、合点の有無を確認する。合点が施されたのは、「汚墨六首」とある通り、栄道一首、百羅二首、政懿一首、敬慶二首の合計六首である。点取和歌は、獲得した合点の多寡で勝敗が決まるが、同点の場合は、合点歌のうち

ちの褒詞を得た歌の数で決着する。「柳随風詠草」では百羅と敬慶が二首で並び、しかも二人とも「尤候」「おもしろく候」の褒詞を得ていて、全く以て優劣が付け難かった。そのような場合、これまで誰が勝って詠草を貰ったかを調べ、できるだけ広く行き渡るように配慮して決定する。恐らく、百羅が近い過去に詠草を得ていて、今回は敬慶に回そうということで一同の合意が得られたのであろう。その結果を受けて、次回以降の会で常悦が端裏に詠草の持ち主を誰とするかを書き入れる。「柳随風詠草」の辿った経緯を想定すれば以上の通りとなる。

この十四首の歌と常悦の合点・添削、褒詞と批語の内容は、七人の力量と常悦の評価基準を明確に伝えてくれる。「柳随風」題は、春風に揺れる柳の青い枝を糸に見立てるのが本意で、風・柳・糸の三つをどのようになだらかに組み合わせるかが問われる。本意との乖離は七・十四、不用意な語の選択は五・八・十、そして七では先行歌との類似<sup>①</sup>をも指摘するなど、褒詞よりもむしろ批語の方が表現意識の解明には役に立つが、それはともかく、合点を受けた六首は、柳の糸が風と一体となつて靡く姿を様々な角度からなだらかに詠じていて、詠草の形態も含め、堂上の点取和歌指導を忠実に模倣した内容を備えている。そこで同点となつた百羅と敬慶、享保年間に生まれたほぼ同世代の二人がこれからの松方会を中心となつていく、そんな予感を十分に抱かせる結果でもあった。



安永五年に常悦が没した後には、百羅が指導に当たつたらしい。「和歌集」(四六九)と仮題を付された書留は、「安永二癸巳三月十八日石州高角社奉納百首題 落葉有聲」として「からにしき秋の余波をしたへとや枝に音して紅葉ちるらん」の歌が記されるし、「敬慶」の名を明記した歌も記録されているので、敬慶が自歌を整理した家集の性格を色濃く伝えるものだが、その中に次のような記事がある。

## 六

百羅先生珍重の褒詞のありし時

めづらしな雪を重て咲梅のいろかは木々の花にさきだす  
ことのはの花珍しく咲いで、匂ひは高くよもにみちぬる

百羅の適切な指導が積み重ねられて敬慶達の和歌も上達しつつあるという喜びと充実感を詠じた作と読める。俳諧で名を成したはずの百羅は、常悦の衣鉢を継いで、当然のように歌会の指導に当たつた。俳諧と和歌の境界を自在に跨ぐ百羅には何のためらいもないかに見える。そして、敬慶達も同様だったと見てよいのではないか。「和歌集」の末尾には「俳諧四季混雑発句」として俳号「貫路」の発句が並ぶ。筆跡は同じだから、敬慶が自詠の発句を「和歌集」の余白に書き留めたとすれば、貫路は敬慶の俳号と見なさざるを得なくなる。勿論断言することはできないが、少なくとも和歌と俳諧の間を自由に往来する意識が敬慶達にも共有されていたことだけは確かといえるだろう。

季硯・敬慶の近世中期、和歌の指導は、公家のもとで学んで得た知識に基づく添削と歌学伝授が中心をなした。常悦はその点で典型的な指導者である。しかし、時代が下るにつれて、地方においては和歌だけの指導では文化圏を形成する構成員の広汎な要求に応じられなくなり、俳諧を合せて指導できる百羅のような存在が重宝されたのであろう。季硯・敬慶が和歌と俳諧の双方に通じた背景には、中央ではつきりと区別された歌壇と俳壇を、地方では人脈の限界もあつてむしろ積極的に融合させたという面があつたのではないか。手銭家に伝わる大量の資料は、大社とともに生きる杵築の人々の文学観を的確に炙り出すことを可能にする。まさに有力地方文化圏の雛形として、さまざまな検討が要請されている。

おわりに

手銭家の和歌のもう一つの頂点、即ち有頼とさの子の和歌は、俳諧の点取の形式を導入してさらに俳諧と近づいてゆくことになるが、紙幅の都合で言及できなかった。別稿で改めて論じる所存である。

注

- (1) 以下、手銭記念館所蔵の資料を引用する際には、整理番号を括弧に入れて付記することとする。
- (2) 資料の引用にあたっては、通行の字体に改め、適宜句読点・濁点・括弧などを補う。

- (3) 季硯や冠李、百羅の俳諧活動、及びこれまでの研究状況については、伊藤善隆氏「季硯句集『松葉日記』—手銭記念館所蔵俳諧資料(一)—」(『山陰研究』6、二〇一三年十二月)、同「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(一)—手銭記念館所蔵俳諧資料(二)—」(『湘北紀要』35号、二〇一四年三月)、及び同氏の講演「俳諧史の中の出雲・大社・手銭家」(二〇一四年十二月二三日、於 手銭記念館) の配布資料に詳しい。
- (4) 「膳」は字形に疑問があるが、このように推読しておく。
- (5) 釣月と常悦の師弟関係については、蒲生倫子氏「江戸時代の松江藩における「歌道伝授」の研究」(『島大國文』25号、一九九七年二月)、芦田耕一氏「江戸時代の出雲歌壇」(今井出版、二〇一二年三月) 第二章「江戸時代前、中期の出雲歌壇」に詳しい。
- (6) ただし、雑の部の見出しには「雑拾首」とあり、「五」の字を脱する。
- (7) 同資料については、中澤伸弘氏「徳川時代後期出雲歌壇と国学」(錦正社、二〇〇七年)、注(5) 所掲芦田氏著に触れるところがある。
- (8) 二〇一四年二月一日に開催された「手銭家蔵書から見る出雲の文芸」シンポジウムの田中則雄氏の基調講演「手銭家蔵書と出雲の文芸活動」において言及された。
- (9) 注(7) 所掲中澤氏著所収「資料『類題八雲集』作者姓名録」は、『類題八雲集』の作者姓名が五十音順に配列され、在所と通称・官職などが付記された一覧表である(同書一〇三〜一〇三頁)。登載された杵築の歌人の中から同姓の人物を検索して遡ってゆけば、「高角社奉納百首和歌」の作者に辿り着くと思われる。人物の同定は今後の課題としたい。
- (10) 恐らく、「延文百首」二六〇九・為明の「棹姫の手ぞめの糸をくり出でて梢にかくる春のあをやぎ」(題「柳」)。引用は『新編国歌大観』第四巻に拠る) あたりが念頭にあろう。

〔付記〕

本稿は、手銭記念館特別企画展「江戸力 手銭家蔵書から見る出雲の文芸」の連続講座「手銭家歴代の和歌活動—歌壇史上の意義を中心に—」(二〇一四年一〇月一三日)の講演内容に、シンポジウム「手銭家蔵書から見る出雲の文芸」(同二月一四日)における発言内容を一部組み入れて著した。調査研究に際してさ

まざまな便宜を図って下さった現御当主の手銭白三郎氏・裕子氏御夫妻、資料に  
関して御教示を得た手銭記念館学芸員佐々木杏里氏に、心よりお礼申し上げます。  
なお、本稿は国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」(代  
表 国文学研究資料館大高洋司教授) の研究成果であり、平成二六年度科学研究  
費補助金基盤研究(C)「成島家を中心とする近世中後期幕臣文化圏の研究」(代表  
久保田啓一) による研究成果の一部である。

◆プロフィール◆

くぼた・けいいち 一九五九(昭和三十四)年十月十三日、福岡県大牟田市生まれ。  
九州大学大学院文学研究科博士後期課程中退。博士(文学)。有明工業高等専門学  
校助手、同講師、梅光女学院大学文学部講師、同助教授、広島大学文学部助教授  
を経て現職。専門は近世文学、特に冷泉家とその一門を中心とした近世和歌研究、  
江戸幕臣文化圏研究など。主著『新編日本古典文学全集73 近世和歌集』(小学館、  
二〇〇二年)、『近世冷泉派歌壇の研究』(翰林書房、二〇〇三年)、『新日本古典文学  
大系明治編4 和歌俳句歌謡音曲集』(共著) (岩波書店、二〇〇三年)、『歌論歌学  
集成 第十六巻』(共著 三弥井書店、二〇〇四年)、『和歌文学大系74 布留散は  
ちすの露 草径集 志濃夫廼舎歌集』(共著 明治書院、二〇〇七年) など。

## 【論考】江戸時代末期の大社歌壇

芦田 耕一

(島根大学名誉教授)

## はじめに

大社地方の和歌を考える際には、次のことを念頭に置くことが必要である。まず、和歌発祥の地であること。紀貫之は『古今集』(九〇五年成立) 仮名序で「人の世となりて、素盞鳴尊よりぞ三十三文字あまり一文字は詠みける。・女(注、櫛名田比売)と住み給はむとて、出雲の国に宮造りし給ふ時に、その所に八色の雲の立つを見て詠み給へるなり。八雲たつ出雲八重垣妻ごめに八重垣つくるその八重垣を」と書く。この歌は『古事記』にみられるが、これをもって貫之は出雲を和歌発祥の地だと揚言したのである。

次に、風土記として、『出雲国風土記』が完本として国内唯一残存する(七三三年成立) こと。知られるごとく、風土記は和銅六年(七三三)に各国に制作する詔命が出されたが、完全な形で残っているのは出雲だけであり、これは出雲人が郷土を愛することの証しであるといえよう。

そして、出雲大社(杵築大社)が存在すること。大社の神官が中心になって和歌発祥の地であることを顕彰するべく歌を詠み、大社に歌集を奉納する。神に対する畏敬の念のあらわれでもある。

## 釣月法師

江戸時代末期の大社歌壇を論じるには、その前夜の歌人として釣月法師(ちようげいほうし)(一六五九〜一七二九)を等閑視することはできない。

釣月は明珠庵・白翁・水柳軒と号する。出雲大社に奉納した歌集『清地草』(すがぐさ。すがちぐさ、とも。一七〇二年成立)に「大社に詣でて、社頭花 武州産釈釣月」として「人の世の言葉の種とさかへけり花も八雲の春をかさねて」とみえ、江戸生まれであることが分かる。これが詠まれたのは出雲下向以前である。「釣月法師墓碑銘写」によれば、歌道のため、三十二歳で出家、上洛し、靈元院歌壇の清水谷実業(一六四八〜一七〇九)の門に入り、およそ二〇年間の在京の後に江戸に帰る。その折に関東に下向中の同じ靈元院歌壇の武者小路実陰

(一六六一〜一七三八)に会い、「御旅館にまうのぼりつつ御門弟となり、修行星霜を経」たが、そこで出雲下向に思い至るのである。その動機は「おもへらく出雲国は、八雲神詠根本の地たるに、歌道行れざること念なく覚へて、宝永の頃当国に下向し」という。和歌発祥の地であるにもかかわらず、歌道が盛んでないことを無念に思い、宝永年間(一七〇四〜九)のころに出雲にやって来たのである。しかし、その後、再び上洛する。「猶道の奥秘を極む事を思ひ、ふたたび京師におもむき、中院内府通茂公へも御立人を免さる」とあり、靈元院歌壇の中院通茂(一六三一〜一七一〇)の門に入ったというが、やや疑問もある。また通茂の高弟松井幸隆(生没年未詳)の教えをうける。その後、再び出雲に来て一生を終えるのである。これらの実業・実陰・通茂らの堂上家(どうじやう)(公家) 歌人は二条家流を伝えている。

出雲での釣月の活動は「島重老翁の略伝」には「出雲国は二条家の詠歌流行して、釣月あり常悦(注、小豆沢。松江の豪商。一七〇六〜七六)あり、時の宗匠家としてこれにしたがふ門生あまたなりき」、「釣月法師墓碑銘写」には「出雲に帰り数多伝書を講習し、弘く教をほどこし、皆伝の好士六七輩の中、俗名小豆沢浅右衛門勝興出家して百忍庵常悦と号す。此僧正統なり」とあり、出雲歌壇の中心的な人物となったのである。

釣月が歌道伝授に積極的であったことも無視できない。「皆伝の好士六七輩」とあるように伝授を六、七人に授けている。釣月自身は実業や幸隆から「古今伝授」等の伝授をうけていた。まずその正統は小豆沢常悦であるという。「伊勢物語口決」について、享保八年(一七二三)冬に明珠庵(松江にあつたか)で弟子たちを集めて「伊勢物語全部講義」を行なっているが、このあと常悦一人だけが数年をかけて伝授を乞い、相伝を許されたという。そのほかに伝授されたのは勝部芳房や山中章弘がいるが、これ以外の人は明らかにしたい。

享保八年には益田市にある柿本神社に歌を奉納している。同年三月一八日に柿本人麿の千年忌の大祭が行なわれたが、これを機に参詣を思いついたという。大社の草庵を出発し帰着するまで一二日間を費やしての船旅であった。『釣月翁鴨山参詣記』には、「千とせふべき松江の府、神のます素鵲の里、八雲のみちにこゝろをよする人々をすゝめて、言葉の林をわけ、こゝろのいづみをくみ、鳥のあとにまかせ、もしほ草かきあつめて、かれこれをのをのふたもゝちの和歌をふた巻

として鴨山の社におさめたてまつる」とあり、松江や大社で和歌に心得のある人々から歌を募ったところ二〇〇首も集まり、二巻にして奉納したのである。残念ながら、これらの歌は記されていない。

また、「大社八景」の和歌を出雲大社に奉納している。自身で選んだ名勝地に添える歌の制作を堂上家に依頼するためにわざわざ上洛する。次に名勝と歌人を挙げておこう。

社頭夜燈 中院通躬／八雲山晴嵐 烏丸光栄／素鷲川千鳥 飛鳥井雅香／御  
崎山秋月 冷泉宗家／真名井清流 冷泉為久／出雲浦魚舟 三条公福／関屋  
翠松 久世通夏／高浜暮雪 武者小路実陰

最後に、「釣月法師墓碑銘写」から釣月の墓碑を造った動機を説明する部分を引用して、彼の出雲の和歌への貢献のまとめとしたい。

此僧なからましかば、一国和歌の正風をしらんや。門様連綿して歌道絶えざる事、奇異の大功をしらしめんと、道脈の門人石を建て、後世に伝へる而已

### 千家俊信

千家俊信（一七六四～一八三二）は七五代国造千家俊勝の次男として生まれる。兄は七六代国造俊秀である。若くして分家。字は清主。葵斎・梅之舎と号する。出雲大社別当。国学者・歌人であるが、天文学・槍術にも通じていた。

幼少より学問を志し、松江で漢学を学んだあと、上洛して垂加神道や愛媛の三島神社神主鎌田五根の橘家神道の教えを受けた。俊信の進むべき道を決定づけたのは二人の偉大な師との出会いである。

一人は「風土記翁」と称される国学者内山真龍（一七四〇～一八二二）である。静岡の天竜市の庄屋であり、二十一歳で賀茂真淵（二六九七～一七六九）に師事する。もともと『出雲国風土記』に興味をもち、ある機会をとらえて出雲への実地検証を思いついたという。『出雲日記』によれば、天明六年（一七八六）二月一六日に出雲国に入り、松江を経由して二三日に大社に到着し国造の神楽などを鑑賞している。書物の上での知識と実際とが違っていたと言及が散見し、この踏査を踏まえたうえで執筆されたのが『出雲風土記解』である。本書はその後写本が多く作成されるほどの評判をとる。

俊信は真龍の名声を知り、寛政四年（一七九二）に弟清足とともに、真龍を訪問、入門し『出雲国風土記』を学ぶ。そして俊信自身も『出雲風土記解』の注釈を基本にし、千家国造家蔵の写本を底本として諸本を参看した『訂正出雲風土記』

上・下二冊を作る。これは、注釈書ではなく、必要に応じて訓点を施し、振り仮名を施すなど解読に適している点に特徴がある。本書は江戸・大阪・京都の三都のほか名古屋などの本屋が名を列ねていることから多くの需要が見込まれたのであろう。

いま一人の師は著名な国学者で医師でもある松阪の本居宣長（一七三〇～一八〇二）である。真龍の勧めにより、書簡を通じて寛政四年に入門する。宣長は神学上、出雲をすこぶる重要視しており、「八雲たつ出雲の神をいかに思ふ大國主を人はしらすやも」と出雲大社の祭神を詠み、出雲を「別而格別之神跡に御座候へば」と揚言しているので、俊信の入門をことのほか喜んでに違いない。入門を果たしたものの宣長に直接会うことはなかなか叶わず、寛政七年九月に初めて「鈴屋」（宣長の私塾）を訪問し、翌八年一月まで滞在する。その間、講筵に列したのは、『湖月抄』をテキストにしての『源氏物語』葵く明石巻、『伊勢物語』『延喜式』『百人一首』であった。二回目の「鈴屋」来遊は寛政一〇年であるが、詳細は明らかでない。三回目の師弟の出会いは京都であり、俊信は享和元年（一八〇二）四月一七日から五月六日まで滞在している。その間、多くの堂上家と会い、また俊信の要望による『古語拾遺』を聴講している。

・宣長は『古事記』『日本書紀』『万葉集』を薦める。

・俊信が歌の詠み方や祝詞の作法を尋ねたり、添削を受けるため自詠を送る。

・宣長は詠歌のために、『万葉集』『古今集』『古今和歌六帖』を薦める。

である。

宣長没後、俊信は師の書簡三三通をご神体として、邸内に玉銚社と称する靈社を建て神として祀るのである。

その後は郷里に腰を落ち着けて、寛政一二年（一八〇〇）ころには開塾していたとされる千家国造館のすぐそばの私塾「梅廼（乃）舎」において門弟に教授するのである。山陰はもとより中四国地方や東海地方からも遊学する者が後を絶たず、「梅舎授業門人姓名録」には二二四名もの門弟がみられ、医師・僧侶・庄屋・商人・武士とさまざまだが、圧倒的に多いのは神官である。女性はいない。千家尊孫（七八代国造）・千家尊澄（七九代国造）・島重老（出雲大社上宮。歌人）・富永芳久（国学者。歌人）・岡熊臣（津和野藩養老館教授）・岩政信比古（山口。国学者）らの俊秀が輩出する。

入門の際には、家業に精を出すこと、神の所為を知ることなどを誓約させてい

るほか、「梅廼舎二十五禁」を設けている。禁止事項を摘記すると、

- ・ 講席で私語をすることや扇を使うこと。
- ・ 「当流の儀」をみだりに他門の人に話すこと。
- ・ 和歌は古体、近体ともに稽古するべきで、近体だけを学ぶこと。
- ・ 講説を聞いて不審な箇所はそのままにすること。
- ・ 門弟同士がお互いに敬い合わないこと。

であり、これは現在の学問研究にもそのまま通用するものである。

最後に、俊信の学問や歌に関わって述べてみよう。

出雲はそれまで儒教を加えた垂加神道が主流であり、その力は侮れないものがあった。しかし、松阪遊学からの帰国後、少しずつ宣長の古学が拡がりをみせており、宣長の俊信宛の書簡に「御帰国後追々、国造様始古学段々発り申候御様子」(寛政八年七月七日)、同じく「追々古学志之人々出来申候由、切々致「大慶」候」(寛政九年三月一日)とあり、古学が拡がりつつある様子が窺える。古学講習が奏効したのであろう。この後、出雲においても古学が着実に普及していく。また、歌についても、古学を学び、古人の心を知った上で詠むべきだと解いた宣長の教えが俊信に大きな影響を与えたことは確実であろう。前述したように出雲は伝統的かつ守旧的な二条家流が主流であったが、新興の鈴屋派(宣長の流派)が拡がる傾向にあったのではないか。

俊信は実作者として全国版の歌集に多く入集して高い評価が与えられており、また指導者としては、『出雲国名所歌集』二編の「森広正興はじめて歌よみける」と見せける時」とする「咲そめしこと葉の花は末つひに八雲の道のおくも匂はむ」をみると、向学の若者に歌の奥義を究めて欲しいと願う優しいまなざしの俊信がいる。

幕末の出雲歌壇隆盛の基盤を築いた人物として高く評価されるべきであろう。

### 千家尊孫

千家尊孫(一七九六～一八七三)は七代国造千家尊之の嫡男として生まれる。天保三年(一八三二)に父の跡を継いで七八代国造となり、子の尊澄に譲る明治二年(一八六九)までその任にあった。

尊孫は国学を俊信に学び、最も熱心にその学統を受け継いだ。歌は出雲大社の上宮千家長通(一七四七～一八一九)の教えを受けたとされているが、俊信の可能性が大いにある。長通は歌を小豆沢常悦に学ぶが、既述のとおり当時は二条家

流の盛んなころであった。長通は「神道歌道茶道達人」であり、尊孫が編纂した『類題八雲集』に一八首も入集している。しかし、結果として、叛旗をひるがえすことになる。「島重老翁の略伝」には前引の文に続いて次のようにみえる。「此時にあたり、翁(注、重老)ひとり古今新古今集の歌風をしたひ、頻に二条家の弊(注、形式主義的で、詠歌の用語の制限があること)を矯めむとつとめられけれども、長通、孝起(注、北島)氏の先輩ありて、これを攻撃すること甚しかりき。時に尊之国造君の令息国造千家尊孫宿禰の君いまだ若くておはし、ほど、ひそかに翁と心を合せ中つ世の風を尊とびたまひければ、辛うじて杵築の歌風を一替せられたりき。其間のいたづきたとへむにもなし」とあり、いわば歌風の世代交代がなされたのであり、その中心となったのが尊孫と俊信の門弟島重老(一七九二～一八七〇)であった。では、尊孫の歌風はどうであったのか。彼自身は「おろかなる我もよはひは季鷹に歌は景樹にまされとぞ祈る」と詠んでおり、歌人の賀茂季鷹(一七五四～一八四一)より長生きをして香川景樹(一七六八～一八四三)にも勝る歌を作りたいというのである。景樹の流派は桂園派と称され歌壇の一大勢力をなしていた。そうすると歌風は前述の鈴屋派とは違っており、俊信の教えを受け継がなかったことになるが、歌の改革をめざした師の精神は十分に理解していたであろう。

尊孫の歌人としての評価はどうであろうか。

まず和歌山の加納諸平(一八〇六～一八七五)が編纂した『類題鯨玉集』では一四四首入集の第一位(総歌人数は一七六〇名)、江戸の鈴木重胤(一八一二～一八三三)の『近世名家歌集』は江戸時代の多くの歌人を挙げるが、後期の歌人にかぎれば第二位であり、全国的にも高い評価を得ていたことが分かる。また尊孫には私家集(個人の歌集)の『類題真璞集』と『自点真璞集』が存し、重複もあるが前者は三七九首、後者は二四一六首の大部な歌集である。前者は嘉永初め(一八四八年ころ)までの自詠を収めたもので刊行年時は安政二年(一八五五)五月、後者はあらかじめ人を選ばせた歌から自身が選んだもので刊行年時は記載されていないが幕末近くであろう。ここで特に問題にしたいのは、版權者のことである。両書は「弘所(ひろめどころ。注、売りさばきだけをする本屋)」として三都や名古屋等の本屋が列挙されている(「大社 和泉屋助右衛門」がみられる)が、本書の見返しに「出雲国杵築・鶴山中蔵」「出雲国杵築・鶴山文庫」とある。これは杵築の「鶴山中蔵」「鶴山文庫」が版木の持ち主、つまり版權者であることを示している。版權者が杵築という一地方であるのでこれはいわゆる

地方版であり、また営利目的ではないと思われるので私家版であるといつてもよいだろう。ただし、彫刻・印刷・製本などの作業は地元では無理ではないかと思われ、三部の専門家にゆだねられたであろうが、詳細は分からない。ともかく財力も含めてこれだけの力が大社にあったのである。

尊孫は歌題ごとに歌を分類したいわゆる類題和歌集の『類題八雲集』をも編纂している。刊行年時は天保一三年（一八四二）である。本書は出雲国人が詠んだ歌を収めたもので、歌人は三四四名、一三二〇首から成り、歌人の内訳は、出雲大社の神官・出雲の神社関係者・松江藩の藩士・豪商豪農と多岐にわたっており、出雲の歌人層の厚さを窺い知ることが出来る。「書肆弘所」として前掲とほぼ同じ本屋がみえ、さらに「出雲国杵築・鶴山社中蔵板」と版權者が記されている。尊孫はまた歌論書『比那能歌語』を著している。これは鶴山社中での講義録が基になっており、文法の誤り、誤用や誤写の多い現状を憂いて執筆したもので、「上代の歌と近世の歌との論」「書写の誤の論」「せしとししの論」「古歌を解に心得あるべき論」などから成る作歌の手引書である。天保九年（一八三八）に「鶴山社中」から刊行されている。

ところで「鶴山社中」とは何なのであろうか。「社中」とはそもそも地域を中心とした同門の集まりをいい、これは千家国造館の裏山にちなむ命名で、歌人結社のことである。これの主宰者は尊孫で、天保年間（一八三〇～四四）の初めころ結ばれたと思しく、明治時代（一八六八）初めころまで活動したとされている。実はほぼ同時期であろう、北島国造館の裏山に因む「亀山社中」が結ばれていたと思われる。主宰者は国造の北島從孝（一七七四～一八三八）か北島全孝（一八〇三～八六）であろうか。つまり、大社という狭い地域に同時期に二つの和歌結社が存在していたことになる。安政五年（一八五八）には両社中が合同で歌会を催行しており（出雲市立大社図書館「両社中内会兼当和歌控」）、お互い歌に励んだであろう様が窺えて興味深いものがある。

#### 富永芳久

富永芳久（一八一三～一八〇）は道久の嫡男として大社に生まれる。多計知・楯津と号する。出雲大社権禰宜。代々北島国造家に仕える社家の家柄である。学殖深く識見に富み、ことに国学や歌に長じていた。

「富永楯津履歴書」によれば、八歳くらいで歌を詠み始めるという早熟ぶりを發揮し、素読と絵を学ぶ。ある年の六月に千家俊信に入門するが、芳久十九歳の

時に俊信は没しており、門弟であった期間はせいぜい見積もっても五年くらいであろう。二十二歳で本居内遠（一七九二～一八五五）に入門を果たす。内遠は宣長の養子大平（一七五六～一八三三）の養子になって和歌山に在住しており、そこが古学研究の中心になっていた。師俊信の薫陶をうけて同じように古学を志したのである。その後、何度も和歌山に滞在しており、国造の北島全孝が和歌山に行く芳久に「帰るべき折なわすれ桜田にことばの花のともはありとも」と饒別の歌を詠むが、かの地に歌友がいたとしても大社に戻ることを忘れないようにと釘をさすくらいに特に歌に熱心だったのである。そのかいあって、三十歳で北島家より「紀州ニテ学問出精」につき賞状を賜り、三十七歳の折には内遠より「古学道教諭専に可致」の免許状を得る。晩年は松江藩より藩校修道館に学師として招聘されたが断わり、社家の師弟教導と古学の研究に没頭する日々を送る。

芳久の学問的業績としては『出雲国風土記』の研究がある。師俊信の『訂正出雲風土記』の解説を主に、宣長『古事記伝』、岸崎時照『出雲風土記抄』、内山真龍『出雲風土記解』などを参照して上梓されたのが『出雲風土記仮字書』である。漢字仮名交じりの読み下し文で漢字にはすべて片仮名でルビを施しており、読みやすい体裁になっている。刊行は安政三年（一八五六）であろうか。これは地方版・私家版ではなく、大阪の「河内屋茂兵衛」からの刊行であり、多くの需要が見込まれたのであろう。

芳久の編纂した歌集を挙げよう。『出雲国風土記』に関わるものに『出雲国名所歌集』（初編、二編）があり、ともに全国の本屋からの刊行である。刊行は「初編」は嘉永四年（一八五二）、「二編」は安政三年である。『出雲国風土記』などにみえる地名を詠み込んでおり、他書から拾集したもの、新たに作られたものなどから成る。「初編」は七五箇所（歌数は一五二首）、「二編」は一一一箇所（歌数は一九四首）となっている。歌人は地元が圧倒的に多いが、「二編」は多くの地方にわたっており、鈴屋派のネットワークを活かしたものであろう。

芳久はまた出雲歌人だけの歌集を編纂している。安政三年に『丙辰出雲国三十六歌仙』を刊行する。私家版であろうか。文字どおり三六名の歌を一首ずつ収めたもので、序は自序と和歌山の西田惟恒、跋は八雲琴の創始者中山琴主である。安政四年には『丁巳出雲国五十歌撰』を大阪の本屋から刊行する。五〇名の歌を一首ずつ収めたもので、序は自序と和歌山の熊代繁里、跋は七代目手銭白三郎有頼の妻さの（狭野）子（一八一三～一八六二）である。安政五年には『戊午出雲国五十歌撰』を大阪の本屋から刊行する。同じく五〇名の歌を一首ずつ収めたも

ので、序は自序、跋は江戸の鈴木重胤である。このように精力的に毎年歌集を刊行しており、これら三集で実人数は一二六名に及ぶ。

芳久は全国版の歌集にも多く入集しており、歌集八冊が残されている。また前述の亀山社中のリーダー格であったと思われる。

最後に、手銭さの子との関わりを述べておこう。

前述したように、さの子は『丁巳出雲国五十歌撰』の跋を書いており、「(芳久が)としごとに国内のうたどもをあつめてえり出給ふに、こたみ此ふみのしりへにひとことをとのたまふもいなみがたく、かつはおなじこころのうれしさにたへず、つゝましさをもわすれはてゝなん」と恐縮しながらも光榮であると記している。手銭家に書簡書きとめが所蔵されているが、さの子の書簡をみると芳久との濃密な親交が窺われる。芳久がさの子に『出雲国風土記』を知らない人が多いと嘆いたり、『源氏物語』の注釈である『湖月抄』を読むさの子に『源氏物語』は歌を作るのに有益になるからよく読むようにと激励し、さの子が借りた契沖の『和字正濫抄』を返却してきた(芳久はこれ以外にも都の本屋から橋守部『心の種』、近藤芳樹『寄居歌談』を入手していたことが分かる。かなりの蔵書家であった)ので松江から届いた短冊を貸与するなどという交渉があった。向学心に富み、若い年のさの子をよほど気に入っていたようである。

#### 千家尊澄

千家尊澄(一八一〇〜七八八)は尊孫の嫡男として生まれる。明治二年(一八六九)に父の跡を継いで七九代国造となり、子の尊福に譲る明治五年一月までその任にあった。松壺・千歳舎と号する。

尊澄は幼少より学問を好み、俊信の門に入り、俊信没後はその高弟岩政信比古に就き、また芳久とともに本居内遠に師事する。遠方の信比古や内遠には書簡でもって教えを乞うている。

歌の業績を紹介しよう。

全国版の歌集に実に多く入集しており、著名な歌人であったことが分かる。当然のことながら、出雲の歌集にも多く採用され、父尊孫の編纂した『類題八雲集』に二四首入り、芳久の『出雲国名所歌集』は尊澄の独壇場といった感がある。これは、ほぼ同年齢の芳久との関係にも拠るのであろう。「松壺歌集」なる私家集があったかとされているが、詳しくは分からない。また尊澄は『はなのしづ枝』という出雲歌人だけの歌集を編纂したであろう(編者が明記されていない

のであるが)。これは大社に在世する五〇名の歌を一首ずつ収めたもの、安政四年(一八五七)の編纂か。序は「すみかげのおきな(不明)、跋は尾張藩士の市岡和雄で名古屋の本屋から刊行される。本書は芳久の『丙辰出雲国三十六歌仙』を批判して刊行の翌年に編纂したという説があるが、芳久との関係からみてどうだろうか。

『歌神考』という歌学書も著している。これは文政一三年(一八三〇)、二十一歳の時に書かれたが、上梓されたのは遅く文久二年(一八六二)九月ころである。「松壺御蔵板」とあり、地方版・私家版かと思われるが、「発行書肆」として三都と名古屋の本屋が名を列ねている。序で本居豊頼は「すみのえ玉つしまの二はしらの神に高角山の大人(注、人麿)をくはへて歌の神にたゝへまうす事、いつのほどよいひいひいだけむ」と述べ、従来の住吉・玉津島・人麿の和歌三神説に疑問を抱いた尊澄がこれを正すべく論じたのが本書であるという。尊澄はどう考えるのであろうか。「みそち一文字の歌は須佐之男命にはじまり・長歌は大国主大神の高志国の沼河比売の御もとにいでましてよませ給へる、八千矛の神の命(注、大国主大神のこと)は八島国云云といふ大御歌にはじまれば・この二大神をなむ此道の祖神とはあふぎ奉るべかりける」とあるように素盞鳴尊と大国主命を歌の祖神とするのである。素盞鳴尊が詠んだ歌はれいの「八雲たつ・」、大国主命の歌は『古事記』上の「八千矛の神の命は八島国・」ではじまる三九句からなる長歌である。尊澄としては、和歌発祥の地は出雲であるから歌神は素盞鳴尊であるし、出雲大社の祭神大国主命でなければならなかったのである。

文章にも秀でており、和文集『松壺文集』がある。全三巻(版本三冊)が刊行されており、一巻は文久三年(一八六三)の跋、二・三巻は慶応三年(一八六七)の跋がみられ、「松壺御蔵板」とある。「このふみは、我松壺君の青柳のいと若くおはしまし、比より、折にふれ時につけて書きつめ給ひたる」文を「松壺の御館にさぶらひてえり出たるになむ」(西邨公群作)とあるように、永年書き溜めた和文から公群らを選んだのであろう。内容は本居大平著『餌袋日記』の序、中山琴主著『八雲琴譜』の序、「岩政信比古碑詞」など多岐にわたり、そしてまったくの創作もみられる。歌に関する記事も多くあり、たとえば巻一「子規(注、ほととぎす)の詞」に「月いみじうをかきころ、こよひはかならずとおもふ折しも、ひとこゑほのめかして過ゆきしは、あかすくちをしようなむ。かの実定卿のただ有明のとよまれけるもかゝるさまにやありけむかし」とある。時鳥が予期したとおりに鳴いたので、藤原定定の「時鳥鳴きつるかたをながむればただ有明の月

ぞ残れる」(百人一首)を思い起こしたのである。

出雲の歌壇に関わる逸話を取り挙げよう。巻二「秋の暮に人の許にてといふことを」に「みやびこのめるながしがもとにて、秋のなごりをしむ歌よまんとて、かれこれあひしれる人々ものしけり。いづれもをかしうもあはれにもよみ出たれど、こゝにしろるさんはとかきもらしつ。されどありしことゝもはかつがついはんとす。たゞに歌のみにて秋のわかれを、しまんはかひあらじとて、何がしは竹取物語、くれがしは大和ものがたりをときよと、おのがじしくさゞの物語ふみをとうでて、ものゝあはれをいひしらひけるはみやびかなるまとゐなりきかし」とある。風流人士に人々が集まつて秋を惜しむ歌を詠むが心残りであるとして、さらに各自が『竹取物語』『大和物語』などの話をしたという。「まとゐ」は円居で車座のことであり、多くの者が一箇所に集まり会すること、会合の意味もある。どれだけの人が集まったか不明ながら、鶴山社中あるいは亀山社中の同志で歌会が催行されたと思われる。また、二巻「寄雨恋のこゝろを」に「けふの歌のまとゐは寄雨恋といふ題なるを・・・」、三巻「草を」に「この頃何がしが我友のもとに来て歌ものがたりのかうげちのひまには歌のまとゐをなんものしける・・・」と「歌のまとゐ」がみられる。実はこれらの歌会のこととは他の資料によっても窺い知ることができる。手銭家に「ちとせの舎(注、尊澄)御せうそこ」という書簡書きとめが所蔵されているが、「人のもとへ紫文消息をかりに遣しける時」とある書簡に「きのふはたいめたまはりて、おかしき御ものがたりうけ給はりしはいみじうなん。さてはとしのはじめの歌まとゐのしはてたれば、少しはこゝろのどまるやうにはべれば・・・」、また「文ことばのまとゐをものせんとておなじ人のもとに遣しける」の書簡に「・・・きのふは歌のまとゐのはじめにて侍りしかば、おもしろき御ことのはどもをうけたまはりて、けふも猶くりかえしはずしはべる・・・」とある。これらの書簡の「としのはじめの歌まとゐ」「歌のまとゐのはじめ」とみえる歌会とともに歌会始であったといひ、月次の歌会が行なわれていたと推測される物謂いである。大社という狭い地域で二社中が歌会を毎月開き、研鑽に励んでいたのである。

(付記)

拙著に『江戸時代の出雲歌壇』(今井出版)がある。

#### ◆プロフィール◆

あしだ・こういち 一九四六(昭和二一)年生まれ  
神戸大学大学院文学研究科修了。専門は古文学、和歌文学。出雲地方の和歌研究も行う。主著『六条藤家清輔の研究』(和泉書院 二〇〇四年)『出雲国名所歌集―翻刻と解説―』(ワンライン 二〇〇六年)『清輔集新注』(青簡舎 二〇〇八年)『江戸時代の出雲歌壇』(今井出版 二〇一二年)など。

## 【論考】 俳諧史の中の出雲・大社・手銭家

伊藤 善隆

(湘北短期大学総合ビジネス学科准教授)

## はじめに

手銭家蔵書の俳書調査の結果について報告する。併せて、出雲俳諧に関する先行研究を検証した結果についても簡単にまとめておきたい。すなわち、本稿では、①先行研究、②貞門期(正盛、黒沢弘忠)、③元禄期(風水)、④享保期(節山、季硯、冠季)、⑤宝暦期(百羅)、⑥安永・天明期(雪旋ら)、⑦化政期(浦安、有秀)について記述することとする。

## 一 出雲俳諧に関する先行研究

これまでの出雲俳諧に関する主な著作・論文に以下のものがある。  
 ・桑原視草『出雲俳句史』(昭和十二年九月、私家版。なお、昭和五十三年四月に、だるま堂限定版として複製された)

- ・桑原視草『出雲俳壇の人々』(昭和五十六年八月、だるま堂書店)
- ・松井立浪『俳人魚坊』(昭和二十五年九月、魚坊翁顕彰会)
- ・大磯義雄『岡崎日記と研究』(昭和五十年十月、未刊国文資料刊行会)
- ・大磯義雄「高見本『岡崎日記』『元禄式』の出現と去来門人空阿・空阿門人百羅」(『連歌俳諧研究』87号、平成六年七月)
- ・復本一郎「蕉風伝書における「皮肉骨」についてのノート―『伝書古池之解』を紹介しつつ―」(神奈川大学『国際経営論集』1、平成二年三月)

なお、平成二十三年以降の手銭家蔵書調査の成果として、稿者もこれまで以下の稿を発表した(現時点での刊行予定も含む)。

- ・「季硯句集『松葉日記』―手銭記念館所蔵俳諧資料(一)―」(『山陰研究』6、平成二十五年十二月)
- ・「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(一)―手銭記念館所蔵俳諧資料(二)―」(『湘北紀要』35、平成二十六年三月)
- ・「百羅追善集『あきのせみ』―手銭記念館所蔵俳諧資料(三)―」(『山陰研究』7、平成二十六年十二月)

・「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(二)―手銭記念館所蔵俳諧資料(四)―」(『湘北紀要』36、平成二十七年三月)

以上の先行研究のうち、『出雲俳句史』が通史として重要であるが、同書は、近代以前の出雲俳諧について、大変厳しい評価を下している。

明治以前の出雲俳壇は全国的地位から云へば甚だ低くかつたと云はなければならぬ即ちこれ等の俳人にして日本俳諧史上にその名を残すほどの者は一人もない。されば彼等が明治以後に輩出した出雲の俳人に対して何等英雄的先覚的存在とはならなかつたことは申すまでもないが有形無形に与へた好影響はこれを認めぬわけには行かない。

(『出雲俳句史』「第一編 明治以前 第一章 概説」)  
 ただし、当時、著者の桑原氏が参照できた資料には制約もあり、その内容に訂正を要する点もある。そのことも併せ、右の評価が妥当なものであるのか、以下で検討することとしたい。

## 二 貞門期―元禄以前の出雲俳人

この時期について、『出雲俳句史』にはつぎのようにある。

元禄以前には松江に宗岷、杵築に岡垣正次及び願楽寺住職円意の名を見るこ  
 とが出来た。彼等は何れも談林風の俳諧に遊んだが続いて元禄宝永年刊に活  
 躍した日御碕の日置風水も亦初めは談林風の句を吐いてゐる。彼は実に元禄  
 前後の出雲俳壇を代表すべき俳人で晩年の句風は蕉風に近い。なほ風水の外  
 に高勝寺文峰の名が見える。

(『出雲俳句史』「第一編 明治以前 第一章 概説」)  
 桑原氏は、とくに典故を示さずに俳人たちの名前を挙げるが、正次、円意、文  
 峰は、三千風編『日本行脚文集』(元禄三年奥)に載ることが確認できる。また、  
 風水は顕著な活動を示した、いわば著名俳人である。

とすれば、残る宗岷が問題だが、『出雲俳句史』には、重ねてつぎのようにある。  
 談林俳諧の盛んであつた頃、松江には宗岷があつた。

淋しさにたへたる秋の寝酒かな 宗岷

(『出雲俳句史』「第二章 元禄前後」)  
 右の句の出典も記されていないが、検索したところ『誹林一字幽蘭集』中巻に

載ることが確認できた。ところが、「宗岷」の句を、さらに他の俳書に探していくと、その住所と姓は、以下のように記されていることが明らかになる。

「宗岷」…重頼編『四十番俳諧合』（寛文五年）

「京之住」「松江 宗岷」…重頼編『時勢粧』（寛文十二年）

「同（京） 宗岷」…頭成編『手繰舟』（寛文十一年）

「松江 宗岷」…良庵編『松花集』（寛文十三年）

「京之住」「松江 宗岷」…維舟編『大井川集』（延宝二年）

「山城国京住」「松江 宗岷」…風虎編『桜川』（延宝二年）

「宗岷」…『俳諧三ツ物揃』（延宝三年）

「京之住」「松江 宗岷」…維舟編『武蔵野集』（延宝四年）

「京」「宗岷」…橋水編『つくしの海』（延宝六年）

「松江 宗岷」…沾徳編『誹林一字幽蘭集』（元禄五年）

これらは（おそらく全て）松江住の宗岷ではなく、京都住で松江姓の宗岷だと考えられる。したがって、「宗岷」は出雲俳人ではない。

なぜ、こうした誤認が生じたのか。桑原氏が戦後に出版した『出雲俳壇の人々』につき記述がある。

私が「出雲俳句史」を書いた時、貞享二年、伊勢の大淀三千風が諸国漫遊の途次、石見を経て出雲へ入った折、その記に「出雲国、願楽寺円意」の名があることを野田別天楼が「山陽山陰俳諧史」―改造社版、俳句講座第十巻―に書いたのを引用した。

つまり、桑原氏は『俳句講座』に載る野田別天楼の「山陽山陰俳諧史」を参照していた。あらためて『俳句講座』を確認すると、はたして別天楼が宗岷を松江の俳人と誤っていたことが確認できるのである。

そこで、元禄以前の出雲俳人を検索したところ、つぎの結果が得られた。

正保四年（一六四七） 重頼編『毛吹草追加』…「出雲之住 正盛」入集。

万治三年（一六六〇） 重頼編『懐子』…「出雲松江 長知」入集。

寛文二年（一六六二） 如才編『伊勢正直集』…「出雲国松江住 具足屋如才」、「出雲国同処（松江） 中井重正」、「出雲国松江住 長谷川友慶」、「同（松江住）

重村就武」、「同 豪祚」、「同 可之」、「同 長治」、「同 生田経永」、「同

田代寿伯」、「同処 飯沼長知」、「同処 木屋友一」、「同処 斎藤高周」、「同

処 村松教時」入集。

寛文四年（一六六四） 重頼編『佐夜中山集』…「出雲之住重村氏 就武」入集。

【成果公開】

寛文四年（一六六四） 梅盛編『落穂集』…「出雲」として、「黒沢氏 弘忠」、「中

井氏 重良」、「松浦氏 重武」、「重村氏 就武」、「山井氏 席塞」、「斎藤氏

宗俊」、「中井氏 重正」、「斎藤氏 高周」、「山添氏 命哉」、「長谷川氏

友慶」、「熊谷氏 半閑」、「曲成」、「古川氏 如毛」、「加言」、「不弁」、「重季」、

「松江、心花」、「重矩」、「汕学 不及」、「冬刻」、「政盛」、「福田氏 道折」、「清

直」、「昌勝」、「将尾」、「時興」、「坂本氏 吉次」、「松江 不白」入集。

寛文七年（一六六七） 湖春編『続山井』…「出雲国岡田氏 持尾」入集。

寛文八年（一六六八） 梅盛編『細少石』…「出雲」として、「松江住 政盛」、「友

慶」、「重村氏就武」、「田代氏寿伯」、「斎藤氏高周」、「古川氏如毛」、「冬刻」、

「重矩」、「不白」、「是焉」、「後榮」、「古田 不并」入集。

寛文十二年（一六七二） 重頼編『時勢粧』…「出雲松江」として、「有沢速晰」、「伊

達不及」、「桑原 盗閑子」、「福田道折」、「古田不芥」、「松川末尚」、「随寛子

直玄」、「松浦重武」、「熊谷 半閑子」入集。

寛文年間 種寛編『誹諧作者名寄』（寛文年間刊）の「山陽道 八ヶ国」に「出雲 斎藤高周」が載る。

延宝二年（一六七四） 維舟編『大井川集』…「出雲松江」として、「大虚院 直

玄」、「池田 勝成」入集。

延宝二年（一六七四） 風虎編『桜川』…「出雲松江住」として、「松浦重武」、「直

玄」入集。

延宝二年（一六七四） 素閑編『伊勢躍音頭集』…「出雲国」として、「長谷川友

慶」、「中井良重」、「中井重正」、「隅軒竹翁」入集。

延宝三年（一六七五） 重安編『糸屑集』…「出雲 過改」入集。

延宝四年（一六七六） 維舟編『武蔵野集』…「出雲松江 大虚院直玄」入集。

延宝五年（一六七七） 立圃・友貞編『唐人躍』…「出雲国 就武」入集。

以上に拠れば、近世出雲俳人の劈頭を飾る人物は、『毛吹草追加』に入集する「出雲之住」の「正盛」である。同書句引には「出雲之住／正盛 一」と記載され、本文には次の二句を載せる。

薫来る梅花は春の日あひ哉 正盛（『毛吹草追加』上・春・梅）

見ると聞とちがふ木葉の時雨哉 正盛（『毛吹草追加』下・冬・木葉）

（新村出校閲、竹内若校訂『毛吹草』岩波文庫、昭和十八年十二月）

なお、『毛吹草追加』の句引に拠れば、同書には「京之住」四九名、「摂州大坂之住」四二名、「武州江戸之住」二一名、「泉州堺之住」二二名が載る他は、いず

れの地域からも数名、多くても四、五名の入集である。つまり、三部の俳人が圧倒的に多かつたのである。出雲俳人の数が、他に比べて特段に少なかったわけではない。

貞門期の出雲俳人のうち、注目すべきは、黒沢弘忠（慶長十七年～延宝六年）である。弘忠は、石斎と号した儒者で、寛永十八年三月に松平直政に仕官して、世子綱隆の教育を任された。右に、梅盛編『落穂集』（寛文四年刊）に入集するその句をあげておく。

先いはへ内證所のかゝみもち 雲州黒沢氏 弘忠

『落穂集』巻第一「立春」

峯に先はなたかぶりの一木かな

雲州 弘忠（※濁点原本ママ）

『落穂集』巻第二「花」

夏やせか十六七夜月のかほ

雲州 弘忠

『落穂集』巻第三「夏月 付短夜」

雪ならぬしらかをふせく笠もかな

雲州 弘忠

『落穂集』巻第六「雪」

以上、貞門期の出雲において、相当数の俳人が活動していたことを明らかにすることができた。なお、住所の記載があるものはいずれも「松江」である。他地域では、まだそれほど盛んでなかったと見ることができよう。

### 三 元禄期―風水の俳歴

談林期から活動を見せる出雲俳人に、風水（？～宝永六年）がいる。風水は、日置氏。別号、空原舎。出雲国日御碕の神宮で、とくに鬼貫と親交があったことが知られている。その活動を概観するため、当時出版された俳書への入集履歴を列挙してみよう。

延宝六年（一六七八）

・不卜編『俳諧江戸広小路』（七月）に、発句一句（「武蔵」「江」「風水」）入集。

延宝九年（一六八一）

・似船編『安楽音』（三月）に、発句一句（「武蔵国同所（江戸）」「風水」）入集。

貞享二年（一六八五）

・清風編『稻菴』（正月序）に、発句四句入集（「雲州大社 風水」）。

・調実編『辨白根嶽』（正月序）に、跋（「空原舎風水書」）・発句二句（「雲州風水」）入集。

・調和編『辨ひとつ星』（十二月序）に、序（「空原舎風水序」）・発句四句（「風水」）・三吟歌仙一卷（風水・調和・心水）入集。

貞享三年（一六八六）

・江戸滞在。『風水ちり』に、次の句が載る。「閏三月三日 けふも汐干よとて品川の沖に遊ぶ／門跡は山より高花の浪」（『風水ちり』六丁裏）

※この前後、閏三月があるのは、この年のみ。

貞享四年（一六八七）

・羊素編『浮月』（六月奥）に、発句（「風水」）・残存十二句一卷（風水・立志ほか）。

世吉一卷（立志・風水ほか）入集。

※伝本（洒竹文庫蔵本）破損のため、全貌は不明。

貞享五年（一六八八）

・不卜編『続の原』（二月序）に、発句二句（「風水」）入集。桃青（芭蕉）の判を受ける。

元禄三年（一六九〇）

・団水編『辨秋津嶋』（十月跋）に、発句一句（「出雲 風水」）入集。

・灯外編『誹諧生駒堂』（十一月跋）に、発句四句（「雲州 風水」）入集。

・順水編『辨破曉集』（十一月刊）に、発句一句（「雲州 風水」）入集。

元禄四年（一六九一）

・順水編『辨渡し船』（正月刊）に、発句二句（「雲州 風水」）入集。

・江水編『元禄百人一句』（三月序）に、発句一句（「出雲 風水」）入集。

・輸土編『我が庵』（六月序）に、発句一句（「雲州 風水」）入集。

・分十編『辨よるひる』（十一月序）に、発句一句（「出雲 風水」）入集。

元禄五年（一六九二）

・幸賢編『河内羽二重』（正月刊）に、発句一句（「出雲 風水」）入集。

・季範編『きさらぎ』（二月序）に、発句一句（「雲州 風水」）入集。

・都水編『風水ちり』（四月刊）に、発句九〇句・和歌五六首・連歌発句三首・漢詩一首（作者名不記）・連句二四組入集。

元禄六年（一六九三）

・壺中編『辨弓』（九月刊）に、発句一句（「風水」）入集。

元禄七年（一六九四）

・嵐雪編『或時集』（九月跋）に、発句一句（「風水」）入集。

・不角編『足代』（元禄七年奥）に、発句一句（「風水」）入集。

※ただし、同名異人の可能性あり。

元禄十一年(一六九八)

・艶士編『みづひらめ』(六月刊)に、発句一句(「雲州 風水」)・三吟歌仙一卷(「風水・艶士・立志」)入集。

元禄十三年(一七〇〇)

・笑種編『続古今俳諧手鑑』(十月序)に、発句一句(「出雲日置主殿 風水」)入集。

元禄十五年(一七〇二)

・巨海編『翻石見銀』(五月跋)に、発句二句(「雲州三崎 風水」)入集。

元禄十六年(一七〇三)

・梅員編『岨のふる畑』(五月刊)に、発句一句(「雲州三崎 風水」)入集。  
・集義編『鬪遠浅』(九月刊)に、独吟十六句(「風水、附録」)入集。

※散逸書。

元禄十七年(一七〇四)

・座神『風光集』(二月跋)に、発句一句(「風水」)入集。

宝永元年(一七〇四)

・艶士編『分外』(三月跋)に、跋(「風水書」)・発句二句(「風水」)入集。

宝永二年(一七〇五)

・風水編『隠岐のすさび』(六月以降成)に、発句二九句・歌五二首・独吟八句(「風水、手向の百韻/下略」)入集。

宝永三年(一七〇六)

・百里編『銭籠賦』(九月跋)に、三十七吟百韻(「杉風・嵐雪・其角・曾良・風水ら、芭蕉菴眺望」)入集。

宝永四年(一七〇七)

・梅員編『猫筑波集』(二月序)に、発句三句(「出雲 風水」)入集。

・貞義編『心ひとつ』(三月序)に、三吟三句(「風水・貞義・柳水」)入集。

宝永五年(一七〇八)

・江戸に向けて旅行中、京都で鬼貫・立吟に会う。  
「宝永四丁亥のとし出雲風水東武に下りなんとて京に登りけるにあひて八雲立京に秋立富士に立 鬼貫/空に一字の衣かりかね 風水」、「皇都名月の吟/禁中の月見に行ん筈さけて 風水/今に酒か酒は年々新しき 立吟」(『すがむしろ』)

・東北旅行より出雲へ帰る。『出雲俳句史』につぎの真跡短冊の図版が載る。「宝永五年東北旅行より郷に帰りて/国々の春待して山の雪 風水」(『出雲俳句史』口絵「大社 島重夫氏蔵」)

・秋色編『齋非事』(二月跋、其角一周忌追善集)に、発句一句(「風水」)、十八吟百韻一卷(「沾徳・貞佐・風水・青流・沾洲ら、「非時/右百院深川於芝山庵各満座」)入集。

・「俳諧之連歌」(十一月成)七吟百韻(「風水・鶏賀・鬼貫・路通・原水・雨伯・之白・執筆・可白、「宝永五年霜月五日/俳諧之連歌」)に一座。

※懐紙四枚。柿衛文庫蔵。風水を京都の鶏賀亭に迎えた歓迎興行。

・百里編『とをのく』(十一月跋、嵐雪一周忌追善集)に、三十六吟歌仙一卷(「露沾子・沾徳・沾洲・青流・杉風・破笠・風水ら、「師雪山靈尼かために薦抜の一章あり」)入集。

・和英編『万句短冊集』(宝永五年冬成)に、三吟三句一卷(「風水・和英・山夕、春 第二のむすひ」)入集。

宝永六年(一七〇九)

・九月十九日没(『出雲俳句史』に日置家の過去帳によるという。なお、『新選俳諧年表』(書画珍本雑誌社、大正十二年十二月)では、九月二十二日没とする)。

辞世「人間の水はそらく秋の風」(『すがむしろ』)

享保十二年(一七二七)

・追善集『すがむしろ』刊行。十里香松峰の序に「空原舎風水は出雲国 日御崎の神官也。いにし年神務の事に物して関東に往来すること年あり」云々とあり、江戸との往来が頻繁であったことを記す。

年次不明

・鬼貫の『続七草』には、風水が来山と同道して鬼貫に初めて面会に来たとの記述がある(岡田利兵衛『鬼貫全集 三訂版』角川書店、昭和五十三年七月)。

右のうち、『俳諧江戸広小路』と『安楽音』には武蔵江戸住として記載されるので、同一人物であるか検討の余地はある。ただし、『稲庭』の貞享元年からとしても、没年の宝永六年までは二十五年の俳歴となる。三都をはじめ各地の俳人たちと交渉があったことも明らかである。つまり、風水は、俳諧史上で重要な「元禄俳諧」の担い手の一人である。芭蕉や素堂、信徳や湖春、西鶴や鬼貫、其角や嵐雪といった当時の著名俳人たちと接点を持っていたと推測される。風水の活動は、出雲という地域に限定されるのではなく、当時における普遍性を備えた一流のもので

あつたと言えよう。

#### 四 享保期―節山と季硯、冠李

この時期は、これまでの出雲俳諧史では、いわば空白期であつた。『出雲俳句史』は、つぎのように述べる。

風水以後しばらく中絶して天明前後になると、松江に松平雪川があり、杵築に広瀬百羅、同浦安（中略）がある。

（『出雲俳句史』第一編 明治以前 第一章 概説）  
この「中絶」時期の資料として、元文四年の年記のある『誹要辨』、『俳諧すがた見』という二種類の伝書を見出すことができた。これは、淡々門の不識庵節山が大社に滞在した折、前者を杜千に、後者を冠李に与えたものである。また、やはり手銭家蔵書中には節山の短冊と懐紙が一枚ずつ存在すること、さらに手銭家の日々の記録である『萬日記』中に、節山たちが鷲神社に奉納した俳額の写しが載ることも確認された。後述するように、大社の俳壇には、はじめは美濃派、のちには去来系の俳諧が入っているが、両書の存在が確認されたことにより、ごく初期には淡々系の俳諧が入っていたことが明らかにしたのである。



また、節山から『俳諧すがた見』を伝授された冠李については、これまでその俗名や続柄が不明であつたが、最近になって手銭記念館事務局長手銭裕子氏による手銭家墓所内の墓石の調査が行われた。その結果、俗名は兵吉郎（享保四年、寛政八年）、続柄は季硯の弟、戒名は花菴行栄居士、没年は寛政八年で七十八歳だったことが確認された。

さらに、冠李の俳諧活動については、これまで、美濃派の雲裡坊編『蕉門名録集』（宝暦二年刊）への入集が、大磯氏によって指摘されていたが、加えて洗耳（沾耳）坊編の『七十子』（寛保三年跋、芭蕉五十回忌追善集）、『梅日記』（延享二年刊）に、左の句が入集することが確認できた。

旅好の一つればやし年の梅

雲州大社 冠李

（沾耳坊編『七十子』寛保三年跋）

出雲 大社

月人の云名付ありそはの花

杜千

真紅に狂ふ殿の若鷹

沾耳

石臼の届く裏町秋更て

柳波

心やせなく旅を落着

五溪

湯上りと茶によい程の降にけん

冠李

少ない髭をほめる團絵

関山

（沾耳坊編『梅日記』延享二年刊）

なお、『梅日記』には、右の「出雲 大社」俳人たちとは別に「雲州 松江」の俳人として、尾鷲・沛芥・野芥・富窓・泉滴・寸艸・露舎・不酔・思道・潤鼓・和風・普睦・嵐里・湖嵐・文波、が入集する。これは、松江の俳壇とは別に大社の俳人たちが独立して扱われていることを示している。つまり、この時期には、すでに大社で俳壇が形成されていたのであろう。

また、『蕉門名録集』には、冠李だけでなく、季硯をはじめ、李夕・五溪・素川・魯什・石泉・飄尾・酔月・寸松・文裏・呂植・雲坡・酔月、が「大社連中」として入集する。同書は四季別に部立てがおこなわれており、四季の各部に「出雲州／大社連中」が入集している。そのうち、左に「春之部」の当該箇所を引用してみたい。

出雲州

大社連中

しら梅やいつれの枝を銀河

季硯

蕨にはへつらひもあり梅の花

李夕

白梅や去年の氷柱のしつくより

五溪

しら梅や木の下住のほし月夜

冠李

ゆつり状書て老たる柳かな

季硯

野あそひの袂にのこるすミれ哉

素川

糸ゆふのつなく隙なきひはりかな

三刀屋

梅かゝにけふも暮たり芝のうへ

魯什

（『蕉門名録集』春之部）

ここで注目すべきは、魯什に「三刀屋」の住所が記されていることである。句の配列を考えると、おそらく石泉も三刀屋の俳人であろう。夏之部と秋之部に魯什の句が入集していないが、そこに入集する酔月の名前には、魯什と同様に「三刀屋」の住所が付記されている。なお、夏之部は酔月・石泉・寸松、秋之部は酔月・

寸松の順で入集しているので、石泉・寸松も三刀屋の俳人であった可能性が高い。右の記載から推測されることは、この時期（百羅が去来系の俳諧を出雲に持ち帰る以前）には、大社と三刀屋の俳壇はまだ未分化で、ともに美濃派に属していたのだろう、ということである。

### 五 宝曆期—空阿と百羅、手銭家

大社俳壇に大きな転機が訪れたのは、百羅（広瀬氏、百羅とも記し、茂竹庵と称した、享保十六年？〜享和三年）が去来系の俳諧を出雲に持ち帰ってからである。百羅が京都で空阿（去来甥）のもとに通ったのは宝曆八年七月から約四ヶ月間、また出雲で百羅が嵐白に与えた伝書『蕉門発句十五味』（手銭記念館蔵）の奥書には宝曆十年十月の年記がある。とすれば、宝曆九〜十年頃が、大社俳壇にとっての転換点だったと考えて良い。

百羅は、出雲大社の社家（千家家の代官役）に生まれたが、その母は手銭家の二代目茂助長定の娘である。『出雲俳句史』は、以下のように記す。

俳諧は二七八才の頃より志し当時有名だった宋屋、嘯山、竿秋、移竹等を尋ね、彼等を友とし武然、蝶夢とも吟会した（中略）が結局宗とすべきは芭蕉の外に一人もないとてこれを師と仰いだ。（中略）百羅は幾多の著述をなしたが書店にひさがず何れも書庫に秘めて他見を許さず、句集に入集を乞はれても決してこれを肯じなかつた。又門人をとつて生計を営むが如きことはしなかつたけれども文通した者は四百餘人の多きに及び特に近しくした人だけでも六十餘人に達したといふ。（中略）百羅自身は門人を取らなかつたのであるが彼の門に出入した者は皆彼の門人と心得たのである。中でも其子の日々庵浦安、孫の蘭々舎茂竹、春日信風、田中安海、古川凡和、加藤梅年等是有名である。（『出雲俳句史』第一編 明治以前 第三章 天明前後）

『出雲俳句史』には、百羅が空阿と接触したことは記されていない。そのことを明らかにした資料が、大磯氏によって紹介された『岡崎日記』である。同書は、宝曆八年七月二日、百羅が吉田訥子という人物の案内で、洛東岡崎に隠棲する中田空阿（延宝五年〜宝曆十年）を訪問し、以後、芭蕉・去来の俳諧に関する指導を受けた際の問書である。

大磯氏の研究により、空阿が去来の伝書を多数所持していたこと、百羅がそれを譲り受けて、出雲に持ち帰ったこと等が明らかになった。空阿は、「去来之甥中田庄五郎」（『岡崎日記』）と伝えられるが、大磯氏は、実際は去来の庶子では

なかつたか、と推測している。いずれにせよ、芭蕉・去来に連なる伝書が大社にもたらされたことは、以後の大社俳人たちのアイデンティティを形成する上でも重要な出来事となった。

さて、その百羅の伝書の特徴は、他門に対して一線を画する姿勢であり、美濃派批判である。たとえば、自説を展開した後、「他門に対して論ずべからず」（『蕉門発句十五味』）とか、「大カク美濃ノ支考方説二惑ハサレ（中略）他門二洩サヌ様ニシテ、随分大切ニ致ス事ゾ」（『極秘俳諧初重伝』）などという言葉が添えられる。

これは、いつけん排他主義的だが、実際は他門との不必要な軋轢を回避するための方便だったろう。職業俳人でなかつた百羅にとって、ことさら自説を主張して周囲と諍いを起こす必要はなかつた。とくに三刀屋の美濃派俳人たちは、季硯・冠季たちと親しくしていたのだから、もし百羅の美濃派批判が安易に外へ漏れれば、面倒な紛争が起こるのは必至である。しかし、百羅の周到さによって、採め事はどうやら無事に回避されていたらしい。百羅の追善集である『あきのせみ』（文化二年跋）には、「三刀屋連」の東明や喜朝など、美濃派俳人たちも追善句を寄せていることが確認できる。

その後、百羅の系譜は、子の日々庵浦安、孫の蘭々舎茂竹と引き継がれた。手銭家蔵書中には、蘭々舎茂竹が「落柿舎五世」と署名した芭蕉像が残っており、孫の茂竹の代にあつても、去来からの系譜が大切なものとして意識されていたことが判る。

いっぽう、手銭家の系譜は、白澤園季硯（三代）と徳園人冠季（季硯弟）から、敬慶（四代）、衝冠斎有秀（五代）と続くが、この手銭家と広瀬家との関係がいかに親密であつたかは、百羅の追善集『あきのせみ』（文化二年跋）に有秀が序文を寄せ、有秀の追善集『華鬘嬰』（文政四年跋）に浦安が跋文を寄せていることから想像できる。両家は、たんに血縁があつたという以上に、共に大社俳壇の指導的立場を占めていたと見ることができ。

なお、補足しておけば、大磯氏は、『岡崎日記』の調査を進める上で、出雲俳諧に関する質問を桑原氏にしたという<sup>1)</sup>が、その折の回答では、「季硯は不明」とのこ



とだったという。桑原氏、大磯氏の調査で明らかに出来なかった季候について、本稿で明確に報告できることは、今回の調査の重要な成果であると言ってよいだろう。

同時に、大磯氏は、同じく桑原氏からの回答として「百羅の著述の存在については昭和三十七年十一月三日に大社町で「広瀬百羅翁顕彰展」があり、招かれて拝見、貴重なものが漢学・国学・和歌・俳句等々諸家に保存されている」と報告している。その「広瀬百羅翁顕彰展」の目録（分り版）も手銭家蔵書中にあり、百羅関連資料のリストとして貴重である。ただし、残念乍ら、その後に散佚したものも多いようだ。今後の再発見が望まれる。

#### 六 安永・天明期―雪淀と手銭家

先にも引用したが、『出雲俳句史』には、つぎのようにある。

風水以後しばらく中絶して天明前後になると、松江に松平雪川があり、杵築に広瀬百羅、同浦安（中略）がある。而して此時代を代表する者は雪川であらう。

右において「此時代を代表する」と評価された雪川（治郷弟衍親、為楽庵、宝暦三年（享和三年））だけでなく、松江藩松平家歴代の当主たちも俳諧に遊んだ。まず、雪淀（六代藩主宗衍、享保十四年（天明二年））、ついで雪羽（宗衍息、七代藩主治郷、不昧、宝暦元年（文化十五年））、そして月潭（治郷息斉恒、露滴齋、宗潔、寛政三年（文政五年））である。

ふつう、大名は参勤交代で江戸に滞在することが多かったため、地元の俳諧ではなく、江戸座の俳諧に親しみ、俳諧を通じて大名同士で交際もした。『出雲俳壇の人々』につきの指摘があるのは、雪川たちもその例外ではなかったことを示している。

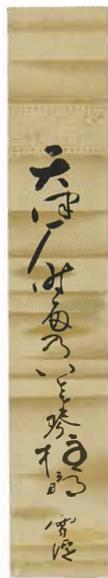
雪川の俳句の師匠といふか、指導的存在といふか、とにかく雪川俳句に大きな影響を与へた人は、伊勢国神戸の城主本多清秋であった。清秋は俳号で、本名は本多忠永といひ、享保九年五月十七日生れ、文化十四年五月十七日卒で、（略）清秋と雪川の親しかった関係や、その句文を通して見る時、彼等の指導にあたったのは小栗旨原であると考えられる。

（『出雲俳壇の人々』「文化・文政前後 松平雪川」）  
「彼等の指導にあたった」とされる小栗旨原（享保十年（安永七年））は、江戸座の超波門の俳人で、百万坊、伽羅庵と称した。その句集『風月集』（安永六年

年刊）には、雪淀と清秋が共に序文を寄せているし、本文を見ても、たとえば、「雲州公の高門にのそむ時」、「雲州公の御供して」、「雲州公侍座」、「初て雲州公へまいるし時」、「雲州公御家督譲り給ひし時」、「雪淀公侍座即席」などという前書きのある句が収録されており、旨原と雪淀の関係が深かったことが確認できる。

さらに、旨原の門人で『風月集』の編者の一人であった星霜庵白頭は、「雲州松江藩主松平出羽守様御抱」（『星門系譜』）八戸俳諧倶楽部蔵）であったと伝えられるし、やや後の資料だが、伽羅庵を継承した麻中の編になる『春帖集』（文政三年刊）の巻頭には露滴齋（月潭）の句が載っている。つまり、雲州松平家は、江戸座の中でも旨原の一派と深い繋がりを持っていたことが判る。繰り返しになるが、これは大社の去来系でも三刀屋の美濃派でもない俳諧である。

ただし、手銭家蔵書中にも、松平家に関係する俳諧資料がある。雪淀の短冊が存在するし、伽羅庵麻中の『春帖集』も所蔵されている。さらには、大坂の五彩堂矩が雪淀の句に加点した懐紙帖も伝来する。



しかし、これらの資料は、雪淀や月潭と大社の俳人たちが親しく一座した結果伝来したのではなく、何かの折に藩主から頂戴したものと考えることが妥当だろう。

#### 七 化政期―浦安と有秀

この時期以降の出雲俳諧について、『出雲俳句史』はつぎのように記述する。  
化政時代に於ては簸川郡布智村に椎の本花叔があり松江に奈良井元朝がある。而して彼等の句風は大体中央に於ける当時の俳風と大差ない。

（『出雲俳句史』「第一編 明治以前 第一章 概説」）  
幕末時代には松江に山内曲川、裏辻耕文があり、杵築に広瀬浦安の子蘭々舎茂竹、春日信風、田中安海、古川凡和、加藤梅年等があり能義郡に母里藩主松平四山及び比田村に若槻楚青がある右の内杵築の俳人はいづれも百羅の流れを汲んだが総じて当時の俳句は後年正岡子規が月並と称して軽蔑したもので見るべきものが甚だ乏しい。而して此時代を代表する者は曲川である。

（『出雲俳句史』「第一編 明治以前 第一章 概説」）  
右の評価は、句風を基準にしたものであるため、どうしても「大差ない」「見

るべきものが甚だ乏しい」と厳しい言葉になつてしまつてゐる。というのは、正岡子規が「月並調」と批判して以降、政期以降の俳諧には低い評価しか与えられていないからである。しかし、俳人たちの活動に注目すると、じつはなかなか面白い時代なのである。

すなわち、政期以降は、それまで以上に俳諧が大衆化し、全国的に俳人のネットワークが構築される時代であつた。俳人同士の文通が盛んになり、それにしたがつて人名録が盛んに刊行され、俳諧一枚摺も多く制作されるようになった。

そうした俳壇の風潮と出雲俳人も無縁ではなかつた。人名録流行の口火を切つた長斎編『萬家人名録』（文化十年刊）には、浦安と有秀も入集している。同書は、俳人の肖像画入り人名録だが、巻頭には千種有政と富小路貞直の二人の堂上公家が載り、以下、道彦や巢兆などの有名宗匠はもちろん、年齢や社会階層もさまざまな俳人が一集に収められている。凡例を読むと、掲載されることを希望する俳人は、自分の肖像画をはじめ、住所や氏名などの原稿を、自分から編者の許に手紙で寄せたことがわかる。とすれば、大社の俳壇の指導的立場にあつた浦安と有秀も、時代の流行に敏感に反応して、自ら入集を申し込んだということなのである。

なお補足しておけば、この時期以降に制作された俳諧一枚摺が、手銭家蔵書には多数所蔵されている。その中には、出雲俳人が制作した俳諧一枚摺であつても、京都の蒼虬や大坂の八千坊などの有名宗匠の句を載せたものがある。これは、もちろん文通で各地の俳人たちと交際していた結果なのである。百羅追善集『あきのせみ』に蒼虬の跋文が載るのも、同じ時代状況の反映である。

おわりに

本稿では触れられなかったが、幕末・明治期になつても、出雲では、曲川をは



じめとする多くの俳人たちが盛んに活動していた。そのことと本稿で検討した諸俳人の活動とを併せて考えれば、出雲はじつに多くの個性的な俳人を輩出したことが理解できよう。つまり、出雲俳壇の地位は、全国的に見ても、「甚だ低くかつた」わけでは、けつしてない。

しかし、もし低調に見えたとすれば、その原因は、彼らの多くが、あくまでも俳諧を「自分たちの楽しみ」としていたことにあるだろう。手銭家の人々はもちろん元禄期の風水も宝暦期の百羅も、自分の俳諧を世間に売り込む必要はなかつたのである。とすれば、本稿第一章で触れた『出雲俳句史』の出雲俳諧に対する厳しい評価は見直されて良いのではないか。むしろ、出雲の俳諧は、もつと評価されて良いものと考えられるのである。

注

- (1) 以下、元禄宝永期以前の俳人の入集状況については、今栄蔵「貞門談林俳人大観」（中央大学出版部、昭和六十四年二月）、雲英末雄・佐藤勝明・伊藤善隆・金子俊之『元禄時代俳人大観 一―三』（八木書店、平成二十三年六月―二十四年三月）を参照した。また、本文中に注記した以外に、句の引用に当たっては、『落穂集』は天理図書館綿屋文庫蔵本を、『風水ちり』は柿衛文庫蔵本を、『すがむしろ』は『近世俳諧資料集成』第二巻（講談社、昭和五十一年六月）を、『七十子』は早稲田大学図書館中村俊定文庫蔵本を、『梅日記』は早稲田大学戸山図書館蔵本を、『蕉門名録集』は松宇文庫蔵本（国文学研究資料館所蔵マイクログラフ）と玉城司氏蔵本を、それぞれ参照させていただいた。
- (2) なお、「正盛」には同名異人が複数存在するため、出雲の「正盛」に絞つて活動の履歴を追うことはむずかしい。
- (3) 『俳諧すがた見』は「岱青楼主」に授けたものだが、「岱青楼」が冠李の別号であることは田中則雄氏からのご教示による。また、『萬日記』中の俳額記事の存在は、佐々木杏里氏のご教示による。
- (4) 「高見本『岡崎日記』元禄式」の出現と去来門人空阿・空阿門人百羅参照。
- (5) 『八戸の俳諧』（平成十五年三月、八戸市博物館）参照。

出雲俳諧関係事項略年譜（享保十六年以降）

※本文中で触れた資料や参考文献によって作成した。なお、手銭記念館は「記念館」、島根県立古代出雲歴史博物館は「博物館」と略記した。

- 享保十六年 (1731) 広瀬百羅、生まれる。
- 元文四年 (1739) 節山、『誹要辨』（記念館蔵）を杜千に、『俳諧すがた見』（記念館蔵）を冠李に、それぞれ与える。
- 元文五年 (1740) 手銭茂助長定（二代）没（五十二歳）。
- 元文六年 (1741) 『竹翁伝書』（記念館蔵）奥。
- 寛保三年 (1743) 沾耳坊編『七十子』に「雲州大社 冠李」一句入集。
- 延享二年 (1745) 沾耳坊編『梅日記』刊。杜千、冠李ら入集。
- 延享四年 (1747) 冠李、『俳諧有也無也関』（記念館蔵）を写す。
- 寛延二年 (1749) 雲裡坊、義仲寺に幻住庵を再建。蕉風復興の先駆。手銭喜右衛門長光（初代）没（八十八歳）。
- 宝暦二年 (1752) 雲裡坊編『蕉門名録集』刊。季硯、冠李ら入集。
- 宝暦八年 (1758) 百羅、洛東岡崎の空阿を訪問。『岡崎日記』成。季硯らの句集『葡萄棚巻之二』（記念館蔵）成。
- 宝暦十年 (1760) 百羅、『蕉門発句十五味』（記念館蔵）を風白に与える。
- 安永二年 (1773) この年以後、季硯句集『松葉日記』（記念館蔵）成。
- 安永五年 (1776) 阿井・大馬木連中編『出雲筵』（記念館蔵、博物館蔵）刊。潜魚庵主（魚坊）序、出雲俳人入集。なお、記念館本には冠李の蔵書印が捺される。
- 安永六年 (1777) 『蕉門誹諧大意ふもこの塵』（記念館蔵）奥。
- 安永七年 (1778) 六月十六日、百万坊旨原没（五十四歳）。
- 安永八年 (1779) 蝶夢、出雲に来る（「雲州紀行」）。
- 天明四年 (1784) 百羅、尾張の松浦文泰より『誹諧狂菊抄』（記念館蔵）を贈られる。
- 寛政三年 (1791) 五月二日、季硯（三代）没（八十歳）。九月二日、星霜庵白頭没。
- 寛政四年 (1792) 『時津風』（雲陽三種神社奉願句集、雲陽松江未曉庵富英撰、旨原序、記念館蔵）刊。冠李をはじめ、出雲・伯耆・但馬・石見の俳人が多く参加する。
- 寛政五年 (1793) 十一月二十四日、魚坊没。
- 寛政六年 (1794) この年以後、百羅著『ざりつ文集』（記念館蔵）成。
- 寛政七年 (1795) 『庵記念』（魚坊三回忌追善集）刊。
- 寛政八年 (1796) 九月二十五日、敬慶（四代）没（六十五歳）。十二月十五日、冠李（季硯弟）没（七十八歳）。
- 寛政九年 (1797) 十一月七日、路考没（六十四歳）。田中千海（梅之舎安海）、生まれる。帰空房松後編『俳諧結制集』（博物館蔵）刊。
- 享和二年 (1802) 花叔、帰郷する。
- 享和三年 (1803) 六月二十四日、雪川没（五十四歳）。七月二十四日、百羅没（七十一歳）。
- 文化二年 (1805) 百羅追善集『あきのせみ』（記念館蔵）刊。有秀序。
- 文化十年 (1813) 『萬家人名録』（記念館蔵）刊。浦安、有秀入集。
- 文化十三年 (1816) 加藤梅年、生まれる。古川凡和、生まれる。馬得、生まれる。
- 文化十四年 (1817) 八月十日、松井しげ没（八十一歳）。山内曲川、生まれる。
- 文政元年 (1818) 四月二十四日、不昧没（六十八歳）。楚白坊没。素琴没。
- 文政三年 (1820) 広瀬茂竹、生まれる。
- 文政三年 (1820) 伽羅庵麻中の『春帖集』（記念館蔵）刊。五月二十七日、有秀（五代、別号衝冠斎・雅硯）没（五十歳）。
- 文政四年 (1821) 『萬家人名録拾遺』刊。花叔入集。有秀追善集『華鬘粟』（記念館蔵）刊。浦安跋。克己庵維中追善集『蓮のうてな』（昨非坊・喜朝編、記念館蔵）刊。
- 文政五年 (1822) 三月二十一日、月潭没（三十二歳）。『金屋子神社奉納俳諧』（博物館蔵）の催しあり。
- 文政七年 (1824) 四月十三日、花叔没（五十一歳）。九月十二日、昨非没。
- 文政九年 (1826) 花叔三回忌追善集『夢路の葉桜』（記念館蔵）刊。
- 天保三年 (1832) 奈良井元朝（龍尾、八雲庵）没（九十歳程度という）。
- 天保五年 (1834) 三月九日、桃花没（六十九歳）。
- 天保七年 (1836) 桜井直敬四十賀集『桜の杖』（博物館蔵）刊。
- 天保十一年 (1840) 『雲立集』（博物館蔵）刊。梅室序、八千閑入序。
- 天保十二年 (1841) 一釣八十賀集『手曳能萬津』（記念館蔵）刊。
- 天保十三年 (1842) 故竹園吾友没。
- 天保十四年 (1843) 六月十四日、有芳（六代）没（五十五歳）。

- 弘化二年 (1845) 日々庵浦安没(八十二歳)。  
 弘化四年 (1847) 山内曲川、故郷を出る。  
 嘉永三年 (1850) 一釣没。  
 安政元年 (1854) 七月二十四日、四山没(六十余歳)。  
 安政四年 (1857) 安秀(八代目)の婚礼に際し、中臣典膳の肝煎で和歌寄書の双幅(記念館蔵)が贈られる。  
 安政五年 (1858) 山内曲川、帰郷。椽実庵一枝編『ひの川集』(記念館蔵)刊。  
 万年元年 (1860) 茂竹、北島家から「北」字を賜り、「北広」と改姓。  
 文久二年 (1862) 八月十四日、手銭さの子(七代有頼室)没(五十歳)。  
 慶応三年 (1867) 三月五日、手銭有頼(七代)没(五十八歳)。五月二十一日、広瀬茂竹没(五十一歳)。  
 慶応四年 (1868) 馬得没。  
 明治十年 (1877) 古川凡和没。  
 明治十五年 (1882) 『俳茶式』(博物館蔵)刊。なお、「申の年」の『俳茶式』(博物館蔵)もある。  
 明治二十年 (1887) 加藤梅年没。田中千海(梅之舎安海)没。  
 明治二十一年 (1888) 二月二十三日、若槻楚青没(八十三歳)。  
 明治二十八年 (1895) 裏辻耕文没(七十二歳)。  
 明治三十六年 (1903) 五月十九日、山内曲川没(八十七歳)。

〔付記〕

本稿をまとめるにあたり、手銭家の皆様には特段のご配慮を、手銭記念館学芸員の佐々木杏里様、島根県立古代出雲歴史博物館学芸員の岡宏三様には懇切な御教示を頂きました。なお、本研究は、平成二十三年度以前から実施されていた手銭家蔵書調査の成果を利用して頂いたものです。

本稿は、島根大学法文学部山陰研究センター山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の公開に関するプロジェクト」(二〇一三〜二〇一五年度、代表・野本瑠美)、国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」(代表・大高洋司)、科学研究費補助金(基盤研究(C))「人を結びつける文化」としての俳諧研究」(研究課題番号 26370259)(代表・伊藤善隆)の研究成果の一部である。

◆プロフィール◆

いとう・よししたか 一九六九(昭和四十四)年四月二十九日、東京生まれ。早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程退学。博士(文学)。早稲田大学文学部助手、国文学研究資料館研究情報部リサーチアシスタント等を経て現職。専門は近世文学、とくに、芭蕉をはじめとする近世俳諧研究と、近世前期の漢文学研究。主著『古典俳文学大系CD・ROM版』(共編集英社、〇〇四年)『カラー版 芭蕉、蕪村、一茶の世界』(共著、美術出版社、二〇〇七年)『芭蕉』(コレクション日本歌人選34)(笠間書院、二〇一一年)『元禄時代俳人大観 第一〜三巻』(共著、八木書店、二〇一〜二〇二年)

## ワークショップ

### 大社・能を知る集い

講師 安田 登 (能楽師 下掛宝生流ワキ方)

梶宅 聡 (能楽師 森田流笛方)

奥津健太郎 (能楽師 和泉流狂言方)

#### ～奈良絵本を読む～

会場 手銭記念館 第二展示室

開催日 十一月六日 午後一時半～四時半

参加者 十二名

手銭記念館では、これまでに五回、「大社・能を知る集い」を開催しており、それぞれ国引き神話、歌枕、道行き、祝言など、出雲とも関係する素材をテキストに用いながら、能や狂言を体験するワークショップを行ってきたが、今年は企画展で展示している奈良絵本『熊野の本地』(手銭家本)をテキストに、能楽の唱法や節回しを当てながら音読した。

初参加の方が多かった為、前半では、能と狂言の歴史や特徴を、登場人物、さまざまな所作や表現、面などで比較しながら解説。また、能楽において囃子が担う役割から、能や狂言の世界観についても分かりやすく説明し、『熊野の本地』の音読は後半で行った。

江戸前期のものと思われる「手銭家本」は、多様な散らし書きで書かれた詞書が特長である。

話の展開が早くドラマチックであること、主に感情表現に関わる部分が散らし書きで表されていて、音読すると「囁んで含める」ような読み方に



自然となること、それが読み手に内容を意識させる上でも効果的であること、能楽の拍子や抑揚にも乗りやすく誦いやすいこと、などが実際に音読することで分かった。

また、全体に言葉が平易であることから、語りのテキストとして編集されたことが推察され、資料の成立などについて今後、調査研究を進めることが必要だと分かった点でも、意義深いワークショップとなった。

参加者からは、能と狂言の成り立ちや特長が分かったこと、プロの発声や所作が印象的であったこと、笛の音に驚いたことなども感想として寄せられた。

#### ～能と狂言を体験しよう～

小学六年生を対象に、能楽師の声や所作、音を身体で感じて貰うことと、能と狂言の歴史、特長、表現などを学びながら体験してもらうことを目的としたワークショップ。

大社は神楽の上演が多く社中もいくつもあるもので、神楽を演じた経験のある子供は多いが、このワークショップから、神楽と能楽の関係、違いや共通点などについて考え、郷土の芸能に対して新たな視点や興味を持つことも期待している。

#### ○大社小学校

開催日 十一月六日 三、四時限

参加者 大社小学校六年生(四十名)

#### ○遥堪小学校

開催日 十一月七日 三、四時限

参加者 遥堪小学校六年生(二十名)

#### プログラム

◎面や感情表現で能と狂言を比較してみる。

◎笑い、怒り、泣き方を実際に行い、能と狂言の違いを体感することと大きな声を出すことを体験する。

◎狂言「盆山」を鑑賞。その中から、ノコギリを使う場面での狂言の擬音や所作をやってみる。

◎囃子の掛け声を真似て、気合いを入れて声を出す。

生徒達からは、全く分からなかった能と狂言の違いがわかって興味が増えた。舞台を見てみたい。面の微妙な作りが表現の点で大きな意味を持っていることが分かった。など、強い印象が残ったことがうかがわれる感想が多く寄せられた。



## 料理再現 〜秋の茶懐石〜

会場 大社コミュニケーションセンター  
開催日 十月二十九日  
調理 午前十時〜 試食 午後一時〜

講師 安藤 登  
参加者 調理 十二名  
試食 三十二名

### 【献立】

飯 鯛飯 割き松茸  
向付 鯛作り、キクラゲ、干生姜（いり酒で）  
汁 モヤシ、とうがらし  
椀 冬瓜葛煮、柚子  
引物 鮑やわらか煮、里芋  
香物 奈良漬

手銭家蔵「大圓菴様御一代御茶事記」と題された茶会記に記された懐石料理を調理、試食するワークショップ。



この茶会記は、「弘化二年筆写」とあり、雲州松平藩七代藩主・治郷（号 不昧）が隠居の後、江戸大崎別邸で文化三年（一八〇六）十二月三日から文化十四年（一八一七）の間に行った茶会のうち五十六回分について、用いられた道具類や出された料理を記録したものである。

今回は、出雲市内で和食店を営む安藤登さんを講師に迎え、調理体験希望の十二名が、出汁のひき方、包丁の使い方、味付けや盛りつけのコツなどについて指導を受けながら調理を行い、手銭家に伝わる江戸時代中期の朱塗り椀、明治初期の輪島塗菓子椀などに盛りつけて、試食希望者とともに試食した。

一回の茶会の料理を全て再現することは食材の調達からも難しいので、いくつかの茶会から料理を選んで秋の茶会の献立として組みあわせたが、当時としては珍しい食材、高価な食材や、日付から考えると本当に出初めの食材が用いられていて、私達が見ると普通の献立のように見えるこれらの料理が、とても贅沢なものだったことが分かる。今とは味付けが違うこと、当時の調味料の普



及などについて講師からの解説もあり、「江戸の贅沢」を考えることのできる体験となった。

また、今回盛りつけた食器の、木地の薄さやしつかりした塗りに驚いた参加者が多かった。江戸から明治にかけての木工・漆工技術の高さも体感して貰えたのではないかな。

このワークショップについては、料理と食器の両方が良かった、続けて欲しい、参加したいという感想が多かった。

手銭家には、この茶会記の他にも御用宿で供した料理の記録や冠婚葬祭での料理記録も多く残っている。今後はこれらの資料も活用していきたい。



## シンポジウム

江戸力

～手銭家蔵書から見る出雲の文芸～

日時

平成二十六年十二月十四日（日）

午後一時～四時半

場所

島根県立古代出雲歴史博物館講義室

プログラム

・基調講演

「手銭家蔵書から見る出雲の文芸」

田中則雄（島根大学法文学部教授）

・パネルディスカッション

司会

田中則雄

パネリスト

芦田耕一（島根大学名誉教授）

久保田啓一（広島大学大学院

文学研究科教授）

伊藤善隆（湘北短期大学

総合ビジネス学科准教授）

佐々木杏里（手銭記念館学芸員）

参加人数 三十八名

特別企画展「江戸力～手銭家蔵書から見る出雲の文芸～」に関連したシンポジウムを開催した。田中則雄教授による基調講演では、これまでの調査と今回の展示及び連続講座を基に、江戸時代の大社における文芸活動の様相と変遷、それらを担ってきた人々、手銭家各代の文芸活動についての総括的な発表がなされた。

後半のパネルディスカッションでは、時代毎の傾向や特徴について具体的な解説を加えながら、資料から見えてきた時代ごとの文芸活動、手銭家の人々と各時代の文芸活動指導者の関係、手銭家蔵書と大社で行われていた文芸活動の文学史上の意義、プロジェクトのこれからの方針などについて話し合った。



## パネルディスカッション

《司 会》 田中 則雄  
《パネリスト》 芦田 耕一  
久保田啓一

伊藤 善隆  
佐々木杏里

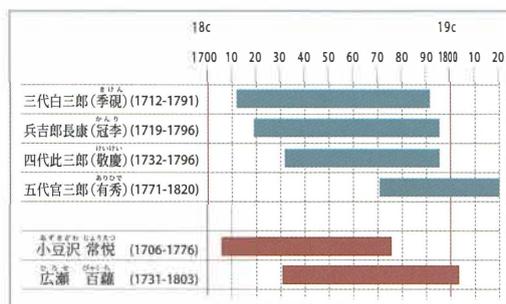
田中：パネルディスカッションをはじめたいと思います。司会は田中が務めます。先生方は、今回のプロジェクトの中心メンバーであります。私の隣から湘北短期大学の伊藤善隆先生、島根大学名誉教授の芦田耕一先生、広島大学の久保田啓一先生、手銭記念館学芸員の佐々木杏里さんです。よろしく願います。

今日は、ここにお示しましたようなトピックについて順にお話していきたいと思えます。手銭家蔵書の特徴、歴代の文芸活動、それから先ほどの基調講演でも取り上げました三代から五代の頃の文芸活動。もう一つ、七代夫妻の子の文芸活動。それに、少し新しいトピックとして、江戸後期の俳諧のこと、そして幕末大社における和歌と俳諧。最後にまとめ、という順序でまいりたいと思えます。

まず手銭家蔵書の特徴についてですが、先ほどお話ししましたとおり、最大のポイントというのは、歴代が文芸活動を実践する、その中で蔵書が集積され、継承されてきたという、この点だと思えます。そして、もう一つ言いますならば、この手銭家蔵書を通じて、出雲地方の文芸的なネットワークと和歌や俳諧を営む人たちーそのネットワークと手銭家の歴代の人々とのつながりという

ものが見て取れる、こういうことになるかと思えます。先ほど来申し上げていることですけれども、手銭家の文芸活動のピークというものは二つあると考えられまして、一つ目は大体年代でいうと一七〇〇年代の半ばから後半にかけて、手銭家の三代から五代の時代。それからもう一つは、一八〇〇年代の半ばから幕末頃にかけて、七代目の頃ということになるかと思えます。

では早速最初のピーク、三代から五代の頃の文芸活動に関してお話を進めていきたいと思えます。先ほど私の話の中でも触れましたが、「和歌と俳諧」という二つの柱があります。和歌のほうは釣月ちゅうげつという江戸の歌人がいて、その釣月から学んだ小豆沢常悦あずさざわじょうえつが松江の歌人。そこから大社に入ってくるという流れがあります。それから俳諧のほうは、これも先ほど取り上げました広瀬



百羅。百羅という人からの流れ。この辺が重要なポイントになってまいります。関係する人物の年表を準備しておきますので参照して下さい。三代の季硯、そして順に冠季、この人は三代季硯の弟でした。それから四代の敬慶、五代の有秀、というふ

うに、こういう年代を生きた人々。そしてその下の方の二人の人物。和歌の小豆沢常悦、それから俳諧の広瀬百羅。こんな感じで生没年が重なっています。

ではその中からまず和歌の系統のほうについてお話を進めていきたいと思えます。この人物の図の赤く記しましたところ、この辺りになってまいります。それではこの手銭家の三代から五代の頃の和歌に関して、大変詳しく調べていただいて、新しいことをたくさん発見してくださいました久保田啓一先生にお話をいただきました。資料の画像も用意しておりますので、こちらのほうも適宜見ながらお話を願います。



久保田：久保田でございます。特にこの辺りのことにつきまして、昨年から調査をさせていただきまして。私はそれまでほとんど手銭家のことは存じ上げませんでしたが、和歌資料としてかなりたくさん集中的に拝見することができました。それによりまして、かなり人間関係、そしてそれに伴う資料の伝存状況という

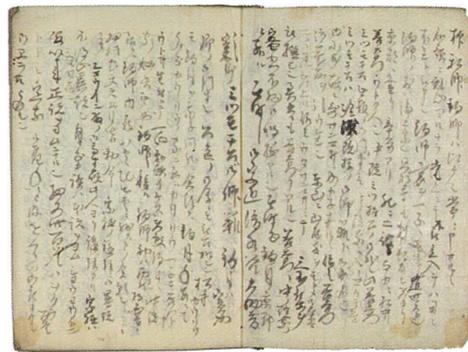
のがわかってまいりましたので、それにつきまして十月十三日に講演をさせていただきます。その講演内容に若干重なる形で説明をしたいと思います。

まずここにスライドを挙げていただいておりますのが、『愛屋免日記』という書物です。これは季硯のノートであります。この左側の写真を見てくださいるとわかるんですけども、これは張り紙が右側の丁にペタッと貼ってあります。こういう形では歌学、歌の学問に関する季硯の書留と言ってもいいわけです。このように紙をペタッと貼ってあるのは、どうやら季硯が受け取った書状などをそのまま貼り付けてある、つまり、何でもかんでも歌に関する情報をこの一冊に書き留め、あるいは貼り付けておくということを季硯さんはやっている。これをつぶさに見ていきますと、季硯がどういう情報を誰から仕入れたかというところが、ものすごくよくわかっています。この『愛屋免日記』というものは、明和九年、一七七二年から記事がはじまります。どうもこの明和九年に、季硯を中心とする



杵築の人々は歌の会を本格的にはじめたようです。それ以来の記録がこの『愛屋免日記』には入っているということになります。

この次に挙げましたのは、『百人一首聞書』という、これもやはり季硯さんが安永二年に「百人一首」の講義を受けまして、そのときのいわば口述筆記の本でございます。

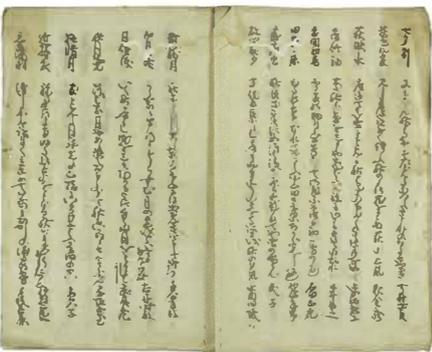


うにびつしりとカタカナで書くところには聞いたままを便宜的にどんどん書いていくのには適していたんだろうと思いますけれども、このような聞き書きを集行的に行った。先ほどの『愛屋免日記』、それからこの『百人一首聞書』に出てきます師匠というのが、今回のお話しでも出てきました小豆沢常悦という人でございます。季硯さんが師匠と呼びますのはこの常悦でございます。ですから常悦が季硯さんの歌の指導者であったことは間違いないわけです。この記事には、当時の出雲の方言まで入っています、そこも珍しいところですね。中院通茂という人がおられます、それを常悦は「ミツモチ」というふうに書いているんです。つまり「ミツモチ」と「ミチモチ」という二つの音がこの時代ではどうやら一緒になっていたらしいということ、方言の専門家から聞くことができました。ですからひよつとするとこれは

方言資料としても大変役に立つものなのかも知れません。この聞書は読みにくいのですけれども、これを精密に読んでいきますと、当時の杵築の歌の学問のレベルがちゃんとわかっていくだろうと思います。

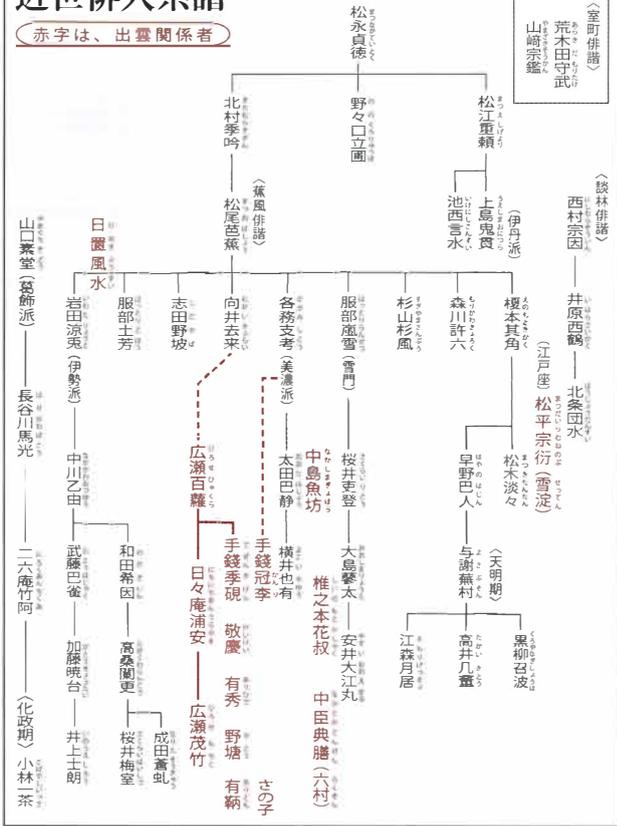
次は『高角社奉納百首和歌』ですけれども、これを主催したのが小豆沢常悦でございます。先ほどの田中先生のお話にもありましたけれども、季硯さん、それから手銭長康ですね、これが冠李さんなので、それから最後に手銭敬慶さん、こういった人たちの歌が入ってくるわけです。ですから、季硯、敬慶、そして冠李という人たちがちゃんと歌の面でもこういった企画の中に入ってくる。それを取りまとめたのが常悦であろうということなんです。常悦という人は、釣月という人がこの出雲に入って来ましてから、その教えを受けております。釣月は、京都の公家たちの中にどつぷり入りまして、その公家たちの活動をつぶさに知っている。だから公家のそういう生活面に直結したレベルでの文芸活動というのを釣月は目の当たりにして、そこで学んだことを出雲に持ってきているわけなんです。ですから一七〇〇年代頃の和歌ということを考えて、

そういう公家の文化をいかに受け止めて、それを伝えるかということ



### 近世俳人系譜

赤字は、出雲関係者



が非常に重要なことになってくるわけです。だから歌道というふうによく言いますが、歌というのは決してこの時代は商売でやるものではない。つまり職業として歌人というものは存在しないわけです。つまり歌というのは道であって、その道を体現しているのは、藤原定家あたりから連綿と続く公家たちで、彼らがまさに自分自身の体でその文化を担っている。その公家たちと接触して直接指導を受けたということが、いかに高い価値を持ったかということなんです。ですから先ほど見ました『愛屋免日記』にしても、それから安永二年の『百人一首聞書』にしても、その釣月を通して、公家たちから得た綿密な情報を非常に細かく書いてあるという、それがまた地方においても価値を持った情報であったということ、これがこの時期の活動としては特徴的である

ということなんです。公家が体現していた和歌文化というものが全国あらゆるところで重んじられ、受け止められていった。その文化のあり方というものは、ちゃんと杵築の地でも共有されていたということ、これがこの手銭家の資料群を拝見して、特に季硯、それから冠李、そして敬慶というこの一族、そしてその上で指導をする小豆沢常悦という人の具体的な活動によって読み取ることができるということ、それが私にとっては非常に大きな成果であったと思っております。

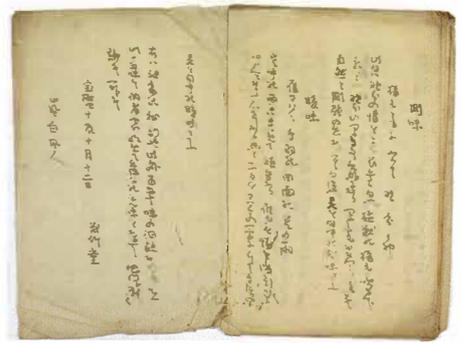
田中：はい。ありがとうございます。では話を先に進めたいと思います。同じ時代、同じ人物たちなのですが、今度は俳諧という側面から見えてまいります。百羅、そこからつながります季硯、そして長康、この人は冠李という号で俳諧を営んでお

ります。それから四代の敬慶は、あまり俳諧の業は見取れないように今のところ思われます。そして五代の有秀、こういったところが中心になってまいります。今日は皆さんのお手元に、俳諧について、関連する全国規模のところから出雲にいたるまでを書いてある近世俳人系譜、これは伊藤先生と佐々木さんの力作ですが、これをお配りしています。こちらも参照

1. 愛屋免日記
2. 百人一首聞書
3. 高角社奉納百首和歌

いただきながら、それではこのトピックに関しては伊藤先生にお話いただきたいと思っております。

伊藤：それでは次に俳諧です。この時期の手銭家に関する大きなトピックとしては、先ほどから名前が出てくる百羅との関係があります。先ほどの田中先生の資料に広瀬百羅の略伝が載っています。百羅が注目される理由は、まずそこに出てくる『岡崎日記』という本です。この資料を最初に発見してご紹介なさったのは、大磯義雄先生です。芭蕉の著名な研究者です。大磯先生は、『岡崎日記』のご研究のために、出雲の俳諧についてもご調査をなさったようです。しかし、はじめは、もうひとつよく判らなかつた。それが、後になって、『出雲俳句史』を出された桑原規草先生のことをお知りになって、質問をなさっています。ところが、質問された桑原先生もご存じでなかつたのが、季硯、冠李という手銭家の人たちの俳諧活動でした。では、なぜ『岡崎日記』が注目されたかというと、この本は、百羅が京都の岡崎に隠棲していた空阿という俳人を訪ねて、俳諧の指導を受けた時の記録だからです。空阿は、芭蕉の弟子の去来の甥です。ただし、大磯先生は、甥ではなくておそらく庶子だったのだらうと推測なさっていますけれども、とにかく空阿の許を訪れて芭蕉直伝とされる俳諧の伝を受けるのです。そして、その伝を出雲に持ち帰って広めた。そういうことが『岡崎日記』の記述からわかります。そして、実際に、手銭家の蔵書には、百羅が出雲に帰ってから、出雲の人に与えた『蕉門発句十五味』という伝書が残っていました。この本の最後のところを見ると、

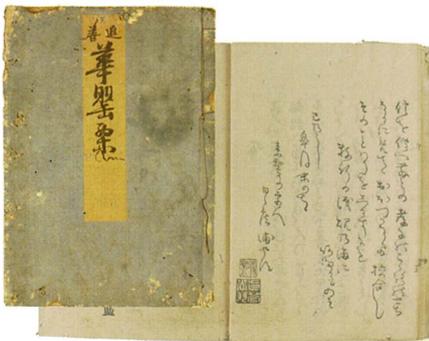


4. 宝暦十年に、茂竹堂というのは百羅の別号ですけども、その茂竹堂が嵐白という人に与えたことがわかります。この嵐白という人はどういう人物かわからないのですが、手銭家に残っている

季硯や冠李たちの句が載っている資料には、一緒に名前が出てきます。連句も一緒にやっているのので、おそらくごく親しい仲間か、あるいは一族の誰かであったかと推測されます。そういう人に、京都から持ち帰ってきた去来の伝を、百羅が授けていたことがわかる資料です。どうしてこのことが重要かと申しますと、百羅が去来の伝を持ち込むまで、大社の俳人たちは、三刀屋の俳人たちと同様、美濃派の俳諧を受け入れていたようなのです。お手元の表で御覧いただけますと、去来の右隣に各務支考<sup>かがみしこう</sup>という名前が載っています。支考も芭蕉の重要な弟子の一人です。その支考の流れを汲む人たちは美濃派といわれる一派を形成していて、その美濃派の俳諧が出雲には入ってきていたらしい。そこに百羅が京都から去来の伝を持ち帰ってくる。三刀屋の俳人たちは、そのまま美濃派だったのですが、大社の俳人たちは去来系の俳諧を受け入れ、その後もその系統を維持していく、そういう流れだったということが、かなり明確に判ってきました。

それでは次の資料です。先ほどご紹介がありました『あきのせみ』という俳書です。これは百羅の追善集ですが、この序文は手銭家の有秀が書いています。巻頭に百羅の肖像画が載りますが、これも有秀が描いたものです。それから跋文ですが、蒼虬<sup>そうりゅう</sup>という俳人が跋文を記しています。この人は、当時、京都で人気があった有名宗匠<sup>そうしやう</sup>です。つまり、有秀は、有名な宗匠に跋文をもらって、きちんと一冊の追善集としての体裁を整えてこの本を出版したということがわかります。

それから、次は『追善華鬘粟』<sup>はなまゆ</sup>という有秀の追善集ですが、これは跋文を浦安<sup>うらやす</sup>が書いています。百羅の子息です。つまり、お互いの当主の追善集を、お互いの当主が編集しているということ



6.



5.

です。両家には姻戚関係もあったのですが、俳諧のほうでも非常に密接につながっていて、大社の俳壇をリードする存在だったということが、こうした資料を検討することで具体的にわかってきました。

それから、百羅の活動とは別に、もう一つ面白いことがわかってきました。これは手銭記念館に残っている短冊ですが、節山<sup>せつざん</sup>という人の短冊です。



7.

この節山の署名の右肩のところに「行脚<sup>あんぎやう</sup>」と書いてある。行脚というのは旅の者ということですね。つまり、この節山は、旅人としてやって来て、大社の俳人たちと接触したということです。その節山の活動を、もう少し具体的に明らかにする資料が、やはり手銭記念館に残されています。『俳諧すがた見』という伝書です。先ほど話題にした百羅が持って帰ってきたものもこういう種類の書物ですが、この節山が持ち込んだのは、百羅のものとは別系統の伝書でした。『俳諧すがた見』には元文四年の年記があつて、不識庵という署名と花押があります。この不識庵が節山です。この伝書の宛名、つまりこの伝書を与えた相手として、岱青楼主<sup>たいせうろうしゆ</sup>という名前が書いてあります。この号は、じつは昨日までわからなかったのですが、先ほどの田中先生のお話にありましたように、冠李の別号であるということが特定できました。つまり、冠李が節山から伝を受けていたということです。

先ほどの百羅の伝書『蕉門発句十五味』には宝暦という年号が書いてありましたが、この元文というものはそれより前の時代です。この節山の履歴



8. はよくわからな  
いのですが、『俳  
諧すがた見』の  
冒頭には、「老師  
半時庵」と書い  
てあります。つ  
まり、節山が「老  
師」と呼んでい  
る人物が半時庵  
です。半時庵と  
は、お手元の表  
で御覧いただく

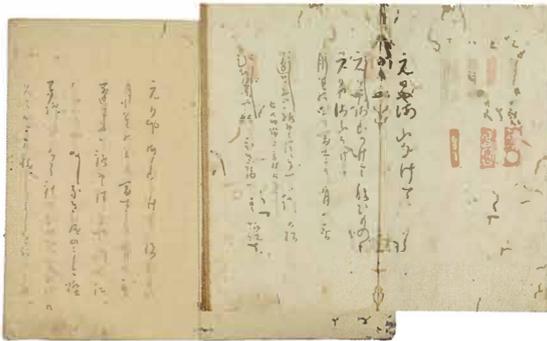
と、榎本其角という芭蕉の弟子がいて、その弟子に松木淡々という名前が載せてあります。その淡々の別号が半時庵です。ですから、節山は、淡々の弟子だということがわかります。淡々は大阪に出てきて一大勢力を築いた人です。その弟子が、大坂から出雲に旅をして、淡々系の俳諧を広めようとしていたということなんです。このことは、従来の出雲俳諧の研究では全く知られていませんでした。

節山が伝書を与えたのは、冠季だけではありま  
せん。『誹要辨』という伝書が、やはり手銭家の  
蔵書にありました。これも節山の伝書で、杜干と  
いう俳人に与えたものです。この杜干も正体不明  
なのですが、先ほどの嵐白と同様、手銭家に近し  
い人物か、あるいは一族の誰かであったかと推測  
されます。そういう人たちに、節山がこうした伝  
書を授けていたということは、節山が出雲・大社  
の地に淡々の系統の俳諧を根付かせようとしてい  
たということです。もちろん、彼らが自分の弟子

になつてくれれば、それは自分の収入源になるわ  
けですから、一生懸命だっただと思います。しかし、  
節山が淡々系の俳諧を伝えた後、百羅が去来系の  
俳諧を出雲に持ち帰りました。大社の俳人たちが、  
その去来系の俳諧を受け入れたことは、さきほど  
お話ししたとおりです。その結果、淡々系の俳諧  
が、一時的にせよ、出雲に入ってきたということ  
は、言ってみれば、きれいに歴史上から抹殺され  
てしまっていたのです。

この時期の俳諧資料をいくつか見てみましょ  
う。まず、『松葉日記』という句集があります。  
署名はありませんが、内容から季硯の句集だとい  
うことがわかる資料です。この『松葉日記』と  
同じ句を記した句集がもう一冊ありました。ここ  
らには書名もなく、痛みも激しいのですが、句  
に判子が捺して

あります。この  
判子は、句の出  
来不出来を、宗  
匠が点数で評価  
して捺すもので  
す。古い時代は、  
良い句があつた  
ら右肩に長い斜  
め棒のようなも  
のを一つ付ける。  
もっと良い句だ  
と。もう一つちょ  
んと付ける。つ  
まり点がない句



- 4. 蕉門舜句十五味
- 5. あきのせみ
- 6. 華壺粟
- 7. 節山の短冊
- 8. 俳諧すがた見
- 9. (右)点取帖・(左)松葉日記

と、一本引いてあるのと、二本引いてあるの、と  
いう三段階だつたんですが、この時代になるとさ  
らに細かく段階ができています。それを単純に棒  
の数や直接数字を書き込むのではなくて、ちよつ  
と遊んで、いろんなデザインの評子を自分たちで  
工夫をして、それを押すことで何点と示すという  
ようになります。これを点印といいます。表紙の  
見返しに、全部の点印を捺して、それぞれの印が  
何点のものかわかるように、三点だ、六点だ、八  
点だ、十点だ、と墨で書き込んでいます。です  
からこの判子を追っていくと、どういう句が評価さ  
れて、どういう句が評価されないというのが、あ  
る程度わかります。それから句の脇に小さい字で  
書き込んであるのは、この点を付けた宗匠が自分  
の意見を書いたり、添削したりしたものです。残  
念ながら、この点を付けた宗匠が誰であったかは  
目下不明なのですが、こういう資料が残っている  
というのは非常に貴重なことです。

それから、さきほどから何度もお話に出てき  
た、百羅が去来系の系統の伝書を持ち込んだとい  
うことですが、これが大社の俳人にとって非常に大  
きなアイデンティティになっていったことがわか  
る資料を御覧頂きます。これは、百羅の孫が賛を  
書いた芭蕉像です。江戸時代の後期になると芭  
蕉が崇拜されるようになって、こういう芭蕉の  
画像がたくさん制作されるようになります。ま  
あ大体こんなふうにならば芭蕉の絵を描いたら、そ  
の上に芭蕉の句を賛として書きます。それで、そ  
の芭蕉の句を揮毫した宗匠は自分の署名を入れる  
のですけれども、この芭蕉像には「百羅庵茂竹拜



10.

た。何が書いてあるかまではどうにかわかっても、その時代にどういう意味を持っていたかということが全然わからなかったんですが、先生方のご参加によって、その時代の出雲の人たちがどういう意識を持って文芸活動をやっていったのか、何を大切にしていたのか、何を求めていたのかということが、段々わかってきた。資料が残っていることの大切さというのをすごく感じました。

田中…大量の資料が残っているわけですが、まあ何とか文字を解読するまではやったとしても、その後に何が見えてくるかというところに一つのハードルがあるわけですね。それで、人名が出てきますが、その人名がどういう関係でつながるのかという辺り。その辺を先生方と一緒に解きほぐしていくと、この時代の、この歴代の手銭家の人々がどういうところとつながって、あるいはもしかすると何を求めながら文芸活動をしていたのか。そんなことがじわりじわりと明らかになってくる。そういうことでよろしいですね。

佐々木…そうですね。冠李という名前があっても、冠李が誰なのか十年近くわからなかったことがフツとわかる。そういうことがこれからも多分、こうやって皆さんにお話することから資料が増えたり情報が増えることで、多くなるのではないかと期待しています。

田中…それでは次のトピックに移りたいと思います。では再び久保田先生にお願いします。『点取和歌詠草』と称される少し珍しい資料が出てまいりました。この資料の意味についてお話をいただけるでしょうか。

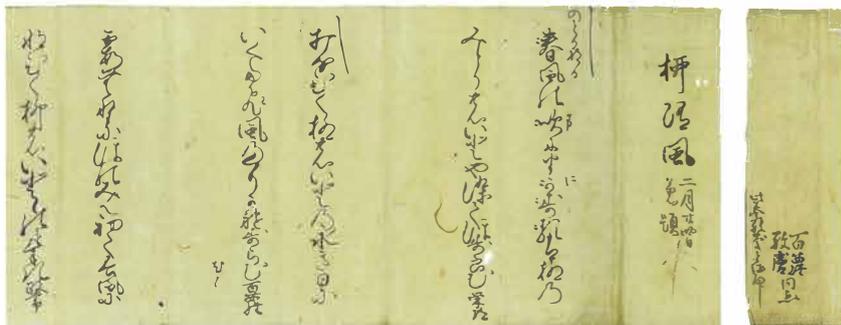
久保田…はい。この三代から五代にかけての和歌、そして百羅は俳諧のほうでも大活躍の存在ですが、その時代の文芸をいわばまとめるような形で、ちよつとこういう資料を提示させていただきました。最初に、「百羅、敬慶、同点、此巻敬慶とるべし」と書いてあります。これは百羅と敬慶は同点であつて、この巻は敬慶が手元に留めるのがよいということでもあります。まずこういう文言が、この詠草の端裏ですね、文書の裏側に書き込んであります。

これはどういう資料かといいますと、右に「柳随風」という題が指定されており、兼題として「二月廿四日の歌会で、前もつて「柳随風」という題を指定してあるということですね。この日はこの題で歌会をやりますよ」ということが、あらかじめみんなに通知さ

書」と書いてあります。よく見ると、その右肩に「落柿舎五世」と書いてある。「落柿舎」というのは去来の別号です。つまり、去来から数えて、空阿が二世、それから出雲に移って百羅が三世、百羅の息子の浦安が四世、そして自分で五世だ、という自己認識、自己主張です。このように、後々まで、この落柿舎の系統というものを非常に大事に意識して俳諧活動をやっていたということがよくわかる資料です。その辺りが今回の調査でわかってきたことです。つまり、出雲の俳諧の栄枯盛衰というか、移り変わり、それから去来の系統を意識するという独自性、そういう側面についての発見があつたということになります。

田中…伊藤先生、ありがとうございます。佐々木さんは、手銭家の資料を隅から隅までご存じで、伊藤先生と特に俳諧の資料の調査をずっと続けて来られましたが、資料をご覧になるなかで何か気付かれたことかありましたら、コメントいただけるでしょうか。

佐々木…これまで何年も、資料の意味が全然わからずにいたのが、伊藤先生、久保田先生が参加してくださつたことでわかってき



11.

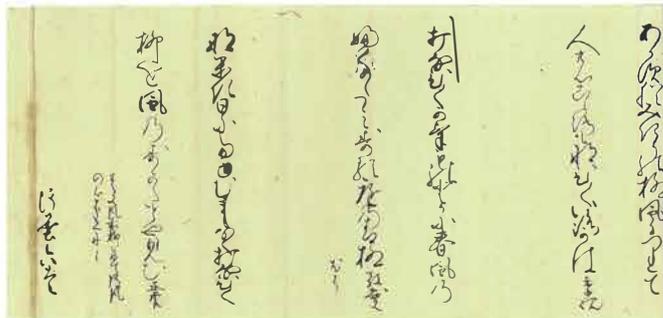


れていたという事です。私の講演のときにもちょっと紹介しましたけども、明和九年からはじまった杵築の歌会は、この毎月二十四日というのも歌会の日としてちゃんと決まっていますね。ですからその杵築の歌会のどれかで行われたものであるということが明らかです。一首目は栄道えいどうという人の歌、歌の下に「栄道」と書いてありますが、この栄道という人は杵築のお寺のお坊さんですけども、この人の歌は、もとは「春風の吹にまかす青柳のみどりのいとや染てほすらむ」となっていた。これを先生が添削しているわけですね、「のどかなる風のまにまに青柳のみどりのいとや染てほすらむ」のように。「吹にまかす」というのがどうも良くないということで、「のどかなる風のまにまに」というふうに変更してあるわけですね。そして右側に線が引いてあります。これが合点がてん。つまり先ほど伊藤先生のお話にもありました俳諧と同じで、やはり良い評価をする場合にはこういう合点を付すわけです。この合点をたくさん取った人が、いわばその歌会での勝者であるということなんです。

次に百羅の歌があります。「打なびく柳のいと永き日にいくたび風のくりかへすらむ」、やはり合点が付きます。もう一つ注意していただきたいのは、その歌の左側にちよつと下のほうですが、「尤候」と書いてあるんです。ここですね。読み方としては「もつともにもにそうろう」だと思いが、これは「うん、いいですよ」という感じなんです。これは褒め言葉なんです。つまりこれは合点を付け、さらに師匠が「これはいいよ」という褒め言葉を付けてある。こういう形でみんな「柳随風」の題で二首ずつ詠んで、十四首の歌が並ぶわけです。

では次をお願いします。季硯せいゐんさんがおりますね。それからその横に敬慶けいけいさんがおります。こういう杵築のメンバーでやっているわけですが、例えば敬慶さんのところには、「ゆるく吹風のすがたもあらはれてなびく柳のいとゞのどけき」の歌があつて、それに合点があり、「おもしろく候」、これも褒めてあるわけですね。このように十四首が並びます。合点が付いてない歌はだめなんです。これは評価の対象にならない。合点がなくてこまごまと書いてあるのは、これは批語ひごといって批判の言葉です。これは「こういうところが駄目なんだ」と説明してあるわけなんです。ですからこれはどんなに書いてあつても全然評価にならない。そしてこのように十四首の歌に評価がありまして、最後に「汚墨おぼく六首」と書いてあります。つまり合点を付けた歌が六首ある。それを師匠はへりくだって「汚墨」というんです。墨で汚したのが六首あります。これで実際に調べてみますと、百羅が合点を得たものが二首、そして敬

慶けいがもらったものが二首で、やはり同点なんです。あと栄道と政懿せいゐが一首ずつで六首です。しかも先ほどの「尤候」とか「おもしろく候」のような褒め言葉をもらったのも、百羅が二首、敬慶が二首だった。合点をもらい、なおかつ褒め言葉をもらうと、もつと評価が上がるわけです。その合点と褒め言葉をもらった数の合計が一番多い人が高い評価を受ける。この時代のこういう歌会の詠草じやうそうというのは、まさに公家が周りの門人たちの指導として行う点取和歌の形式そのものであります。そしてこの時代の特徴なんですけども、本来こういう和歌の評価というのは、こういうふうには手書きでちゃんと書き込み、そして合点も付して、そして一番高い評価を受けた人がその詠草をもらうということで完結していた。だから「此巻敬慶とるべし」というのは、同点ですから、まあ前回は百羅がもらったので、今回は敬慶が受け取っておきなさいという感じのことだったんでしょう。もし一点でもどちらかが上であれば、そ

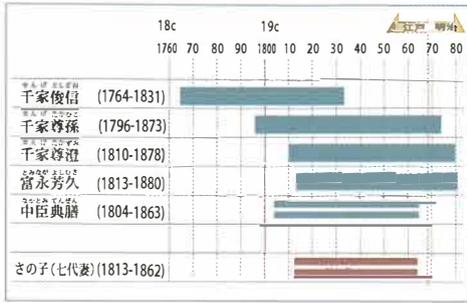


の人の手元にこの詠草は残ったはずなんです。この場合は敬慶がこの詠草をもらうことになったので、手銭家にこの現物が残っている。今こういうことをお話しましたのは、これが十八世紀半ば頃の伝統的な点取和歌の形式であるということですから。これが幕末にどのように変わるかということの後でまたお話しますので、いわばその前提としてこれをしっかりと把握していただきたいと思っております、こういうご紹介をいたしました。以上です。

田中：どうもありがとうございます。本当にこういう資料をばつと見ただけでは何が行われているのか見当が付かないのですが、久保田先生にまるでその座がここに蘇ってくるかのように、説き起こしていただきました。

それでは、手銭家の文芸活動第二のピーク、七代の妻さの子の文芸活動について少し踏み込んだお話をしてみたいと思います。年代は随分下りまして江戸時代の末期の頃であります。周囲には大社の名だたる文人たちがいたわけですが、先ほどの基調講演のところで、私が芦田先生の著書・講演を引用しながら一旦まとめをさせていただきましたが、出

雲大社の千家家、千家俊信からはじまりまして、千家尊孫、千家尊澄、



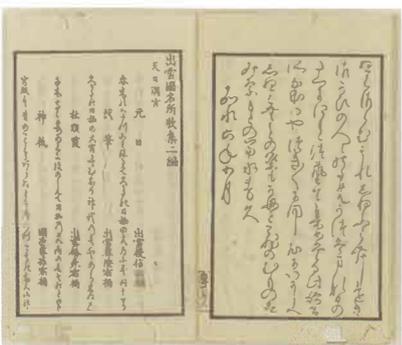
それから富永芳久、それと後でもまた名前が出てまいりますけども、中臣典膳。こういった名だたる人々が大社の地で文芸に携わっていたという時代です。それでその特に和歌のことが重要になってまいります。この時期の出雲の歌壇について長く研究をしてこられた芦田耕一先生にその辺りをお話いただきたいと思っております。今日はプリントをご用意いただいておりますので、ご参照いただきながらお聞きいただけたらと思っております。芦田先生、よろしくお願いたします。

芦田：ご紹介いただきました芦田です。お手元に資料を一枚用意しております。これは十一月十五日、ここでやりましたものが主になっているんですけども、その辺りのことも含めて説明を申し上げたいと思っております。

まず出雲の和歌というのは、私はこの三つの柱というものが大事だろうと思うんですね。出雲という場合、ここでは大社ということに限定しているのではなく、出雲地方の和歌というように広く理解していただきたいのですけれども、和歌発祥の地であるということ。『出雲国風土記』が存在すること。それから杵築大社。この三つが後々までずっと関わってきます。出雲の和歌を説明するときには、この三つの柱が非常に重要だということ。ざっと江戸時代後期の特に大社歌壇をみますと、まず何といいますが、千家家、北島家の両国造家の人たち、それから社家。社家といいますが、この辺りでは例えば赤塚、佐草、島田中、富永、中という辺りが中心になっておられる社家ですね。それからあとは中臣典膳、手銭さの子、千家富美子。富美子というのは千家尊澄さんの奥さんですけれども。ここらが中心になる

のかなと思っております。私が注意したいのは、そのときに多くの歌集と歌学書が作られたということです。以下そのところは用意したプリントに書いておりますのでご覧ください。歌集としてこういうようなものがあると。これはもう先ほどの田中先生の説明でもありましたように、千家尊孫さん、富永芳久さん、千家尊澄さん、この辺りが中心になって編纂したということです。

それから富永芳久さんに関しては、これが『出雲国名所歌集』の二編なんですけれども、このところに富永芳久という名前が見えます。この人が序文を書いているんです。さて、『出雲国風土記』は、多くの風土記が作られたといわれていますけれども、完全な形で存在しているのは出雲国だけなんです。後は、断片的なものが豊前だとか常陸だとかに残っているんですけども。ですから『出雲国風土記』が現存するというのは大事なことなんです。富永さんは、先ほどの話にもありましたさの子さん宛の手紙に、風土記というのをみんながあまり知らないのは嘆かわしいと言っています。ということは風土記が自分の発想の根本にある。だから『出雲国風土記』に出てくる地名、風土記にはたくさんあるんですけども、地名といたのが大事なんですね。この地名は、こういうことでもつてついたんだという、一種の地名起源譚というん



## 資料

- 1 出雲の和歌→和歌発祥の地 出雲国風土記が現存 杵築大社
- 2 江戸時代後期の大社歌壇  
千家家・北島家の両国造家 社家 中臣典膳・手銭さの子・千家富子  
多くの歌集と歌学書が作られた  
歌集→類題八雲集・類題真璞集（千家尊孫）  
出雲国名所歌集・丙辰出雲国三十六歌仙・丁巳出雲国五十歌撰・戊午出雲国五十歌撰（富永芳久）  
歌学書→比那能歌語（尊孫） 歌神考（千家尊澄）
- 3 富永芳久（1813～80）など  
出雲国風土記のことを世の人が知らないと嘆く→出雲風土記仮字書・出雲国名所集・出雲国名所歌集を執筆・編纂の動機  
多くの歌集を編纂し、出雲国名所歌集など大阪の本屋から出版  
歌人結社・亀山社中のリーダー
- 4 和歌発祥の地  
八雲つつ出雲八重垣妻ごめに八重垣作るその八重垣を（古今和歌集・仮名序）  
狭い地域に亀山社中と鶴山社中（尊孫がリーダー）が存在  
両社中が一緒に歌会（「歌まとゐ」）を催行する  
「鶴山社中蔵版」として出版（私家版・地方版）→類題八雲集・類題真璞集・比那能歌語
- 5 大社歌壇と手銭さの子  
七代有頼（1810～67）の妻さの（狭野）子（1813～62）  
芳久と親交がある→さの子が源氏物語の注釈の湖月抄を読むのを褒め、源氏物語は歌作のために参考になるからと奨励する（湖月抄は手銭家に現存）  
芳久から僧契沖の本を借りる（芳久はかなりの蔵書家）  
丁巳出雲国五十歌撰の跋文を書くように要請される  
尊澄と親交がある→尊澄から多くの歌題で詠むように要請され、それに見事に応えたことで、尊澄が感激する  
マドンナ的な存在

でしようかね、そういうことがあるわけですよ。ですから風土記に出てくる地名を何らかの形で継承したいということ。皆に知ってもらいたいという感じでもって、このように『出雲国名所歌集』を作る。最初は出雲大社ですね。天日隅宮と書いてある、出雲大社です。そこに千家俊信さん、尊澄さん、北島脩孝さんですね、それから尊孫さん、こういう形で出てまいります。こういうふうなものなんです。これが富永さんの大きな業績で、ほかに『出雲風土記仮字書』とか、『出雲国名所集』などがあります。しかもこの本は、そこに書いておりますように大阪の本屋から出版している

んです。ということは、それだけ需要が多かったんだろうと考えられます。そして富永さんは度々和歌山に留学しているんです。今でいう内地留学でしようか。なぜ和歌山かといいますと、本居宣長の子どもが和歌山に移住いたしましたして、和歌山が起こした学問、古学の中心になっていまして、ですから大阪ではなくて、和歌山のほうに行くということですよ。富永さん北島家の人ですけれども、そこに行っているということも関係したんでしょうか、大阪の本屋からたくさん出版しております。

それから次、和歌発祥の地であるということ、これも大事なんです。私は長く松江に三十三年間住んでいたんですが、講演があるごとに「出雲は和歌発祥の地ですよ」ということを申し上げてまいりました。なぜかという、紀貫之が『古今集』の仮名序に書いているわけです。「八雲立つ 出雲八重垣 妻ごめに 八重垣つくる その八重垣を」というわけです。わかったようで、わからない歌なんですけれども、良い歌だなあと思っております。ここには八雲や八重垣が出てきます。こ

## 13 出雲国名所歌集二編

れが和歌、歌のはじめだとちゃんとあの紀貫之が書いているんです。これはお墨付きを与えたんですよ。こういうことを皆さんが知らない。もちろん発祥の地としてはぜんぜんありません。ぜんざいもいいですけども、甘いものだけではなくて、こういうほうも記憶に留めてください。どうも食べるほうを優先します。私もですけども。それから和歌発祥の地であるが故に、狭い地域に、つまりこの大社の地域に鶴山社中と亀山社中が存在したということです。鶴山社中は、出雲大社の後ろの山にちなむ命名ですけども、千家尊孫がリーダーであり、それから亀山社中、これは富永芳久がリーダーでしょう。たぶん主宰していたのは北島全孝さんとか、その辺りであろうと思うんですけども、そのリーダーとして富永さんががんばったんだろうということです。先ほど田中先生が言われなかったところを言いますと、「鶴山社中蔵版」という本が数多く見えます。つまりこれはどうということかという、鶴山社中が版權を持っているということですよ。社中というのは結社です。鶴山社中、亀山社中というのは歌人結社だと考えてください。踊りなんかの社中もありますし、いろいろあるわけですけども、歌人たちの社中として鶴山社中、亀山社中があり、特に鶴山社中の場合には本を作っているということです。これはつまり私家版です。当時の本屋さんの中心は三都、三都といいますが、江戸・京都・大阪。そしてもう一つ、三都以外に名古屋。この四地域が本を作る所の中心になるんですね。それ以外の所から出したのは一応地方版という言い方をしています。またこれらは本屋さんから出していませ

ので、私家版ということになります。『類題八雲集』、『類題真璞集』、『比那能歌語』、こういうようなものが「鶴山中蔵版」として出されている、こういうことなんですね。

これでざっと説明してまいりましたが、ではさの子さんと大社歌壇との関わりはどうかということですが、田中先生の説明がありましたね。これは『出雲国名所歌集二編』ですが、「白澤園さの子」というように署名がなされている。それからもう一つが『類題青藍集』というんですね。

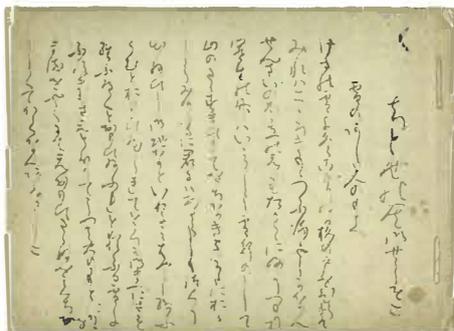


これがそうです。「手銭さの子」と書いてあります。今の子どもは本に名前を書くということはあまりしませんが、昔は几帳面に書いていますね。これは手銭家の蔵書の中でもごく一部なんです。多分特にこれらはさの子さんが自分で手に入れた本ですね、時代的にも合いますから。さの子さんにはそういう点で手銭家ですでに所持していた蔵書なども含めて、和歌を作るとききの大事なテキストになったらうと思います。

それからこれですね。さの子さんと富永さんとは田中先生が説明されたように、絶えず手紙のやり取りをしているんです。手銭さんの家は今の手銭さんの家だし、富永芳久さんの家は多分今の富

永さんの家の近くだと思えます。ほんの目と鼻の先ですね。何

でそんな近い所で手紙のやり取りをするのかなと思うんですけれども。電話でもメールでもやったらいいのに、ともかく手紙です。特に富永さんとは非常に多いですね。先ほども紹介がありましたように、さの子さん



が源氏物語注釈の『湖月抄』を読んでいるのを富永さんが褒めまして、「源氏物語は歌を作るための参考になるから、がんばって読みなさい」というように言っています。この『湖月抄』はいま手銭家に所蔵されています。確か八代の安秀さんの署名が入っていました。これはちよつと手垢が付いていましたので、さの子さんの手垢かもしれません。それからこれも先ほどの話にありましたように、さの子さんは富永さんから僧契沖の『和字正濫鈔』という本を借りているんです。富永さんはかなりの蔵書家なんです。それから先ほどの説明にもありましたように、富永さんから『丁巳出雲国五十歌撰』の跋文を書くようにいわれました。ところがこの『丁巳出雲国五十歌撰』というのは残念ながら手銭家にはないんです。自分が、さの子さんが跋文を書いたんですよ。その本がないんです。手銭家の蔵書の中には一部だけではなく、二部、三部ある本もあります。今でいうケーヌなんです、ちゃんと紙袋に入った立派な

15.

本がそのままの形で残っているのですけれども、これだけが見当たりません。佐々木さんに随分探していただいたんですが、まったく見当りません、なぜなのでしょう。これは私の推測ですが、跋文を書いて恥ずかしかったから、もしかして隠したんじゃないのかなと。その是非の判断はお任せしますけれども。先ほどの手紙のやり取りを見ると、自分は書く能力がないからと辞退している。そういう謙虚なところがありますから、本をいただいたんだけれども、隠しちゃったのかなと思います。それから千家尊澄さんとも親交がございまして、その尊澄さんから多くの歌題で歌を詠むように要請されました。その多くの歌題というのは具体的にどういう題で何首詠んだとは書いてないんですけれども、それを見事に上手に詠みまして、尊澄さんが非常に褒めています。

東京の国文学研究資料館などで江戸時代後期の歌集を見ておきますと、当時の歌集はどこで作られているかというと、多いのは先ほど申し上げました和歌山、そして名古屋です。それから大分の杵築もあります。それらの歌集には必ずさの子さんの名前が見えておられます。そういうことですから、私は全国の歌人かなという感じを持っておられます。富永さんとさの子さんは同い年なんです。一八一三年の生まれ。私は、このことに今朝はじめて気が付いたんです。ただ、さの子さんは五十歳で急死されたということのようです。ですからもう少しさの子さんが長生きしていたら、もつともっとすばらしい業績を残されたんだろうと思うと残念です。最後にマドンナの存在と書きましたが、これは一行余りだったので、書いたんですけれども（笑）、多分そうだろうなああと。以上です。

田中…ありがとうございます。今大切なことをたくさん芦田先生にお話いただきましたが、出雲でどうして和歌なのかというところ、そこが根本の問題だと思います。和歌発祥の地ということを経貫之がはつきり述べているということですね。そのことは出雲の江戸時代の歌人たちにもおそらく何らかの影響を与えただろうと推測できるのです。それで少しこのことを話題にしたいと思います。出雲国は和歌発祥の地であるというそういう捉え方ですね。これは、また少し時代を遡ってしまふのですが、先ほど来出てきます常悦。その常悦に歌を教えた、これは江戸の人ですが釣月という人がいて、この人が出雲国に入ってくるときに、「おもへらく出雲国は、八雲神詠の地たるに、歌道行れざる事念なく覚へて、宝永の頃……」、一七〇〇年代のはじめ頃ですが、「当国、出雲国に下向し、道を弘め」云々というふうになっているわけですね。もちろんこのこと、釣月の出雲下向についてこう記されているということに関して、芦田先生の著書の中で紹介されています。それから千家尊澄の『歌神考』の中で、歌の神についての記述があるのですが、そこにも出雲国が和歌発祥の地であるということに、若干関係があると思われる記述がありますが、この辺りも芦田先生、解説していただけますか。

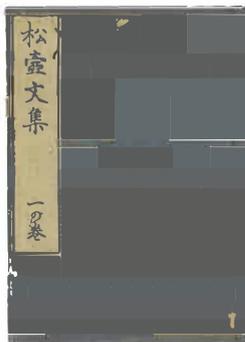
芦田…釣月は江戸の生まれです。京都でいろいろ歌の修行などもしまして、出雲にやって来たんですが、和歌発祥の地であるにもかかわらず、歌が盛んではない、そういうような思いがあつて来たわけですね。本拠地はとも松江のようです。お墓も松江にあるといわれています。大社では



庵みたいなものを結んでいたというようなこともわかつています。ここから島根の益田にある人麻呂神社まで、和歌を奉納するためにわざわざ出かけて行っている。そういう意味で釣月は、やっぱり和歌発祥の地であるにもかかわらず必ずしも盛んではないという残念な思いがあつたんだろうと考えています。

それから千家尊澄さんの『歌神考』ですけれども、元々和歌三神というのは、住吉・玉津島・栴本人麿とされています。人麻呂神社というのは、兵庫の明石と益田にございます。玉津島神社というのは和歌山、和歌の浦あたりなんです。住吉神社というのは大阪市の住吉区です。尊澄さんは、そうではなく、出雲大社のスサノヲノミコト、オクニヌシノミコト、この二神が和歌の神様だとし、このことを長々と説明しているのが『歌神考』という本です。ちなみにちょっと私には聞き捨てならないところがありまして、住吉というのは今私が住んでいる所なんです。長い間松江にいて、大阪に戻って空き家にしていた家に住んでいるんですけども、住吉大社というのは私の散歩のコースです。尊澄さんはこんなことをいっていますが、まあいいとしましょう。いずれにしても出雲は和歌発祥の地だということですね。

田中…ということは、住吉さんには申し訳ないけれども、出雲のほうこそが元々和歌の土地であるという、そういう一種の自負のようなものを抱きながら和歌の制作にも励んだということを想像してよろしいということになりますね。それからもう一つ芦田先生にうかがいたいのですが、私も基調講演のほうで取り上げさせていただきましたが、田居まといという言葉。これが大社の歌壇を考へる上で非常に大切だということは、芦田先生がおっしゃっています。千家尊澄の『松壺文集』まつうぶぶんしゅうというこれも手銭家にある資料なのですが、その中に和文が書き記されています。江戸時代の言葉ではなくて、古典的な和文です。その中に、先ほど講演の中では割愛しましたが、もう一つこういうお話があります。「みやびこのめるながしがもとにて、秋のなごりをしむ歌よまんとて、かれこれあひしれる人々ものしけり。……たゞに歌のみにて秋のわかれを、しまんはかひあらじとて、何がしは竹取物語、くれがしは大和ものがたりをときてよと、おのがじしくさぐさの物語ふみをとうでても、あはれをいひしらひけるは、みやびかなるまとのみなりきかし。」



16.

こういう文章があります。綺麗な和文だと思えますが、ここからどういことが読み解けるのか、

14 出雲国名所歌集二編・類題青藍集さの子署名

15 ちとせの舎御せうそ

16 松壺文集

芦田先生、解説していただけるでしょうか。

芦田…はい。先ほど申し上げましたけれども、当時は鶴山社中と亀山社中があつて、その人たちが一緒に歌会をしているんです。歌会とは書かれていないんですが、その歌会がどのように表現されているかというところ、「歌のまとぬ」「まとぬ」とはいわゆる車座です。「円居」と書くんです。つまり丸くなることです。「歌のまとぬ」といいますと歌会と考えていただいてもいいです。ですから鶴山社中と亀山社中の人が一緒になつて歌会をしている。これがこの『松壺文集』の中に度々見えます。これは決してフイクションではない、本当だと思えます。そしてこのように歌だけではなくて、歌会をやったけれども興味が尽きないから、あなたは『竹取物語』の話をしなさい、あなたは『大和物語』の話をしなさいという感じでもつて、お互いに切磋琢磨する。本当に優雅なものです。考えますと確かにそうですね。この前来たときにある人に言われたんですけれども、この頃の日本といったら一八六〇年頃、日本はそろそろ幕末の動乱の時期ですよ。そういう時期に大社でこういう雅やかな事が行われていた。私は非常にそういうところが好きですね。

田中…ありがとうございます。要するに実は社会的には動乱がもうひしひしと押し寄せて来たいたかもしれないけれど、その中でいわば一種の王朝文化、それを、書物を通じてながら体験していくと。そういう営みがグループで大社の地で行われていたということになるかと思えます。

それで久保田先生、突然で申し訳ないのですが、指導者の下に集って和歌を詠む、あるいは習う。

それから活動をグループで行うということ。こういうことは特に和歌の場合は大変重要だと思うのですが、その辺のところちょっとコメントをいただけないでしょうか。

久保田…はい。和歌というのは決して一人で頭を抱えて詠むものではなくて、常にグループで同じ題で歌を詠み合い、それを師匠から評価してもらう。だから今の歌の結社にちゃんとその歌本来の享受のされ方が残っていることだろうと思えますね。ですからやはり歌は、先生から教えてもらわないとまともなものにならない。そしてまたみんな切磋琢磨して、いわば競争のような形で詠み合わないこと上達しないというのが、歌の世界の伝統的なあり方だということだと思います。

田中…そうすると、前半の部で取り上げた三代から五代のところにも当然当てはまることになってくるわけですが、そういう和歌の営みの大原則みたいなもの。それを踏まえて大社の地でも脈々と活動が続けられてきた。こういうことになるのでしょうか。

久保田…そのとおりだと思います。

田中…ありがとうございます。そういうことで七代の妻の子の文芸活動というキーワードで考えてみたのですが、さの子さんの生きた時代というのは、周辺に非常にハイレベルな文人たちがいて、そこで王朝文化を体験するような、そういうグループでの文芸活動というものが行われていた。そういうことが手銭家の蔵書があるおかげでうかがい知れるということになるかと思えます。

す。それでは話を先に進めますが、今度は俳諧に関することです。江戸後期に出雲の俳諧はどうだったのだろうか。その辺りのお話を伊藤先生にお願いしたいと思います。

伊藤…江戸後期の俳諧ということですが、和歌は伝統的で雅、いわばハイレベルな世界ということですが、俳諧の方は、大衆化が進んで、周囲とつながりたいという欲求が強が出てくるのが、この時代です。この江戸時代の後期、文化・文政期ですが、十一代將軍の徳川家斉が大御所になって、割合に自由だったために文化が発達した時代です。その時代のもので、手銭家に残っている俳諧資料ですと、たとえばこういうものがあります。これは本の袋ですが、この右側のほうの余白はその厚みの部分で、かなり分量があつたことがわかります。全部で五冊でワンセットの本です。『萬家人名録』という本ですが、大坂の宗匠が企画して出版したものです。左上のところに付箋みたいなものが貼ってありますね。虫が食ってしまったって読みにくいのですが、どうやら「有秀様」と読める。では、中身はどういうものかというところ、主にはこうした俳人の肖像画とそこの人の句が書いてあります。これで五冊、たくさんの方が収録されています。この中に手銭家の有秀さんが出てきて、左上のところですね。白出雲、大社之人。通称手銭官三郎とあります。白



澤園と号した、ところとうふうに書いてあります。一方、こちらは広瀬浦安。先ほど手銭家と広瀬家が非常に密接に関わり合いながら大社の俳壇をリードしていったというお話をいたしました。やはり同じ本に浦安さんも出ているということです。



18.

では、こうした書物がどうして刊行されたかということですね。何かこういうのを見ると、絵を載せて、昔の歌仙絵などが連想されるような気がします。とすれば、鑑賞を目的とした本かと思うのですが、じつは、この本のミソは左上の線で囲ってあるところ、つまり、どこの人である、ということが書いてあるところです。どういうことかと言いますと、そもそもこの本は『萬家人名録』という名前ですが、つまり人名録なんです。文化文政期以降になりますと、どういう俳人がどこに住んでいるということを記した人名録が、かなり出版されるようになります。なぜかという、当時の俳人たちの間では、俳諧を通じて色々な人々と文通することに対する興味が非常に強くなるからなんです。まあ、今の時代でもソーシャルネットワークワークで色々な人とつながるといことが流行っていますね。当時は、まさに俳句をコミュニケーションの手段にして、全国の俳人たちとつな

がるということが、彼らの非常に強い関心事だったんです。ですの、たんに肖像画を載せて楽しいというだけではなくて、きちんどこに住んでいるか、という情報が載るわけです。もちろん、肖像なんかなくて、俳号と本名と所付けというシンプルなものも多く出版されています。この『萬家人名録』は後編も出ていますが、後編には、蕪村の弟子の一人である月居という俳人が序文を寄せていて、「手紙というのは昔からあつたけれども、特に最近、都や田舎を問わず、大変多く飛び交うようになった」と言っています。

そして、たとえば同時期には、俳人用の手紙の文例集を趣向した『手紙 ぶぐるま集』などという俳書も出版されています。これは、例えば俳人同士で集まって花を見ながら句を詠もうと誘う、いまふうに言うとか行ですが、その吟行に人を誘うときの文例であるとか、それから行脚、つまり旅行をする際の挨拶の手紙の文例であるとか。中でおもしろいのは、俳号というのは大体漢字二文字くらいの俳号が多いので、全く違う人が同じ俳号を名乗ることがあるんですね。まだ会ったことのない、でも自分と同じ俳号を名乗る人に挨拶を出す手紙の文例もあります。その中身は、「はじめまして」のような挨拶ではじまって、「由来もある俳号でしょうから、お互いにその名前を変えないでがんばりましょう」といったことを書いて、「良い句ができたら私にも知らせてください。じゃあよろしくお願ひします」というような、結局は挨拶です。内容には、何か実質的な用事はとくにありません。こういうふうなコミュニケーションの手段として俳句を使って、そして知らな

い人たちともつながっていく、ということが非常に強い欲求として出てくるわけです。それが化政期から幕末にかけて、いわゆる大衆化といわれる現象ですが、本当に広い範囲の人たちが俳句でつながっていくという現象です。『萬家人名録』は、その先鞭をつけた本ですけれども、そこにきちんとして手銭さんと広瀬さんのご当主が参加しているということがおもしろい。こういう本を出版するときには、宗匠が企画を立てて参加者の募集をする。すると、応募者が自分の句や情報と、それから指定された金額のお金を一緒に宗匠に送るわけです。それを受け取った宗匠は、本を編集して、出版したものを本人に送るんですね。ですから、先ほど御覧頂いた本の袋に付いていた付箋は、この本が出来上がって、それを掲載されたご本人に送るときに付けた付箋です。それが剥がれずに残っていたということなんです。

この本は、なかなかおもしろい本で、凡例で「応募者の中には、きちんとした絵を送ってきた人もいれば、落書きみたいなものを送ってきた人もいた。もつとひどいのは、自分の年格好だけをメモで知らせてきた人もいた。そこで、場合によっては、こちらで勝手に想像して描きました。だからそれでご了承ください」というようなことをことわっています。クレームが



17. 萬家人名録(袋)

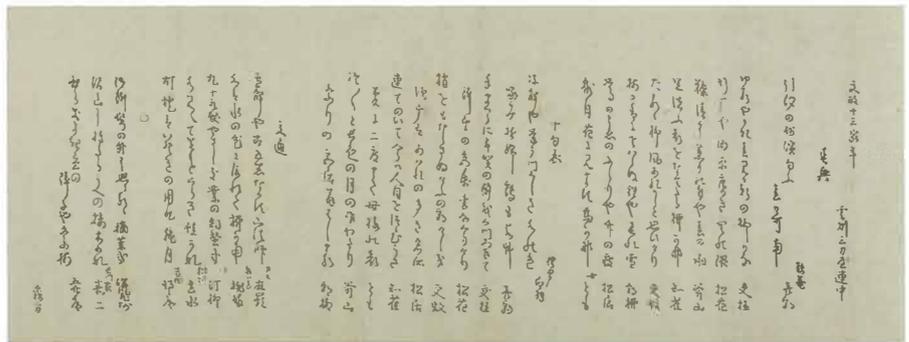
18. 萬家人名録(右)手銭有秀・(左)広瀬浦安

付かないように、ということなんでしよう。有秀さんも浦安さんも、大変立派に描かれていますから、きつと丁寧の下絵を描いて送ったんじゃないかと想像します。

さて、俳人同士をつなぐツールとしては、手紙が一番なんですけども、もう一つ、彼らが熱心に制作したものが俳諧一枚摺です。一枚の紙に句を印刷して、それでちょうど今の年賀状や暑中見舞いのように、俳人同士で交換するものです。直接会う場合には、手渡しすることもあったでしょうけれども、手紙と一緒に送るとのこと、俳諧一枚摺を交換するために手紙を送るということも盛んにやっています。

つぎにご覧いただく一枚摺は、先ほどから時々名前が挙がっております三刀屋の俳人のものです。彼らから手銭家に贈られたものが、手銭家蔵書の中に残っていたというわけです。つぎもそうですね。この二枚の三刀屋の摺物は句を載せるだけでしたが、つぎのもののように絵が入るものがたくさんあります。こうした俳諧一枚摺は、京都や大阪の俳書を出版する本屋さんに頼んであつらえることもあったんですが、この清地連の摺物はどうやらこちらの地元で作っているようです。先ほど芦田先生のお話で出版の中心は京都・大阪・江戸だったというお話がありました。もちろん一枚物ぐらいいたら自分たちでも作れるということ、おそらくこちらで作ったものだと思います。紙の質ですとか、それから印刷の精度であるとか、全体の雰囲気とか、そういった要素から推測することが可能です。

それから、つぎのものは白澤園連中とありますから、まさに手銭さんの俳諧仲間たちで制作した摺物です。右側に写っているのはその袋です。摺



19.



20.

物は、こうした袋に折って入れて贈る、というのが決まったスタイルです。袋はなかなか残らないことが多いのですが、手銭記念館に残っている俳諧一枚摺には一緒に袋が残っているものがあり、貴重です。

つぎも袋が残っている一枚摺ですが、この袋には三節と書いてあります。三節とは、歳暮、新年、それから新春の三つです。つまり、歳暮の句、新年を迎えた句、それから立春の句ですね。その三

つの句を入れて作ったものを三節の摺物と言います。つ

ぎの摺物も三節ですね。この袋には、先ほどから名前が出ております「さの子様へ」と書いてあります。タイトルの「玉の春」というところは印刷してあって、あとは筆で書いてあるんですね。下



22.



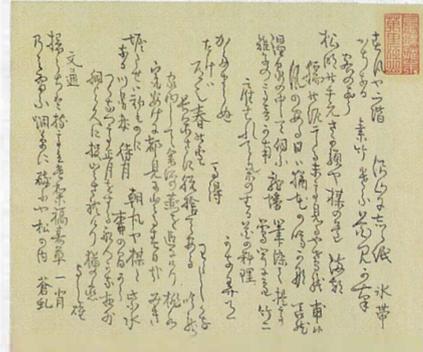
21.



23.



24.



が、この最後に載っている一肖と、蒼虬は、京都、大阪で活動をしていた有名な宗匠です。この二人の句には「文通」と前書きがあります。先ほどから申し上げていますが、俳人同士、手紙でやり取りをすることがすごく盛んになるので、離れた土地の宗匠とも手紙で句をやり取りをします。当時、俳人の手紙は、最後に、「自分が最近詠んだ句です」と何句か添えて書くというのが一つのスタイルとなっていたので、そういう手紙をもらって、

には月清と名前が書いてあります。実際に中身の摺物を見ると月清という人の句が載っている。月清が、自分たちの摺物を、さの子さんに差し上げたものだということがわかります。つぎもそうです。「さの女君」と書いてあります。それから、つぎの馬得たちの摺物です。

その句をメモとして取っておいて、こういう摺物や句集を作るときには、それを載せるのです。「文通」とは、「文通してもらった句ですよ」という意味の前書きです。そうすると、まあいわば箔付けみたいな形で、有名な、当時の一流の宗匠たちの句を、自分たちの摺物や句集に載せることができるというわけです。こうした一枚摺が、当時は本当にたくさん制作されました。記念館には、一枚摺の版木も残っております。今、展示に出ていますけれども、版木をあつらえて自分で持っていて、必要に応じて刷り増しもしたということ。たとえば、年賀状を、今はワープロで綺麗に印刷できますが、ちよつと前まではプリントゴッコなんていうのがありました。その前も芋版や木版で作ったりしましたね。そういうものの、いわば源流が、江戸時代の後期に流行るんですね。俳諧一枚摺なんて、あまり注目されていない資料体ですが、けれども、実はものすごくたくさん残っているはずなんです。こういうものは、文学としての俳諧を研究しようとする、どうしても芭蕉が中心になつてしまうため、省みられない資料です。しかし、俳諧を文化として捉えたときには必要不可欠の資料です。そういう資料が手銭家蔵書にはきちんと残っていて、当時の俳人たちの興味や関心の実態を知ることができる、大変貴重なことです。以上です。

田中・ありがとうございます。先ほどの子さんを取り上げるときに、歌壇、和歌のほうで取り上げましたが、その活動ぶりは、芦田先生からは

全国レベルだというお墨付きもあったのですが、佐々木さんはこういう資料を今調査しておられて、やっぱり子さんの俳諧のほうの業績というの、つながり、ネットワーク、そういうものも含めて出て来そうだという感じでしょうか。

佐々木・先ほどの子さん宛の一枚摺、あれは大社の人からのものでした。子さんの句はたくさん残っています。もしかしたら自選句集を出すつもりだったのか、題も付けて半分清書したような仮綴じのものも残っています。はっきりとはわかりませんが、俳諧が先だったので、なかなかという気もします。多分、中臣典膳が先生だったのではないのでしょうか。

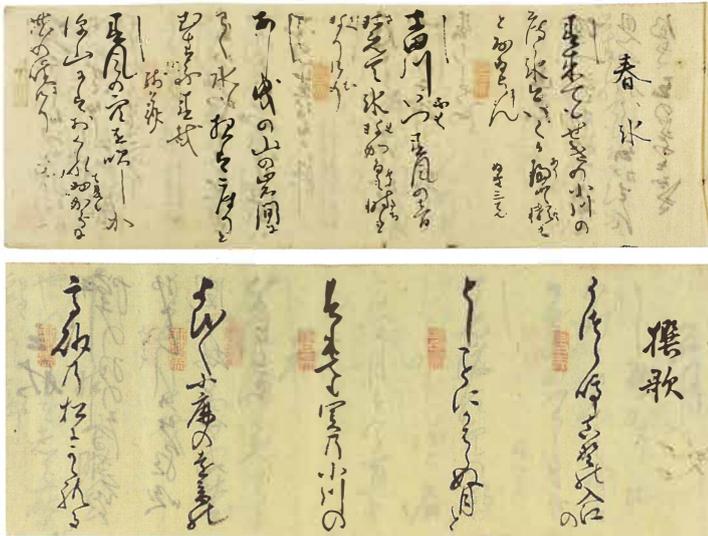
先ほど、芦田先生がマドンナ的な存在だったんじゃないかとおっしゃいましたが、子さんは肖像画があります。五代、六代の肖像画も残っていますが、どうも地元のお友達か誰かに描いてもらったようなもので、それに比べると確かにひときわ力の人った肖像画です。ここで子さんの旦那さんについてなにも言わないのはちよつと気の毒な気がして、これだけいろいろな人と自由に交流し創作活動することを許してくれた旦那さんというのは、本心に心の広い方だったなと思います。今回は全然取り上げていないのですが、ご主人の有頼さんの和歌の添削もたくさん残っていて、久保田先生にお聞きしたら、かなりのものだとおっしゃっていました。陰でできっちりやっていらした良い方だということを一言言っておきたいなと思います。

- 19. 一枚摺(三刀屋連中)
- 20. 一枚摺(清池連)
- 21. 一枚摺(白澤園連中)
- 22. 一枚摺(三節)
- 23. さの子宛一枚摺
- 24. 一枚摺(馬得し)

田中…ありがとうございます。今後、素敵な旦那様の頭彰にも努めないといいけないと思います。今、俳諧と和歌ということを両輪のように論じてきたつもりなのですが、どうもさの子さんのところでも俳諧と和歌、その両方が同時にあるということがわかってまいりました。しかしよく考えてみると、俳諧と和歌というのは当然ながら違うはずです。文芸として異なるもの、異なる性格で元来あるはずで。ところがそれがこのように一人の人の中、あるいは同じ地域の中で重なる人物たちの間で営まれていたということは、注目すべきことではないかと考えます。その辺りのことを久保田先生にお話いただきたいと思っています。

久保田…それでは具体的に資料に基づきながらお話をしていきたいと思っています。まずこれは手銭家にございます幕末の点取和歌の資料なんです、この資料には途中で「有軛ありとこ」という印鑑が出てくるわけです。そうしますとこれはおそらく有軛さん、つまり先ほどのさの子さんの旦那さんにあたる方なんです、この方の歌を並べたものである。最初に「春氷」という題があつて、そこで三首です。そしてその次、「残華」と題を書いてまた歌が並ぶ。このような形で題ごとに歌が数首並んでいるわけです。指導者がそれに対して評価をするので、最初の歌の「春来てもせきの小川の薄氷今いくかへて瀬々となるらん」、これに添削が入りまして「春来てもせきの小川の薄氷今いくかありて水とならまし」に変えてあるわけですね。そうやって右側に合点があります。これは先ほどお示した資料と似たような形ですが、問題はその歌の左側に赤い印が押してあります。これは「面白候」と書いてあるんです。つまり「面白

候」というこの三文字を彫った印鑑をポンと押してある。しかもその下に「ぬき三ばん」と書いてあります。これは「面白候」で、褒め言葉なんです。先ほど「尤候」とか「おもしろく候」という褒め言葉があるということを示しましたが、それがここでは印鑑になっているわけです。しかも「ぬき三ばん」というふうにありますのは、これは良い歌だから、あとで最後にこの歌は抜いておくんだと。



そして最後に「撰歌」として歌が並んでいます、その三番目に「春来ても関の小川の」が書いてあります。つまり「ぬき三ばん」とは、抜き出して三番目にこれを並べるといふことなんですね。撰歌というのは、この詠草の最後に、選んだ

25.

歌を並べるといふことなんです、まずこの和歌の点取の詠草として非常に不思議なのは、重要であるはずの褒め言葉が印鑑になっているということです。そして「ぬき」という言葉が使っている。もうこれは完全に点取俳諧の形であります。そしてこの最後の撰歌に並んでいるのは、「春来ても関の小川の」というように、五・七・五・七・七の最初の二句だけなんです。和歌というのは五・七・五・七・七七が揃って初めて意味を持つんですけれども、ここではそのうちの二句だけを便宜的に挙げてある。ということは、和歌の点取としての性格をほとんど失っている。形態としてはまさに点取俳諧の応用になっているということなんです。私もいろいろな資料を見てきましたけども、褒め言葉を印鑑に彫って、それをベタベタと押すというのは、これは先ほど伊藤先生のお話に出ました点印ですね、評価するのに印鑑をポンと押して、これで何点というふうに決める、まさにこれの応用であるということです、そういう形式の和歌の点取詠草というのは、本当に珍しいと思います。

次は「兼題詠草」という資料で、右端に「集書正家上」と書いてあります。これは、正家という人が皆から詠草を集め、それを清書して差し上げたということ。次に題があつて「遠村霞えんそんのかすみ」。遠い村の霞ということで、歌がずらっと並びます。一番左端にあるのは、漢字で「佐野」と書いてあります、これはさの子さんになるわけですけれども、このように集団で歌会をして、その記録をその中の一人が集めて、それを先生に出す。当然先生に出すときには、この名前が入っておりません。先生はこの名前のない詠草を見て、合点や添削を付け、そして褒め言葉を入れるんですが、やはりこれにも「面白候」があります。それから三

首目と五首目は、ちよつとよく見えないと思いますが、「よく調ひ候」と書いてあるんです。だからまさに点取俳諧と同じような、点印のような感覚で褒め言葉が捺してある。しかも「面白候」は先ほど有頼さんの詠草にあったものと全く同じですから、これはおそらく同じ人の指導の跡であるということがわかるわけです。

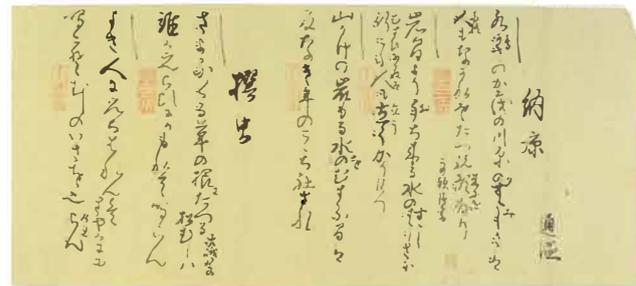
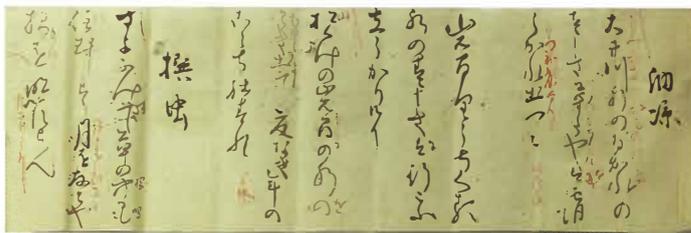
そして撰歌として二つの歌が、一番良い歌が書き出してあるわけですが、二首目の歌のほうでいきますと、印鑑は「珍敷候」なんです。こういう印鑑も作っている。こういう形でさの子さんやその周辺の杵築の人たちの歌会は指導を受けていたということがわかります。



5.

それから、「納涼」と「撰虫」の題で詠まれた詠草がありますが、これは本来の歌の指導の形を残すものであります。一方で、同題の通温(有頼)の詠草で「面白候」「よく調ひ候」の印を捺したのもあります。同じ時代と同じ場で、俳諧のやり方をそのまま採用して行われるものもあれば、本来の形の歌の指導も行われていた。二つの方法が両立しているということです。

和歌と俳諧というのは本来文芸としての地位が違っていたものであります。江戸時代の十八世紀ぐらいまでは、和歌は伝統的な文芸であり、俳諧は新興の文学、新しい文学ということで、はつき



27.

25. 和歌詠草(有頼)

26. 兼題詠草

27. 和歌詠草二種(ともに有頼)

【成果公開】

六七

りと序列があった。そして俳諧は遊びとしてやり、和歌は歌道の体現者として詠むんだという意識がおそらくあったと思うんですが、幕末になりますともう完全に同列の文芸として行われている。手銭家や杵築の周辺でいきますと、誰が指導したかということとは明確にはわかりませんが、こうことができるのはおそらく中臣典膳さんしかいない。和歌も俳諧もやり、そして手銭家には狂歌の指導をする資料も残っております。ですから中臣典膳さんは、和歌、俳諧、狂歌といった複数のジャンルで有頼さんやさの子さんと接触をした可能性が高い。中臣典膳の中では、三つの文芸の間には全然差がない。そういう位置付けになっていたであろうと思われるんですね。その具体的な例がこういう形で見えてまいりましたので、このあたりは決して手銭家あるいは杵築文学に限られたことではないと思います。ごく一例だけ言いますと、幕末の福井に橋曜覧という歌人がおりますけども、「たのしみはまれに魚煮て児等皆がうまいうましといひて食ふ時」などの有名な連作(独楽吟)があったりしますが、この人が自分の仲間の歌を集めて、先ほどの伊藤さんがお示しになったような刷り物にして出しているんですね。これはもうまさに俳諧の歳旦の形式をそのまま和歌に応用したものでございますけれども、こういうものが出てきております。ですから幕末にその二つの文芸が全く肩を並べるといえることは、おそらく全国的に探せば例がいろいろ見つかるだろうという見通しは持っております。その一番の手がかりがこの手銭家の資料に豊富に残されているということをご報告したいと思います。

田中・幕末において和歌と俳諧が同列のごとく扱われるという。これは注目すべき出来事であり、明らかに明らかになりはじめてきたところで、まさにその典型例がこの手銭家の資料から見取れるということですね。



伊藤：はい。いま久保田先生がおっしゃったように、俳諧から見ると和歌のほうが、ハイレベルなものです。同じ文芸でも、両者は明確に違うもので、俳諧のほうが大衆的だということですね。ただし、これまで、各地でいろいろな資料を拝見する機会を頂いているうちに、俳諧のほうが先に大衆化が進んでいって、そのことが、和歌のほうに、逆に影響を与える動きがあったように感じていました。つまり、文芸としては和歌のほうが大先輩で、和歌から発生した連歌からさらに発生したのが俳諧ということなんですけども、江戸時代の後期になると、繰り返しになりますが、俳諧が非常に大衆化していった、その俳諧の享受のあり方が、和歌の享受のあり方に影響を与えていたという側面があるように思うのです。出版のあり方であるとか、歌集の編集の仕方であるとか、先生と弟子の関係であるとか、ということですね。漠然

と、そういう傾向があるような気がしていた、何となく見通しはあったのですが、今回のこの共同研究の結果、明確にそういう事例が指摘できる段階になったように思います。とすると、単に手銭家の資料に限ったことではなくて、大きな文学史の流れを考えたときに、非常に新見ではないかと考えるわけです。これから久保田先生が論文におまとめになると存じますが、実はこれは大変面白いことであるということを一言申し添えます。

田中：ありがとうございます。江戸の文学史全体に関わるような問題のその糸口のところは実は手銭家の資料から見ると、決してローカルではないということがわかってきたかと思えます。

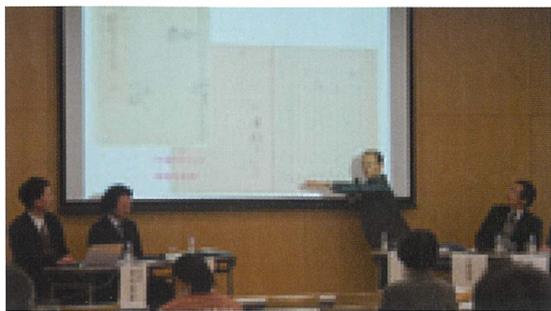
それではもう時間が少なくなってきたのですが、もし皆さまのほうから何かご質問などありましたら、お伺いしたいと思います。

大高：国文学研究資料館の大高です。まず、本日のシンポジウムをフロアから聴かせていただいた感想を簡単に申し上げます。私は一応関係者ではありますけれども、このシンポジウムの開催、内容には全く関わっておりませんので、申し上げてよろしいかと思いますが、非常に優れた内容だと思えました。私はこれまで何度もシンポジウムを経験してまいりましたが、各パネリストのおっしゃることを羅列的に並べて、問題を先送りするようなかたちで終わることがほとんどで、今回のように結論のはっきりしたシンポジウムにめぐりあったのははじめてです。特に最後に久保田先生、伊藤先生がおっしゃった事柄は、これは本日も来場の皆さまにぜひ申し上げたいのですけれど、

ども、おそらく学会で口頭発表されたとしても、会場にいる研究者の人たちに非常に強い刺激と感動を与える内容であろうと思えます。そういう優れた成果が、手銭家資料の調査研究を通じて、この場で報告されたことを、関係者としてたいへん嬉しく思います。

私はこれだけのことを言うために立つたわけではなく、一つご質問を申し上げます。手銭家の資料調査はこれまで和歌、俳諧を中心に行われてきたと言つてよいと思いますが、出版と絡めたときに、それらはなかなか商業的にペイするような性質のものではないでしょう。にもかかわらず、なぜこれだけたくさん出版されたのか。先ほど伊藤先生のお話の中で、私出版、地方版という話題もありましたけれども、文芸活動の成果を出版することについて、あるいはこの地における文芸活動が継続的に行われたことについて、パトロンとしての手銭家の役割というのも考えてよいのではないのでしょうか。

出雲にはもちろん両国造家がおられますので、その力は非常に大きいと思えますけれども、しかし手銭家が、出版について金銭的に援助したというようなことが少なからずあったのではないかと。そういう資料が、田中先生が基調講演の最後におっしゃいましたように、むしろ書簡と



か、文書とかをこれから詳しく見ていかれる中で、出てくることを期待いたします。反省も込めて申しますけれども、国文学研究資料館の調査は、従来、狭い意味での国文学関係資料を中心に行われてきましたので、文書類ですとか、国文学から見て周辺とされるような資料は対象からカットされてしまった。それがもう、全体を引っくり返してやらないといけないというところに来ているということも、今日のシンポジウムによって明らかになったのではなからうかと思えます。感想も一緒に申し上げましたけれども、もしパトロン手銭家ということについて、現在何かわかかっておられることがありましたら、お教えいただければ幸いです。

田中…佐々木さん、何か思い当たられるところはありませんか。

佐々木…実は、いろいろな方から、そういう資料はないのかと聞かれます。この間は、出版関係の研究などをなさっている方から、やはり版木はどこで彫ったのかとか、そういうことも金銭面の流れからわかるから、そういう資料も探してほしいということを言われました。これからののですが、がんばります。

田中…大高先生がご指摘くださったとおりで、私が把握したところに引きつけて申し上げますと、基調講演のところでも取り上げましたその子の書簡、富永芳久とのやり取りですが、その中でその子が芳久の風土記の著書を預かって、それでどうも販売のお世話をしているような文面があるのですね。その預かったお金を芳久に届けたというこ

とがありましたので。だからそういうものを丹念に拾い上げていけば、その書物や短冊や詠草、そういうものも含めてですが、文芸的な資料の後ろにある人の動き、営みというものがもともと見えてくるような感じがしております。今後の課題ということになるかと思えます。ありがとうございます。

原…ノートルダム清心女子大の原です。本日は本当にありがとうございます。一点ちよつと感想めいた話なのですが、源氏物語が今日の話でも出てまいりまして、手銭の子がそれを読んだということがわかってきたわけです。それと手銭の子について関わる話なのですが、彼女が写した『禪師発心物語』という、これは何とか御伽草子の公家物みたいなものがありまして、これがその子筆です。現在は確か島根大学の附属図書館でデジタル公開されていると思うのですが、全部を読んでもちよつと内容がわからないのですが、何でそういうことを申し上げるかといいますが、幕末から明治の初頭に、物語の需要が一時期かなり高まるのですね。それは源氏物語を読むということか、あるいはマイナーな物語を書き写すという行為で、幕末から明治初頭ぐらいに書写された物語というのが結構あります。私の勤め先でいいますと、黒川真頼、真道の旧蔵書がございます。それも大体その時期になるのですけれども、ふと思ったのが、『松壺文集』にも竹取物語と大和物語のことがありましたけれども、手銭の子は五十歳で亡くなるわけですが、もしもうちよつと長生きしたなら、他の地域のそういういた物語需要のトレンドの中で、源氏物語の研究とか、あるいは物語の書写とか、何かそ

う和歌と俳句以外のところにも目を付けているのかなというような印象を受けたのですけれども、その辺りはどうですか。例えば手銭家の湖月抄には書き入れ等ありましたか。

佐々木…湖月抄はかなりの書き入れがあります。それが誰の書き入れかはわかりません。いつ頃入ってきたのか。書き入れたものを購入した可能性もありますので、そこはちよつとわかりません。割と、雑文といったら失礼ですけども、文章を書くのは歴代好きだったようで、五代も六代もいろいろ書き残していますから、その子さんもそういう気持ちはあったかもしれないですね。

原…『禪師発心物語』がもし、その子が作った物語であれば、なおのこと面白いと思うのですが。それが証明できないもので、ちよつと困っています。

佐々木…そうですね。とにかくこれまでの調査では、まずはどういものがあるかということをしることをメインです。今後そんな大量に見つかることは多分ないと思えますので、これから内容についての研究をしていかななくてはならない。ということ、とりあえずまず和歌と俳諧に足を踏



み入れたところです。やらなければいけないことが段々増えて、ありがたいような、大変なような。今後、調べていきたいと思えます。

田中…まだまだご質問はあろうかと思いますが、時間が迫ってまいりまして、申し訳ないのですが、まじめに入りたいと思えます。今日いくつかの角度から手銭家の蔵書をめぐって、文芸活動との関わりというところを見てまいりましたが、最後に先生方から一言ずつ頂きたいと思えます。

伊藤…はい。手銭家の蔵書を拝見する機会に、出雲の俳諧全般にも興味を持ち、まず桑原視草先生の『出雲俳句史』を読みました。桑原先生は、明治以前の出雲俳壇について、全国的地位から言えば甚だ低くかつたと、たいへん厳しく評価なさっています。桑原先生が強い郷土愛をお持ちだったことは、その文章の端々からうかがえるのですが、それでもなお厳しく評価なさっていた。しかし、その桑原先生がご覧になれなかった資料を、今、拝見することができました。そうすると、桑原先生のおっしゃるように低いことは決してない、むしろ全国的な俳諧史の流れにきちんと乗っていたり、出雲独自の俳壇状況があったりしたことがわかりました。特に百羅の持ち込んだ去来系の伝書は注目します。ただし、その全貌は、まだまだよくわからない。手銭家の蔵書だけでなく、この地域にもつとあつたはずの資料が今でもどこかに眠っていないかどうか、そのことも視野に入れながら、勉強を続けていきたいと考えています。

佐々木…今回の展示、皆さま見ていただいたかと

思えます。どうしてこんなにたくさん並べなければいけないんだろうというほどの点数になってしまったのですが、今日お話を聞いていただいた方はおわかりいただけたかもしれませんが、結局あれだけ展示しなければ伝わらない質と量が、江戸時代の出雲の文芸にあつたということを伝えられた。明治維新を挟んで色々なことが一新されてしまつて、江戸の出雲の生活というのは本当にわからなくなつていて、何もなかった暗黒の地みたいな気がついてしまふんですけれども、これだけ豊かで先進的な文化があつたこと、それを自分の三代か四代か前のご先祖がやつていたことだということを、もつと子どもたちや若い人たちにも知ってもらいたいし、それを自覚しながら残してつなげていってほしいと、展示しながら思いました。そのためにもこういう調査とか研究は本当に必要なことだと思えますし、資料の発掘という点でも皆さまのご協力が、必要になってくると思つています。

久保田…先ほど大高先生からお話がありましたけれども、一般に国文学の研究者というものは、文書を怖がつて扱わないという傾向があります。一方で歴史の人たちは文書は一生懸命やるんですが、本を全く扱わない。だから結局、元は同じ文化の産物であるにもかかわらず、その書物と文書という形態の違いだけで、歴史と日本文学の研究者が全然交流もなく調べているというのが現状でございます。ですから例えばこの手銭家のものを、歴史家、そして我々、特に俳諧と和歌でも全く交流がないということが多いので、今回は伊藤先生と私とで非常に良いコンビを組むことができて良かったと思えますが、こういう形の異文化、ある

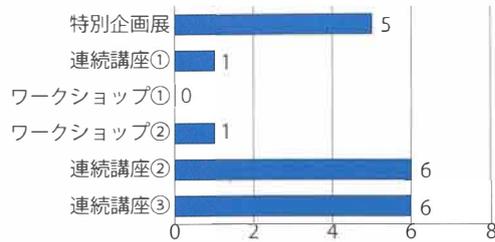
いは異業種が連携して調査するというのが非常に大事なんだなというのを改めて感じました。以上でございます。

芦田…まず出雲の和歌というところで説明いたしました和歌発祥の地。それから『出雲国風土記』が現存、杵築大社。この三つに私は尽きると思えます。大阪に住む人間からみれば、出雲地方、大社地方は何と豊かな地域かということですね。これは佐々木さんに先に言われてしまつて残念なんですけれども、もつともつと「大社とはこういうところだよ」ということを、胸を張つて言つていただきたいなあというように私は思いました。特に手銭さんのところの調査を通して、そういうことをひしひしと感じました。以上です。

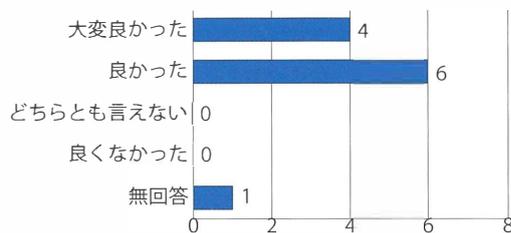
田中…今日のお話を通じまして、もう日本全国レベルの文芸の歴史に関わるような問題についての掘り起こしが、この手銭家の資料を通じてできそうだという道が見えてきたと思えます。そういう意味で決して一地域の一つの旧家に留まるものではないと。その資料から多くのことが見えてくる。その当時の人の営みというものが見えてくるし、全国とのつながりということも、ここから見えてくるように思えます。手銭家の資料を一つひとつ紐解いて、そこに誰が出てきて、何をしているのかということを見てまいりますと、本当に江戸時代のこの大社の地域の人たちが生き生きと文芸を楽しんでいる、そういう姿が見えてくるように思えます。本日は長時間にわたりご清聴くださいまして、誠にありがとうございます。先生方、ありがとうございました。(場内拍手)

## アンケート集計結果 (抜粋)

### ■ シンポジウム以外に参加した催しについて (複数回答)



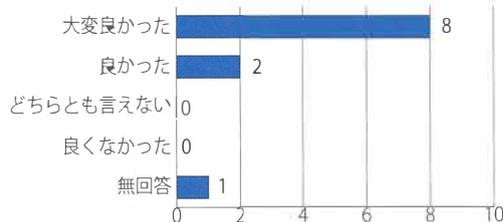
### ■ 講演の内容について



#### 【コメント】

- ・わかりやすくまとめてあり、大変ありがたかった。初回の講義は未知で逃したが、専門外の者にも、11月・12月の資料を見直していたせいか、理解できたようである。
- ・知らないこと、位置づけがはっきりしないことがはっきりできた。系図があればもっとはっきりした。
- ・大変わかりやすかった。
- ・京の二条流、蕉門の杵築への伝播の過程がよくわかった。歴代の文芸の受容の概要がよくわかった。

### ■ パネルディスカッションの内容について



#### 【コメント】

- ・10月13日の久保田先生の日には拝聴していないが、共同研究により、「点と線」がつながってきたのがよくわかった。大社を中心とする出雲文化圏に改めて驚かされた。王朝文学などは少々なじみがあるが、近世文学に親しむチャンスは余りなく、その意味でも意義があり、感謝したい。更に聴衆が増えればと思う。ミニ学会以上で、専門家も来られていたのだろうか。レベルが高いと痛感した。
- ・コーディネーターが上手い。まとめもいい！
- ・時間が長い。基調講演40分、協議90分ではよいのではないか。
- ・おもしろい話が聞けて良かった。

### ■ 今後、希望する催しについて

- ・文芸のみならず、江戸期の生活や背景にもフォーカスを当てたものもうかがえればありがたいです。資料は江戸期のもののみでしょうか。
- ・講座のように、お話をうかがってから展示を拝見できると大変おもしろく、勉強になります。今後もこのような機会を設けていただけるとありがたく思います。お料理の再現や謡の体験も珍しい企画で、今度はぜひ参加してみたいです。
- ・希望する。杵築文学。人間の姿が躍動する文学。
- ・大社の史話等へ紹介して下さい。
- ・手銭家にこんな文書があったとは知りませんでした。今後も講演会、展示会など開催されることを望みます。楽しみにしています。

### ■ その他自由意見

- ・とてもレベルの高いシンポジウムで、もっと宣伝していただき、多くの人に参加してほしいと思いました。私は、島大の図書館でチラシを入手しました。それでも気付いたのは10月後半頃で、聞き逃したのは大変残念でした。
- ・ボリュームたっぷりの充実したシンポジウムだったと思います。もう少し大勢の方に聞いていただけるとよかったです。
- ・今後に期待しています。
- ・山陰中央新報文化欄等へ、事前広報も兼ねて、発表者の寄稿を願います。
- ・PR不足です。こんなすばらしい話、聞きたい人、知りたい人はたくさんいらっしゃると思います。残念です。もったいない……という感想です。今後ともたくさんの人に見聞きしてもらいたいと思います。

## デジタル化資料リスト

今年度は、『萬日記』の翻刻作業を進めるために同資料をデジタル化した他、特別企画展「江戸カー手銭家蔵書から見る出雲の文芸」において展示した資料を中心にデジタル化を行った。デジタル化した資料の内、公開可能な資料は島根大学附属図書館デジタル・アーカイブから公開し、閲覧可能となっている。このデジタル・アーカイブは、島根大学が所蔵する史資料だけでなく、山陰地域の機関や個人が所蔵する史資料を公開するプラットフォームとして、デジタル・コンテンツの収集を進めている。

島根大学附属図書館デジタル・アーカイブ URL: <http://www.lib.shimane-u.ac.jp/0/collection/da/da.asp>

資料名称	
蔵書資料	
誹要辯	一冊
百人一首聞書安永二卯月三月開講	一冊
俳諧根本式	一冊
深秘十八体	一冊
芳野行	一冊
発句点取帖	一冊
萬家人名録(五冊)	一冊
和歌添削帖	一冊
芭蕉翁行状記	一冊
春帖集	一冊
題志羅須	一冊
和歌	一帖
俳諧点取	一帖
蕉門発句十五味 募句ちらしあり	仮綴一帖
俳諧伝書【竹翁】	仮綴一帖
和歌御会始	仮綴一帖
桂園一枝	2丁
清輔奥義抄	4丁
四季詞林こしあふ起	2丁
草野集	2丁
俳諧御傘	2丁
陸奥衢	2丁
新撰基経大全	4丁
東坡絶句	2丁
四節季寄并去嫌歌	2丁
和歌詠草	一帖
和歌添削	一帖
和歌集	一帖
点印譜	一帖
一枚摺等	
一枚摺【多岐連中】	1枚
一枚摺(文政十三年)【三刀屋連中】	1枚
一枚摺(天保三年)(両面)【〃】	2枚
一枚摺【清地連中】	1枚
一枚摺	1枚
狂歌文【蓑笠翁】	1枚
三元【〃】	1枚
手紙【浦安】	1枚
句文【古川凡和】	1枚
和歌詠草(六首)【さの子】	1枚
和歌添削(七首)【さの子】	1枚
三節(懐紙・短冊)	1枚
一枚摺「玉の春」	1枚
「三節」【千海】	1枚
歳旦三句【加藤梅年】	1枚
一枚摺「三節」【さの子・安秀】	1枚
一枚摺(和歌)「三節」【津守比由留】	1枚
和歌歳旦【島重老】	1枚
狂歌歳旦【島重老】	1枚

資料名称	
萬日記	
永代萬日記	一帖
萬日記二	一帖
萬日記三	一帖
萬日記四	一帖
萬日記五	一帖
萬日記六一一	一帖
萬日記六一二	一帖
萬日記七	一帖
萬日記八	一帖
萬日記九	一帖
萬日記十	一帖
萬日記十一一一	一帖
萬日記十一一二一一	一帖
萬日記十一一二二二	一帖
萬日記十一一三	一帖
茶の湯関連	
大円庵様御一代御會記	一帖
懐石控	仮綴一帖
備忘録	仮綴一帖
奈良絵本/歌仙絵/掛物	
くまののほんち巻の一	一冊
くまののほんち巻の三	一冊
くまののほんち巻の五	一冊
三十六歌仙画帖	一帖
百首御詠【千家尊孫】	一帖
祝儀寄書【千家国造家・上宦】	双幅
芭蕉像 賛・百蘿庵茂竹	一幅
祝儀の句文【百蘿】	一幅
祝儀の句文【茂竹】	一幅
狂歌歳旦【典膳】	一幅
手銭有秀肖像	一幅
手銭有芳肖像	一幅
蔵書資料	
さの子宛尺讀	一卷
有頼宛尺讀	一卷
時津風	一冊
俳諧すがた見	一冊
極秘俳諧初重傳 一	一冊
蕉門俳諧大意 ふもとの塵	一冊
落柿舎遺稿発句十五篇	一冊
落柿舎遺稿続篇突	一冊
俳諧有也無也関	一冊
誹諧狂菊抄	一冊
松葉日記 一	一冊
松葉日記 二	一冊
愛屋免日記	一冊
さりつ文集	一冊
葡萄棚	一冊
有や無やの関 巻の上	一冊

資料名称	
添削資料等	
和歌・発句詠草	仮綴一帖
和歌詠草「上」春氷～	仮綴一帖
「四季農句集」発句詠草	仮綴一帖
和歌詠草 早苗～	仮綴一帖
和歌詠草(十月十五日)	一卷
和歌添削	一卷
和歌添削	一卷
和歌添削(十月十五日)	一卷
和歌詠草	一卷
短冊	
小短冊三枚組	1枚
短冊七枚裏打【季硯】(両面)	2枚
短冊八枚裏打【有秀・有芳】	1枚
短冊八枚裏打【野塘】	1枚
発句短冊八枚裏打【季硯】	1枚
発句短冊【季硯】	1枚
和歌短冊【敬慶】(両面)	2枚
発句短冊【野塘】	1枚
和歌短冊【さの子】	1枚
発句短冊【〃】	1枚
発句短冊【〃】	1枚
和歌短冊【〃】	1枚
発句短冊【〃】	1枚
発句短冊【〃】(両面)	2枚
和歌短冊【有芳】	1枚
和歌短冊【通唱】	1枚
和歌短冊(両面)	2枚
和歌短冊【さの子】	1枚
発句短冊【〃】	1枚
発句短冊【〃】(両面)	2枚
和歌短冊【〃】	1枚
和歌短冊【〃】	1枚
発句短冊【雪淀】	1枚
発句短冊【浦安】(両面)	2枚
発句短冊【〃】(両面)	2枚
誹諧の箴【白澤園】	1枚
誹諧の箴【有秀】	1枚
発句短冊【有鞆】	1枚
発句短冊【有鞆】	1枚
和歌短冊【手銭長康】	1枚
和歌短冊【敬慶】	1枚
和歌短冊【〃】	1枚
和歌短冊【有秀】	1枚
和歌短冊【〃】	1枚
発句短冊【〃】	1枚
発句短冊【〃】	1枚
発句短冊【〃】	1枚
発句短冊【蓑笠翁】	1枚
発句短冊【〃】	1枚
和歌短冊【小豆沢常悦】	1枚
和歌短冊【〃】	1枚
和歌短冊【〃】	1枚
和歌短冊【春信(百羅)】	1枚
発句短冊【節山】	1枚
計209点	

資料名称	
一枚摺等	
一枚摺「都つと」【手銭有鞆】	1枚
三節(懐紙・短冊)【徳義】	1枚
一枚摺	1枚
和歌三節【清年】	1枚
和歌三節【島重老】	1枚
狂歌三節【島重老】	1枚
一枚摺	1枚
一枚摺	1枚
一枚摺	1枚
一枚摺(春興)	1枚
一枚摺	1枚
一枚摺(玉の春)	1枚
包み紙	1枚
歳旦三首【島重老】	2枚
和歌歳旦【島重老】	1枚
狂歌歳旦【島重老】	1枚
一枚摺【手銭季硯他】	一帖
狂歌歳旦【中臣典膳】	1枚
歌文【清年】	1枚
発句 三節	1枚
和歌【春信】	1巻
歌文【久豊】	1巻
発句【浦安】	1枚
賀節【〃】	1枚
句文【〃】	1枚
発句【節山】	1枚
はうた	1枚
敬慶和歌	1枚
有鞆大人宛手紙	1枚
句文「鰐淵寺紅葉狩」【茂竹】	1枚
狂歌「鰐淵寺紅葉狩」【典膳】	1枚
和歌「鰐淵寺紅葉狩」【重老】	1枚
不老山紅葉記	仮綴一帖
添削資料等	
発句添削	仮綴一帖
発句添削	仮綴一帖
発句	仮綴一帖
発句添削	仮綴一帖
和歌添削	仮綴一帖
和歌添削【さの子】	仮綴一帖
和歌添削【〃】	仮綴一帖
和歌添削【〃】	仮綴一帖
和歌添削【〃】	仮綴一帖
文久二年「花濃夢」有鞆	仮綴一帖
和歌添削	仮綴一帖
詠草紙	仮綴一帖
句集	仮綴一帖
手中心おほへ【さの子】	仮綴一帖
兼題草稿	仮綴一帖
かたがたのせうそこうつし【さの子】	仮綴一帖
ちとせの舎 御せうそこ【さの子】	仮綴一帖
四季混雑(誹諧)	仮綴一帖
句会記録「良夜[口偏に金]」	仮綴一帖
俳諧之連歌(宝暦10年9月29日)	仮綴一帖
誹諧連歌	仮綴一帖

## 『萬日記』翻刻化

## 萬日記について

『萬日記』は、手銭家当主らが代々書き継いだ記録で、内容は、御触書、落への書状など公的な書類の写しから、家業に関わる諸事、冠婚葬祭などの私的行事、様々な噂話まで多岐に亘り、現在のところ、宝暦二年六月から明治九年までに書かれた十五冊が確認されている。

内訳は、『永代萬日記』、『萬日記 二巻』～『萬日記 十一巻』で、このうち『萬日記 六巻』は二冊、『萬日記 十一巻』は三冊に分かれている。また、『永代萬日記』は明和期から天明期までの内容の抜き書きであるように思われる。

## 今年度の作業経過

本年度のプロジェクトでは、この『萬日記』の内容を把握し今後活用していくためにまず全ページをデジタルデータ化し、全翻刻に向けて年代を追って順番に下読み作業を開始することとした。

デジタルデータ化は、有限会社山陰マイクロ・コピーセンターに依頼し、四月下旬から六月末にかけて順次行い、合計丁数は五七一二丁であった。

翻刻下読みは『萬日記 二巻』から始めることとし、島根大学法文学部小林准士教授を中心に、ゼミ生、院生、卒業生など十名にお願いし、七月に第一回の研究会を開いて、それぞれ担当ページを振り分け、各自読み進めて貰うこととなった。

その後、九月に研究会を開いたほか、小林ゼミでの解説会を行いながら作業を進めている。



9月27日『萬日記』研究会（島根大学附属図書館）

## まとめ

今年度、『萬日記 二巻』の下読みを終了することを目標としていたが、現在のところ、全八〇三丁のうち約半分の三九六丁にとどまっている。

主な理由として  
 ・さまざまな事柄が脈絡なく書かれているため、頻繁に初出の言葉があり、類推が難しいこと  
 ・当主以外の手もあり、文字の崩し方などに違いがあること

が挙げられ、難読箇所が多く予想以上に難易度の高い資料であることが分かった。下読みでこれだけ難読、誤読があると、それを校正していく為に結局最初から読み直す必要があり、時間も労力も倍以上になってしまいう可能性がある。そこで、今後、翻刻を効率的に進めるためには、方針を立て直す必要があると考える。

来年度、『萬日記』翻刻を継続するにあたっては  
 ・それぞれが個別に読むのではなく、複数で相談しながら読むことで、難読箇所を類推、解説しやすくする

・最終的には全翻刻が目標だが、資料の活用を考えるのなら、まず通読して目次を作り（殆どの巻に予め目次が付けられているので、この作業は比較的簡単に行えるであろう）、年代順に進めるだけでなく、必要な部分、やりやすい部分などを見ながら翻刻していく

・特に学生に対しては、内容、文字の両面で読みやすい部分を選択して、翻刻、解説のテキストとして、今後の研究等の資料として提供するとともに、下読み作業に引き続き参加してもらう

といった方法が考えられる

また、同じく手銭家に残されている『御用留』と対比することで、『萬日記』に唐突に記載されている記述の、理由や経緯が分かってくる可能性が高いので、今後、『御用留』のデジタルデータ化を行うことが必要であると思われる。

今年度の作業によって、『萬日記』をより活用するための問題点とヒントが見えてきたことで、来年度の作業はより効率的に行っていけると考える。

## 総括

今年度事業全体について総括する。

『萬日記』全巻および文芸関係資料については予定通りデジタル化し、公開可能な資料は、島根大学附属図書館デジタルアーカイブ上で公開した。

資料をデジタル化したことにより、閲覧や情報の共有が容易になり、これまでなかなか踏み出せなかったシンポジウムや連続講座といった外部との共働企画の企画・実行が出来た。

萬日記の翻刻については、予定していた『萬日記 二巻』の下読みは終了せず、内容に関する研究にも進めなかった。

所蔵資料から、埋もれていた地域の歴史や文化を掘り起こし発信してゆく事は、このプロジェクトの目的の一つである。今年度の反省を基に、より効率が良く資料の活用にも繋がる方法を考える必要がある、「萬日記翻刻化」ページで述べたようなやり方を試みながら、翻刻を継続していきたい。

もう一つの柱とした、企画展とそれに関わる事業は、予定通り進められた。

展覧会の準備を進める中で、これまで知られていなかった資料が和歌と俳諧両方の分野で複数見つかった。江戸時代中期から後期の本社における文芸活動の有り様を具体的に示すこれらの資料に関して、八月にはメンバーによる研究会を行い、和歌においても俳諧においても、本社では他所とは異なった独自性を持った活動が行われていたことが明らかになった。

連続講座では、講師がそれぞれの資料についての解説や質疑応答をおこなうギャラリートークの時間を設け、参加者には好評だった。また、シンポジウムの参加者からは、連続講座、シンポジウムを聞くことで展示資料の面白さが分かったという声もいただいた。

このように、新たな資料も含めて、展示、連続講座、シンポジウムという形で発表できたことは、地域の歴史と文化について新たな視点や認識を示すという点でも、資料の意味と重要性を理解してもらうことで、地域に残る資料の一つでもおおく拾い上げてゆくという点でも、おおきな意味があったと思う。

調査研究を継続し深めてゆくうえで、当時の経済活動や藩とのやりとりなどを示すような周辺資料調査の必要性が指摘された。今後、手つかずになっている歴史文書関係の整理・調査にも取りかかるべきであろう。

今年度は企画展関係資料を優先しており、デジタル化の必要な文芸資料はまだ膨大に残っている。資料活用、資料公開の為に、文芸資料をはじめさまざまな資料のデジタル化を継続してすすめていきたい。

全体の反省点としては、参加者の人数が伸びなかったことが一番に挙げられる。企画展、連続講座、シンポジウム、各ワークショップともに、広報が足りないという指摘をおおく受けた。

各イベント内容についての評価は概ね好意的であり、次の機会にも参加したいという意見もおおくいただいているので、今後も継続することで、地道に参加者を増やしていくことも一つの方策ではないかと考えるが、宣伝・広報についても少し工夫が必要なのは確かである。

資料の活用、外部への発信については、地域の多様なグループとの共働を図っていくことが不可欠であるが、所蔵茶会記を利用した料理のワークショップは、その点において色々な可能性が感じられる企画だった。

来年度以降、調理関係者、文化史研究者などにも加わってもらい、江戸時代の茶懐石や出雲のさまざまな料理を検証し再現していく、といった、『萬日記』だけでなくその他の所蔵資料をも活用した企画、事業が考えられる。

また、島根大学附属図書館などでの巡回展示や、他地域の展示機関での展示公開が出来ればと考えている。具体的な計画、協力機関との交渉等はこれからだが、可能性を探っていきたい。

調査・研究を継続することでよりおおくの情報を汲み取ってゆくとともに、それらを具体的にどのように活用するかが次年度の大きな目標である。

―手銭家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業―  
平成26年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書

出雲文化活用プロジェクト実行委員会

会 長	手銭白三郎	公益財団法人 手銭記念館 理事長
副会長	田籠博	国立大学法人島根大学 学術情報機構附属図書館長
副会長	吹野卓	国立大学法人島根大学 法文学部山陰研究センター長(法文学部教授)
理事	要木純一	国立大学法人島根大学 法文学部山陰研究センター研究員(法文学部教授)
理事	野本瑠美	国立大学法人島根大学 山陰研究センター研究員(法文学部准教授)
監 事	田中俊二	国立大学法人島根大学 学術情報機構附属図書館 図書情報課長
事務局長	手銭裕子	公益財団法人 手銭記念館 事務局長
事務局員	佐々木杏里	公益財団法人 手銭記念館 学芸員
事務局員	昌子喜信	国立大学法人島根大学 学術情報機構附属図書館 企画・整備グループリーダー

2015年3月31日発行

---

編 集…出雲文化活用プロジェクト  
編集補助…連 和加子(TENZEN)  
総括文責…佐々木杏里(手銭記念館学芸員)  
デザイン…breath

発 行…公益財団法人 手銭記念館

〒699-0751 島根県出雲市大社町杵築西2450-1  
Tel/Fax: 0853-5312000

---

編集：出雲文化活用プロジェクト／発行：公益財団法人手錢記念館

